

目 次

明治学院大学 ボランティアセンター報告書 第7号 2010

学長挨拶	1
センター長挨拶	3
I. 2010年度活動報告	
ボランティア依頼の受け付けと学生の参加促進への取り組み	7
2010年春期・夏期「国際機関実務体験プログラム」	9
日米NPOボランティア体験学習プログラムについて	12
ボルネオスタディーツアー2010	16
ソニーマーケティング学生ボランティアファンドについて	20
聴覚障がい学生支援について	21
【白金校舎ボランティアセンター報告】	
学生による報告	
チーフ報告	
白金校舎学生スタッフ活動報告	25
全体活動報告	
白金合コン2010	27
合宿・研修会	29
プロジェクト報告	
しろかねサラダ（旧志田町倶楽部学生チーム）	31
MGパール	33
MG☆SUZU	35
MG natural	37
COS（Circle of Shirokanaise）	39
山黒	41
卒業学年報告	
4年間を振り返って	43
山黒の黒	44
こんなはずじゃなかった!!	45
小さなきっかけから大きな宝物	46
<寄稿> 「めいがくのすきま展」報告	47
コーディネーターによる報告	
リレートーク～白金ボラセンから広がる輪～	48
白金校舎学生スタッフホームページについて	49
2010年度を振り返って	50

【横浜校舎ボランティアセンター報告】

学生による報告	横浜校舎学生スタッフ活動報告……………	57
コーディネーターによる報告	小田急分譲地の地域活動への関わり……………	62
	「戸塚区民市」を拠点とした地域と学生の協働の進展 ……	63
	大木農園での農作業の取り組み……………	64
	地域密着型プログラム「とつかプロジェクト」への支援…	64
	横浜市立倉田小学校への訪問授業……………	66
	地域作業所「パン工房Ange」とのコラボレーション……………	66
	2010年度を振り返って……………	67

【ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2010】

「ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2010」の審査と中間報告 ……	71
「Do For とつか」……………	72
地域密着型フェアトレード推進プロジェクトについて……………	74
お茶べり - Free♥Will - ……	76
地域交流から国際交流の芽が生える ……	78
白金アートミュージアム……………	80
白金の魅力発見！Deep Map……………	82

II. ボランティア調査

新入生のボランティア意識 - 「新入生ボランティア活動アンケート」から ……	87
--	----

III. ボランティアセンター資料

2010年度 ボランティアセンター行事一覧 ……	101
各委員等一覧 ……	103
明治学院大学ボランティアセンター規程……………	104
ボランティア情報の取り扱いに関する方針……………	107
明治学院大学ボランティア情報システム利用規約……………	110
明治学院大学ボランティアセンター 団体登録票/VIS利用申込書 ……	112

ご挨拶



学長 大西 晴樹

明治学院大学はキリスト教による人格教育を建学の精神とし、その教育理念を一言で表現するならば 'Do for Others' 「他者への貢献」と言い表しています。これは、新約聖書の言葉であると同時に、明治学院の創始者 J.C. ヘボン博士の生涯を貫く理想を表現したものです。

ヘボン博士は、幕末維新の日本へプロテスタント・キリスト教を伝えるべく 150 年前に来日したアメリカ人宣教医師です。医師としてニューヨークで成功を取めながらも、開国したばかりの横浜に上陸しました。当時の日本は尊皇攘夷の嵐が吹き荒れ、まだキリシタン禁令の高札が掲げられていた時代です。身边にはスパイが潜入し、クララ夫人は何者かに殴打され心身ともに傷を負ったことさえありました。それでも博士は聖書の言葉に堅く立って、無償で弱者への施療活動をなし、患者との出会いを通して日本語を学び、夫人とともに青少年に英語を教えるべく明治学院の前身であるヘボン塾を開設し、日本最初の本格的和英・英和辞典である『和英語林集成』を編集・出版、ついに聖書を日本語へ翻訳したのでした。

さて、明治学院大学の教育活動で、'Do for Others' という教育理念を直接体現するのがボランティア活動だといえましょう。1990 年代前半の明治学院大学においてボランティアは、いく人かの教員によるリレー方式の総合講座として、現場ではなく、教室で教えられていました。しかし、1995 年の阪神淡路大震災を契機として、ボランティア活動の重要さが認識され、ボランティア活動を正課であれ、課外であれ、明治学院大学において推進することに学内のコンセンサスが与えられました。じっさい明治学院大学は、震災後、明治学院ゆかりの神戸の賀川記念館を拠点として延べ数百名の学生を現地に派遣し、おもに子どもや老人のケアに献身的に当たり、神戸の復興に間接的ながら貢献し、参加した学生に多くの感動を与えました。その後 1998 年に横浜キャンパスに全国の大学に先駆けてボランティアセンターを開設し、2001 年には、白金キャンパスにも開設しました。また全国の大学におけるボランティア活動を支援するソニー・マーケティング学生ボランティアファンドの事務局として中心的な役割を果たし、

2003年には優れた教育活動に対して競争資金が与えられる文部科学省の第一回目の特色 GP (good practice) に選ばれました。

現在、ボランティアセンターは、白金と横浜のボランティアセンターを拠点にいくつかのプロジェクトを立ち上げ、コーディネーター、学生スタッフを中心に日常的な活動を推進しています。また、ボランティア情報を紹介するためにメールマガジン「MG ☆ボラマガ」を配信しており、その登録者は2011年1月現在321名（学生272名、教職員が49名）を数えます。

明学生の自発的なボランティア活動をさらに支援するため、「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」を実施しています。大学グッズの売り上げの一割が大学からボランティアセンターに委託され、この賞の原資となっています。応募団体によるプレゼンテーションを中心とした審査会には、私も審査委員として参加しますが、熱のこもった発表を聞くことができます。

ボランティアセンターでは、海外でのボランティア活動にも力を入れています。毎年カリフォルニアに派遣するアメリカ NPO ボランティア 体験学習プログラムはテーマを定め、地元の NPO 活動の一翼を担い、日本のわれわれが置かれている問題との共通性を考えようとしています。

学長としてみなさんにお伝えしたいのは、'Do for Others' という教育理念は「言うは易し、行うは難し」です。ボランティア活動は、相手に感謝されてはじめて意味をもつのであり、そうでなければ、一人善がりのお節介か、たんなる自己満足にすぎません。ボランティア活動を通じて、自分たちの 'Do for Others' の気持ちが、どれほど地域や近隣の人々に感謝されるのか考えてみるのは、他者を理解するうえで大切なことであり、もし感謝されていなければ、どうしたら感謝されるのか、試行錯誤することは、人間の成長にとって大切なことです。

明治学院大学の教育理念を体現するボランティア活動に、ボランティアセンターを通じて参加することによって、学生の皆さんがお金では買えない大切なものを手に入れることを切に願っています。

センター長挨拶

ボランティアセンター長 原田勝広

内容が盛りだくさんの2010年度報告書をお届けできることを誇りに思います。私がボランティアセンター長になって1年たちましたが、教育の視点から学生と社会貢献活動のかかわりの重要性が今ほど議論されている時代はないのではないかと思います。

例えば、国際協力機構（JICA）は大学生らにボランティアなど学校以外の活動に従事する期間を与える「日本版ギャップイヤー」制度の提言をまとめようとしています。大学に合格したあと、実際に入学する前に1年間、学生に福祉の現場でのボランティアや、途上国支援など世界を知るための海外ボランティアを奨励しようという試みです。教室では得られない知識を社会での体験を通して学ぶというのが目的といえます。

また、法政大学元総長の清成忠男氏は、人口減少社会の中で大学の在り方を問い直すべきだとの考えから、社会的課題の解決に向け「大学が持つ知的能力を生かし、ソーシャル・イノベーションを推進する」ことを提案しています。この構想で学生の果たす役割が大きいことは間違いありません。

しかし、こうした社会の要請に対し、大学および学生の意識、活動が十分に応えられているかという点、必ずしもそうとは言い難いと思われまふ。そこにはいくつかの課題があります。明治学院大学は、無償で弱者への施療活動を行ったヘボン博士の「Do for Others」を教育理念とし、1995年の阪神・淡路大震災で現地に多くの学生が駆け付けたのを機に、他大学に先駆けて学内にボランティアセンターを設置しました。これまでの活動は多岐にわたり、充実したものといえます。詳しい説明は他のページに譲りますが、特に、白金、戸塚という大学周辺の地域コミュニティとの関係を構築するなかでの、ボランティア活動は、周辺住民の方々からも高く評価されているものです。ボランティアセンターでは、先輩の教職員、多くの学生が営々と築き上げてきた歴史と伝統を守り、これを引き継ぎながら、さらなる発展を目指したいと考えているところです。

その中で、感じる問題点のひとつが、新しく入ってくる学生の一部に見られるボランティアに対するイメージのゆがみです。一言でいえば、ボランティアを非常に狭い枠の中でとらえています。ボランティアのもとになっている基本はボランティア精神です。人のために、社会のために何かしたいと思う心です。身の回りでいえば、電車の中でお年寄りに席を譲ること、大きくいえば、途上国の貧困を解決するために国連で働くこと、これらはすべてボランティア精神の表れでしょう。

しかし、ボランティアといわれて、新入生が思い浮かべるのは、公園の清掃であり、高齢者施設への慰問なのです。高校の総合学習などでボランティア体験を取り入れるところが増えてきたため、「いやいやながら」ボランティアをした経験がトラウマになっているケースが見られます。こういう学生に話を

聞くと「ボランティアは敷居が高すぎる」「ボランティアは好きじゃない」という答えが返ってきます。強制的にやるのは本当のボランティアとはいえません。こうした雰囲気を感じるせいか、入学後、積極的にボランティアにかかわっている学生も、ボランティアという言葉をあまり使いたがりません。

私はこれは大変不幸な事態だと感じます。誰でも、困っている人を見たら、助けたい、役に立ちたいという気持ちは持っているものです。こういう気持ちが人と人の関係をよりよいものにし、コミュニティを成り立たせているといっても過言ではないでしょう。日本の社会には、さらに、地球規模でも、そういうボランティア精神がなくては解決できない問題が山積しています。そして、今、そこには、多くの人たち、ボランティア団体、非営利組織（NPO）、非政府組織（NGO）、政府、国連、さらには企業が協力の輪に加わって、いろんな社会問題を解決すべく努力しているのです。

そこで、冒頭述べました社会の「新しい風」に、どう対応したらよいか、ボランティアセンターでは考えました。明治学院大学ボランティアセンターのこれまでの実績をベースに学生にボランティアをもっと広い枠の中にとらえてもらおう。そういう中で、教育プログラムとして何か生み出せないか。そして、私たちは気付いたのです。ボランティア精神の発露は多様であるはずだと。この1年間で企画を何度も練り直し、ようやく新しいプロジェクトを立ち上げることにしました。

新入生を対象にした「1 Day for Others—まちへ出よう」がそれです。2011年度スタートです。5月14日に、新1年生が一齐に、戸塚の街、神奈川県下、さらには東京へと“同時多発”的に繰り出すのです。「ボランティア・コース」「社会起業家コース」「企業の社会貢献・CSR体験コース」の3つのコースがあり、30プログラムを用意しています。連れて行くのは1年次上の新2年生のリーダー学生です。希望によって、ボランティアを体験するもよし、ビジネス手法で社会貢献に挑戦している最近注目の社会起業家のところで1日インターンを経験するもよし、誰もが知っている大企業で、利益を追い求めるだけではなく、社会に貢献しようとしている業務の研修をするもよし、というわけです。

たった1日の活動ですが、これをきっかけにして、何のために、何を勉強するのか。そして、自分はどのような学生生活を送りたいのか、どんな人生を送りたいのか。改めて、じっくり考えてほしいのです。そのことを通して、これからの学業、サークル活動、ボランティア活動につなげてもらいたいと思います。そのためにボランティアセンターはみなさんに助力を惜しみません。

新入生は毎年入ってきます。このプロジェクトが4年続けば、学生の多くが、これを体験済みということになります。その時、大学がどう変わるか、社会と大学との関係がどう変化しているか楽しみです。

何か新たな価値が生まれるとしたら、それこそが、本来のボランティアも持つ意味であり、大学におけるボランティアセンターの役割だと、私たちは考えています。そして、そのために、全力を尽くしたいと思います。

I . 2010 年度活動報告

ボランティア依頼の受け付けと学生の参加促進への取り組み

1. ボランティア募集团体の登録について

ボランティアセンターでは、ボランティア募集团体に「団体登録」（詳しくは、<http://voluntee.meijigakuin.ac.jp/recruit/index.html> を参照）の手続きを依頼している。団体や募集情報の確認や修正のため、今年度は3年に一度の更新作業を実施した。149団体が再登録し、2011年1月の時点での登録団体は238である。

2. ボランティア募集团体による説明会の開催

今年度は海外スタディツアー（地球市民 ACT かながわ、地球の友と歩む会、Caring for the Future Foundation Japan）や国際ワークキャンプ（NICE）、障がい児の余暇支援活動（横浜市社会福祉協議会）、みなとみらいクリーン大作戦などの活動を紹介する説明会を計4回、横浜ボランティアセンターが主催となり実施した。説明会では、活動経験のある学生から体験談を紹介することで、参加者が実際の活動にスムーズに入れるような工夫をした。その結果として説明会への参加率の向上がみられた。

3. キャンパス近辺の活動の参加促進

白金・横浜両センターとも「キャンパス近辺・オススメボランティア情報」を年間に2回作成し、キャンパス近隣の活動への参加を促した。横浜センターにおいては、明学生の活動実績がある活動先を「オススメボランティア情報」として紹介することで、活動を身近に感じられるような資料づくりの工夫をおこなった。そのほかに白金センターでは、毎年9月に開催されるスリランカフェスティバルにあたり、50名の学生がボランティアとして参加し、横浜センターでは戸塚地域で行われる夏まつり等に述べ人数で45名の学生が関わるなど、地域と学生の交流が進展した。（白金、横浜両センターが進める地域との協働した活動については、本書25ページ～68ページを参照）

4. メールマガジンによる情報提供

今年度は通常号、ボランティア情報号、臨時号を合わせて、合計22回の配信をおこなった。内訳としては毎月1日に配信する通常号（センターの主催行事やイベントの案内、学生スタッフやその他の学生から寄せられた情報等が掲載）が10回、毎月15日に配信されるボランティア情報号（センターが登録している外部団体から寄せられる新着ボランティア情報の紹介）が11回、主に学生からの寄稿による臨時号を1回配信した。また、2011年1月31日現在、登録者数は321人であり、うち学生は272人、教職員は49人である。2006年度からスタートしたメールマガジンによる情報提供が安定的に進んでいる一方、窓口に来室する学生のなかにも、メールマガジンの存在を知らないケースも見られるので、今後さらに広報を充実させる必要がある。また学生や教職員が求める内容をタイムリーに配信できるよう、さらに努力していきたい。

5. サークル・グループの特技を生かしたボランティア

センターでは、学生と地域の交流・協働を促進するために、学生サークル・グループと地域のニーズをつなぐコーディネートをおこなっている。今年度の活動状況は以下の通りである。

学生サークル・グループ	地域の活動先
〔JUNKO Association〕	グランフォーレ戸塚自治会「桜まつり」(4月4日)
〔なんとかなるさ〕	グランフォーレ戸塚自治会「桜まつり」(4月4日)
〔JRP〕	グランフォーレ戸塚自治会「桜まつり」(4月4日) 舞岡自治会の夏祭り(8月8日) 横浜市立倉田小学校はまっ子ふれあいスクール「クリスマス会」(12月17日)
〔管弦楽団〕	横浜市上矢部地域ケアプラザ(7月10日、3月2日) 横浜市上倉田地域ケアプラザ(12月20日) 地域子育て拠点ととの芽「クリスマス会」(12月24日)
〔落語研究会〕	東京都江東区古石場福祉会館(9月20日)
〔マンドリン〕	神奈川県立鎌倉養護学校(8月27日)
〔手話サークルぽっけ〕	横浜市立東戸塚小学校「秋まつり」(11月14日) 横浜市中倉田地域ケアプラザ(2月20日)
〔チアリーディング SCARETS〕	横浜市立東戸塚小学校「秋まつり」(11月14日)
〔吹奏楽部〕	港区青少年対策高松地区委員会「ふれあいミニコンサート」(3月5日)

今年度は管弦楽団が年間4回訪問演奏して、主に戸塚地域との交流を深めた。特にJR東戸塚駅前の子育て支援施設「ととの芽」からの依頼で実現した管弦楽団による演奏は、小さいお子さんを抱えているため、生の演奏を聴く機会が少ないお母さんたちに大変好評であった。戸塚の大規模マンショングランフォーレ戸塚自治会が主催する「桜まつり～未来に残そう桜並木」では横浜学生スタッフをはじめ、横浜キャンパスを拠点に活動する上述の4つのサークルが関わり、マンションの住民と明学生の交流が生まれた。この祭りで学生のパフォーマンスをみた住民が東戸塚小学校の「秋祭り」にも学生を招待するなど、地域との交流が広がっている。

6. まとめ

センターの方針である地域との協働の推進が、白金・横浜両センターとも進展していた。また参加促進の手法として今年度試みた活動経験のある学生、明学生の活動実績のある団体と協力しておこなった説明会は効果的であったので、今後も引き続き実施し、学生の地域参加を拡大していきたい。(市川)

2010年春期・夏期「国際機関実務体験プログラム」～参加学生の学びと活動の広がり

1. はじめに

本ボランティアセンターでは、2004年度より（財）横浜市国際交流協会（YOKE）と共催で「国際機関実務体験プログラム」を実施している。本プログラムはYOKEが横浜市内に集積する国際機関の活動を広く市民に周知する目的で市内の大学に協力を呼びかけたことにより始まり、プログラム全体のコーディネートをおこなうYOKE、受け入れ機関である国際機関、学生を派遣する大学（明治学院大学、横浜国立大学、横浜市立大学、フェリス女学院大学）の3者が協働で運営している。本稿では学生を派遣する大学の立場から、ボランティアセンターのプログラムへの関わり、プログラム参加によって得られた学生の学びと成長、プログラム修了学生の活動の広がりを中心に報告したい。2010年度の報告書であるが、春期プログラムが年度の変り目のため、2010年の春期と夏期について記す。

2. 2010年春期・夏期プログラムの実施状況

2010年春期には国連大学高等研究所（UNU-IAS）、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）、夏期には国連食糧農業機関（FAO）、（財）横浜市国際交流協会（YOKE）の計4機関で各1名の学生が参加した。参加学生の募集は大学が2009年10月（春期）と2010年5月（夏期）に行い、書類選考と個人面接を経て決定した。プログラムに携わるYOKE、国際機関、大学の役割とスケジュールは【表1】としてまとめた。

3. プログラムから生まれた学生の学び

本プログラムでは「国際交流や協力の実務体験を経験することにより、大学で習得した学問と現場での実践の融合及びその応用、国際性豊かな資質と世界的な問題を視野に入れて活動できる人材の育成」を目的としている。学生はあらかじめ国際機関が用意した活動を遂行することとなるが、プログラム全体として、オリエンテーション、実務体験、中間研修会、最終報告会が組み込まれており、学生たちはオリエンテーション時に設定した研修テーマと目標を意識しながら活動を進めていく。研修テーマと目標を明確にして国際機関での活動に取り組むことにより、本センターでは、特に国際機関での「体験」を「学び」へと昇華することを目指している。またそのプロセスにあたっては、プログラム全体を運営するYOKE、受け入れる国際機関、学生を送り出す大学がそれぞれの立場で支援している。例えば、春期に国連大学高等研究所の「国際里山イニシアチブプログラム」に配属され研修した学生は、当初研修テーマを「国連大学に溶け込み、与えられた役割を全うする」という、漠然とした考えで進めようとしていた。しかし、中間研修の際にコーディネーターが、「国連大学高等研究所の環境プログラムだからこそできる、あなただからこそ掘り下げられるテーマをぜひ見つけてほしい」と助言したところ、研修の後半では、国連大学のスーパーバイザーの指導のもと「中東の環境問題」をテーマにして取り組むこととなった。これはイラク人を父親にもちアラビア語ができる学生の特性と国連大学で配属されたプログラムの

内容を反映させたものであった。中東の環境問題に絞って調査を進めた結果、学生は「イラク南部のメソポタミア湿原の荒廃」という事実を発見した。イラクで進む環境破壊については紛争の影に隠れて国際社会からの注目されることが少なく、国連大学のスタッフであっても十分に認識している事柄ではなかったが、学生は研修の成果として今後国際社会はイラクで進む環境破壊にも関心を持つ必要があることを、報告会の場で示していた。

夏期にFAOで研修をした学生は、紛争解決や平和構築に興味がありプログラムに応募した。研修ではアフガニスタンやパキスタンの農業支援を専門とするスーパーバイザーのもとで問題意識を深め、「アフガニスタンの食糧不安にみる農業支援」というテーマで研究レポートを作成した。プログラムを通して学生は、紛争解決においては戦争状態が解消されたあとに人々の生活をどのように安定させていくかが大切であり、農業の復興は人々の生命の維持につながる重要なテーマであること、プログラムに参加する以前は、国際社会が抱える問題と学生の実家で営んでいる農業が抱える問題は別々のものと捉えていたが、農業を社会のなかで持続的に発展させることの重要性や課題については、双方に共通性があることを学んでいた。

4. プログラムをきっかけとして、生まれたアクション

ボランティアセンターは、プログラムで得た学びをもとに地域社会や大学コミュニティに対してはたらきかけることもバックアップしている。春期にIUCで研修した学生はプログラム参加を通して自分の身近な場で日本人と外国人との交流や相互支援関係を築くことが重要と考え、日本人学生とアジアからの正規留学生との交流活動を大学内で作った。これはマレーシア出身の留学生であるボランティアセンター横浜学生スタッフとともに発案し、周囲の学生たちと協力しながら取り組んだものであるが、たくさんの協力者を得ながら今年度大きく発展することとなった。(詳しくは、本書「ボランティアセンター横浜学生スタッフ報告」57～61ページ参照)

夏にYOKEで活動した学生は、行政、NPO、学校など多様なアクターによって進められている横浜における在住外国人支援について、明学生に知ってもらいたいという考えから、本センターでおこなっているボラセントークDayで活動報告をおこなった。さらに、活動中に訪れた支援現場のNPO(信愛塾)や学校(富士見中学校)、行政(なか国際交流ラウンジ)の取り組みと学生が果たせる社会的役割を紹介する資料を作成し、支援の現状と課題について、広く学生が知る機会を作った。ボラセントークDayには、大学近隣の戸塚在住の外国につながる子どもを支援する学生グループ「こ・こ・ろ」のメンバーが多く参加し、学生同士の経験交流の場となった。

5. プログラムの影響の広がり

プログラム参加学生は、事後活動としてYOKE主催の国際機関の活動紹介セミナー「地球市民講座」に企画段階や当日の運営スタッフとして関わることで、学生の視点からアイデアを出すなど、国際機関と学生を結びつけるパイプ役として国際機関との絆を深めている。

また本年は2006年度春のプログラム参加学生がセンターを訪れ、プログラム参加が大学院での研究に発展したと報告があった。その卒業生は現在では東京大学大学院の博士課程に在籍し、FAOやJICAと連携しながら開発援助の影響評価の研究を進めている。プログラムが目指している「大学で目指した学問と現場での実践の融合及びその応用、国際性豊かな資質と世界的な問題を視野に入れて活動できる人材の育成」が具体的な姿として現われている例といえよう。

6. まとめ

本稿ではプログラムを通じた学生の学びと社会的な広がりについて、大学のボランティアセンターの視点から述べてきた。今年取り組みを通して学生は国際機関での「体験」を「学び」として昇華し、その学びの成果を生かして「行動」することで社会への貢献につなげていく、プログラムの社会的な意味が見えてきた。

今後はさらにYOKE、国際機関、学生、大学が連携を深めながら、国際的な視野で問題解決に取り組む学生の育成に向けて、努力していきたい。

【表1】「国際機関実務体験プログラム」スケジュールと役割分担

プログラム説明会[大学] 春期:2009年11月 夏期:2010年5月	・YOKEからプログラム及び国際機関での研修内容の説明 ・大学VCから、応募方法の説明とプログラム修了学生から体験談の紹介
学生の選考[大学]	・書類審査及び面接
大学オリエンテーション[大学] ★ 春期:2009年12月、2010年1月 夏期:2010年6月、7月	・学生の研修テーマ設定の準備 ★ ・国際機関の活動に関する事前学習 ★ ・研修上の留意点の伝達
学生と国際機関の面談[国際機関] 春期:2009年12月 夏期:2010年7月	・国際機関の概要と研修内容の説明 ・研修スケジュール(100時間)の作成
YOKEオリエンテーション[YOKE] 春期:2010年1月 夏期:2010年7月	・4大学合同の学生顔合わせ ・プログラム趣旨及びスケジュールの確認、研修時の心構えと注意事項の伝達 ・研修テーマと目標を学生が発表 ・合意文書と研修スケジュール(100時間)の提出
国際機関での実務体験[国際機関] 春期:2010年2月～3月 夏期:2010年8月～9月	[活動先] 春期:国連大学高等研究所(UNU-IAS)、 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター(IUC) 夏期:国連食糧農業機関(FAO)、(財)横浜市国際交流協会(YOKE)
中間研修会[YOKE] 春期:2010年2月 夏期:2010年8月	・国際機関、学生、大学担当者による3者面談 ・YOKEと大学担当者の合同ミーティング ・国際機関見学(参加学生)
最終報告会[YOKE] 春期:2010年3月 夏期:2010年9月	・学生による研修成果のプレゼンテーション(国際機関、大学担当者同席) ・YOKEと大学担当者の合同ミーティング
報告書[YOKE] 春期:2010年3月 夏期:2010年9月	・プログラム参加から得た学びと今後の課題をまとめる (YOKE、国際機関、大学に提出)
プログラム総括会[大学] ★ 春期:2010年3月 夏期:2010年9月	・活動の成果と課題に関する振り返りと考察 ★ ・プログラム参加による影響の広がり考察する(ワークショップ形式) ★

★は本ボランティアセンターが独自に実施しているもの

(市川)

日米 NPO ボランティア体験学習プログラムについて

1. はじめに

本プログラムは 2005 年度からスタートし、2006 年度以降は体験学習プログラムとして工夫と改良を続けてきた（詳細はボランティアセンター 2005 年度、2006 年度、2007 年度、2008 年度、2009 年度報告書を参照）。今年度で 6 回目の実施となったが、この期間、学部の垣根を超えて多くの学生たち（主に 1、2 年生）が、プログラムの参加を通して様々な体験を共有し、社会について思考し、社会的活動に関わるための基礎力の向上を目指して、奮闘してきた。その結果、学生たちは社会参加のきっかけを見出したり、自らも活動を立ち上げたりしている。また、彼らの進学や就職などにも影響を与えており、卒業後もその経験を活かしたり、同期のメンバーだけではなく修了生同士のつながりも創られたりしている。また、本プログラムは、当初からプログラムパートナーとして共に歩んでくださっているアメリカ NGO 法人日本太平洋資料ネットワーク（以下、JPRN）をはじめとしたアメリカの NPO 及び関係者の皆様、そしてセカンドハーベスト・ジャパン（以下、2HJ）と、特定非営利活動法人ビッグイシュー基金（以下、ビッグイシュー）をはじめとする、日本の NPO 及び関係者の皆様のご支援とご協力を賜りながら、成長と変化を続けてきた。このようなプロセスの過程において、本プログラムは大学当局からも、授業科目としての開講を目指した議論の対象となっていくた。そして昨年度のボランティアセンター規程改定において、センターが学生への情報提供および助言という「つなぎ」としての役割に重点を置いた業務から、共通教育機関としてのボランティアセンターへと大きく踏み出すことになったことによって、この議論は一気に現実味を帯びることとなった。具体的には、新規程において新たに「業務」に加えられた項目のうち、(1)「サービス・ラーニング・プログラムの企画、実施」に該当する（詳細はボランティアセンター 2009 年度報告書参照）。さらに、本学心理学部は 1 年から 4 年まで一貫して白金校地での教育を実施してきたが、2010 年度から、1・2 年生科目を横浜校地で開講することとなり、明治学院大学の 6 学部生すべてが横浜スタートとなった。このようなプログラムおよび、環境の変化とタイミングが重なり、来年度（2011 年度）秋学期（後期）より、当プログラムは単位認定科目として、横浜校舎で正式に開講する運びとなった。

以上のように、「結果」として本プログラムは科目として、来年度から新たなスタートを切ることになったが、そもそも本プログラムは、科目化することを目的としてスタートしたものではなかった。したがって、スタート時にはこのような帰結を、誰も予想できなかつただろう。したがって、今回の科目化が、上述したようなプロセスにおいて実現したものであるということは、本プログラムが最も誇るべき点であり、今後もその根底にある部分を引き継ぎながら、成長と変化を続けていきたいと考えている。つまり、本プログラムに関わる全ての人々——参加学生、日米の NPO およびその関係者、本学教職員、その他本プログラムを評価し、支えてくださった様々な方々——の、5 年に及ぶプロセス

の結果としての変容であり、評価のカタチであるにとらえない。奇しくも本プログラムは「貧困」と「マイノリティ」をテーマに設定しているが、昨今、社会でしきりに叫ばれている多様な立場の人々の「つながり」の構築や「共生社会」の実現へのヒントを、本プログラムも孕んでいることを確認できたことについて、感謝と責任を意識しながら今後も進めていきたい。また、本学は2013年に150周年を迎えるが、今回の科目化を通して、長年蓄積してきた教育理念である「Do For Others（他者への貢献）」の多角的な議論と実践が可能であることと、本プログラムの礎となっていることを改めて確認できたことは、今後の大きな糧になるだろう。そして言うまでも無いが、今回の科目化は、全ての関係者の皆様の今までのご支援とご協力の賜物である。そして引き続き、今後の新たなステージへ参画してくださることに對し、心から感謝する。

ボランティアに関する「学び」は、単なる現場の出来事の整理に終わってはならない。また「実践」が、無自覚なエゴ活動であってもならない。現場に立ち、思考し、協働的实践を織りなすとはどのようなことか。本プログラムは、科目化された後も、引き続き受講生らが、日米での理論と実践の中に身を置きながら、「振り返り」を重視し、その過程で自身の相対化を繰り返し、「見えていないもの」を見る力を養い、自らが学びと成長を探求し、将来的なコミュニティへの貢献力の素地を培うことを目指す。そして、「ボランティアは良い事」という無条件なパラダイムを孕む危険性も含めて、ボランティアを複眼的に検討し、実践の創出を促す機会となることも目指していきたい。

2. プログラム実施報告

本プログラムは実施期間が11月から7月であるため、本書でプログラム全体を報告することができないが、本稿では2009年度プログラム（2009年11月～2010年1月の内容については「明治学院大学ボランティアセンター報告書第6号（2009）」参照、本文では2010年2月～2010年7月までを報告）、2010年度プログラム（2010年11月～2011年1月現在までを報告）について扱う。

2-1. 2009年度プログラムについて

事前課題や事前準備を経て、参加学生は2010年2月、アメリカ、サンフランシスコ・パークレーへ向けて出発した。帰国後ミーティングでは、アメリカでの様子や学びを全員から報告してもらい、参加者全員で改めて共有した。同時にアメリカで受け入れを引き受けてくださっているJPRNと現地での学生の様子や個々の出来事や成長を確認しながら、帰国後のプログラムの方向性について報告・相談を重ねたことで、よりきめ細やかな指導とフォローが可能となった。また、2009年度より新たに、ビッグイシューの全面的な協力のもと、「道端留学」を本プログラム用に構成し、帰国直後のプログラムとして加えることができた。これはホームレスだけが販売できるストリートペーパー「ビッグイシュー」を販売者の方々と一緒に渋谷の路上に立ち、販売を体験するというもので、活動の前後にはスタッフ

の方と販売者の方の講義、スタッフの方々とのディスカッションと発表が含まれる。前年度までは帰国後すぐに報告会の準備に入ったのだが、今年度は帰国直後に日本でプログラムを加えたことで、昨年度まで解消できなかった、参加学生たちの日米における経験と価値観の偏りを改善することができた。こうして約4か月間の日米における理論と実践を通じた学習と、現場と役割の往復を繰り返しながら、参加学生たちは自らの意見をアウトプットし、共有するプロセスを通して、少しずつ自身を客観的にとらえ、社会や他者の存在を内在化していく経験を積んでいった。そして新学期が始まったころには大学近隣の地域の運動会やお祭りに事前準備から関わったり、当日も他の学生たちをとりまとめるなどの動きが見られるようになったりした。それは、同時に進行していた報告会の準備にも影響し、日米での学びを自身の日常に落とし込んでいながら考察できるようになっていった。例年、不慣れた海外での集団生活を通して、学生たちは否応無しに人間関係構築のプロセスにおける楽しさと難しさを経験し、その時どのように対応するのか自らの判断が問われる。同時に、多くの参加学生たちが「このプログラムの中で最も重要で最も学びの多かったプログラム」だと口にする、毎晩のミーティング（振り返り）を通して自らを振り返り、出来事を客観的に分析し、発言する力と傾聴する力を養う。2009年度の参加学生たちは、渡米中の共同生活の中で起こった「衝突」を事例に「共に生きる」というテーマで、現地でのミーティングの様子を再現する方法で全体発表を行った。彼らは、同じ大学に通う学生でさえ、それぞれ価値観も生き方も異なっているという経験を通して、自分とは「遠い」存在に対してではなく、まさに自分たちと「同じような」存在に対してこそ向き合うことが難しいことを痛烈に感じたのである。そして、その視座を確認した上で、自分たちとは一見「遠い」存在に対してどのように向き合えるのかを考え、行動し始めたのである。それは、本学の教育理念である「Do For Others（他者への貢献）」について、深く悩み、考えるプロセスでもあった。それは、学生たちが帰国後からしきりに口にしていた、「なんだかモヤモヤする」という発言からも伺える。本プログラムは、どちらかと言えば学生たちに「スッキリ」ではなく「モヤモヤ」を与えることを目指している。「モヤモヤ」することで、学生たちが自ら思考し、文献収集や情報検索などの原動力につながり、何らかの行動につながることを期待している。換言するなら、学生に「答え」を与えるのではなく、彼らが「答え」を「探す」という、大学の基本的な学びの構造に依拠したアプローチを実施できただけかもしれないが、2009年度プログラムを通してこの手ごたえを具体的に得ることができたのは、今後に向けた大きな成果であった。例えば、毎年参加学生たちに任意で協力してもらっている最終アンケート中の、「このプログラムの魅力を一言で表現するなら何ですか？」という質問項目に対し、「断崖絶壁から突然落とされる。それでも這い上がる。」「潜在能力の開花」「“学”です。学ぶことが多すぎるプログラムです。」「未完成。プログラムは終了しても、これから繋げていくべきことばかりだから。」といった回答が寄せられたことは、彼らが本プログラムの目的とねらいを理解してくれた証として、来年度に向けた何よりの励みとなった。一方、2009年度の反省としては、プログラム終了後の協力団体との意見交換を通

して、プログラムで設定している以外のボランティア活動をはじめとした社会経験を積むことが、特に渡米中のプログラムの充実のためには必要不可欠であることを確認することができた。しかし、単に、プログラムの中でボランティア活動を増やしたり、学生に「強制的に」行かせたりするなどの措置が適当であるとは考えにくく、課題を改善するための方法とその導入については工夫が必要である。

2-2. 2010年度プログラムについて

2010年度プログラムでは、選考の結果、7名の参加学生が決定した。内訳は男子1名、女子6名であり、男子が2年生、女子は全員が1年生である。例年、男女の割合では女子の応募が圧倒的に多い傾向は変わらないが、このように参加学生の大部分を低学年（1年生）が占めたことは今年度が初めてである。今年度も2HJ、ビッグイシューより推薦いただいた4冊の指定文献に対するレポート作成や、2HJ 協力プログラムとして、2HJ で実施している炊き出しプログラムへの参加（準備から配給、後片付けまでの活動参加及び受給者の方とのコミュニケーション、理事長を始めスタッフやボランティアの方々との振り返りミーティング）、理事長であるチャールズ・E・マクジルトン氏による講義が行われた。また、今年度は1年生が多いことから、渡米前の筆者による講義もボランティアをテーマとし、講義後のディスカッションと発表では議論の視座だけではなく展開の方法やヒントについても取り上げた。そして昨年度の課題として明らかになった、プログラムで設定されている以外のボランティア・社会経験の獲得とその機会の提供という点において、新たな展開を見出すことができた。具体的には、オリエンテーションや日々のメーリングリストにおいて、プログラム担当者（筆者）から様々な情報（特に、本プログラムでお世話になるNPOやプログラムテーマに関連するボランティア活動や講演会など）を提供し、これらの機会に筆者も参加する旨も一緒に流した。また、プログラム修了生と白金学生スタッフのメーリングリストにも同じ情報を流した。すると、一緒に参加したいと申し出る学生が現われ始めた。そして12月、ビッグイシューのクリスマス会に2009年度の修了生と2010年度の参加学生とが参加したことによって、1月に行われた「ビッグイシュートレイン」という、企画の参加につながった。活動後も意見交換の場で発言したり、アイデアを提案したり、学生として何ができるのか、彼らなりに具体的に考えるようになっていった。そして来年度（2011年度）5月の実施を目指して、2HJの協力のもと、初めて「フードドライブ（事前のプロモーション活動の後、食糧を集めてフードバンクに寄付をするイベント）」を学内で実施する企画委員会を、2010年度参加学生有志が中心になって立ち上げる運びとなった。今後は渡米し、JPRNの協力のもとサンフランシスコ・バークレーで共同生活を送りながら、各種プログラムに参加し、帰国後はビッグイシューの協力のもと「道端留学」、報告会の開催と報告書執筆を予定しているが、今年度は今まで帰国後にみられた学生たちの物事の見方や、それに伴う自発的な動きを渡米前に見出すことができた。学生たちの新たな可能性について、今後も期待しつつ、彼らを全力でサポートしていきたい。（李）

命をつなぐ緑の回廊～パールの森プロジェクト ボルネオ・スタディツアー 2010

ボルネオ島は3カ国にまたがり、北東部はマレーシアのサバ州、サラワク州、ブルネイ、南側はインドネシア（東カリマンタン州・西カリマンタン州・南カリマンタン州・中央カリマンタン州）に分かれる。赤道直下にあり、面積は約74万平方キロメートル（日本の2倍）で、世界で3番目に大きな島（1番目はグリーンランド、2番目はニューギニア島）である。熱帯雨林は生物の生産性が高く多種多様な動植物が生息し、生物多様性の最も豊かなエリアと言われており、ボルネオオランウータン、テングザルなどボルネオ固有種も多い。しかし近年、ボルネオは1990年代からアブラヤシのプランテーションの開発が急速に進み、保護区は分断化されており、野生動物は個体数の減少だけでなく、遺伝子の多様性が失われている。一方、アブラヤシから採取されるパーム油は食用、洗剤、バイオ燃料など日常生活でよく使われており、発展途上国の人々の重要な糧となっている。持続可能な資源利用を考えるとともに、野生生物の絶滅を防ぐために、すぐアクションを起こす必要がある。ボルネオ緑の回廊プロジェクトは、キナバタンガン川・セガマ川沿いにある保護区、保存林の間にある土地（2万ha）を確保し、野生動物が自由に移動できるようにするもので、現地のボルネオ保全トラスト（以下、BCT）がプラットフォームとなっている。土地の確保は、違法占拠地に対して行政への返還を働きかける、使用していない土地は所有者に行政への寄付を呼びかける、購入するといった方法で行っており、購入した土地はBCTの所有となり、野生動物のために確保される¹。明治学院大学ボランティアセンターは、2008年7月より、NPO法人BCTジャパンと学生チームMGパールとの3者協働プロジェクトとして、「パールの森プロジェクト」を展開してきた。600円で5㎡の土地を購入できることから、学生たちは自らボルネオ産の淡水パールをデザイン・製作をしたオリジナルの商品を白金・横浜両校地や白金の地域のお祭りやイベントでMGパールとして販売し、BCTジャパンを通してボルネオ緑の回廊プロジェクトに寄付している。しかし、本プロジェクトの主旨は「大変な状況のボルネオを助けよう」ということではない。「大変な状況のボルネオ」と、自分たちの便利で豊かな生活の「見えにくい」相関を知り、自分にできることを考え、行動していくことにある。したがって本プロジェクトは「ボルネオへの恩返し」という価値観を3者で共有しており、学生の活動内容はパールアクセサリーの販売だけではなく、これを手段としてどのように社会との連帯を広めていけるかに主眼を置いている。具体例としては、学内でのパールアクセサリー製作のワークショップ開催や、プロジェクト発足時より毎年12月に本学にて開催しているイベント「ジャングルクリスマスフェスタ in 白金」、校舎近隣地域住民との交流や報告会の開催なども積極的に行い、様々な方法を用いて活動を展開している。これらの活動を通して、学内や地域に広くボルネオ島の現状が、私たちの豊かで便利な生活と密接に関わっている事実を多くの人に知ってもらい、人間と限りある

¹（以上、BCTジャパンHPより抜粋：<http://www.bctj.jp/project/project.html>）

自然が共に生きていくことについて考え、行動を起こすきっかけになることを目指している。ボランティアセンターは大学における一部署として、BCT ジャパンの協力を得ながら学生たちの活動を支援している。具体的には企画の立案や実施、プロモーションの方法や媒体の作成方法、ファンドレイジングに関わることなどの指導や助言、各種情報提供等の教育的支援に加え、イベント会場や必要物品等の確保などの支援も行っている。しかし、このような蓄積を経てきた中で、「自分の目で現場を確認して活動を更に充実させたい」という学生たちの声が聞かれるようになった。そして2年間にわたる活動の実績と継続が大学に認められ、BCT ジャパンおよび（株）日本エコプランニングサービスの全面的な協力を得ることもでき、本企画が実現した。催行にあたり、今まで活動してきた学生たちが日本での活動と現地のつながりを再確認し、意識化された想いを日本で具現化することを期待した。また、新たな学生が加わることにより、更なる全学的な活動の輪の広がりを目指した。実施にあたり、説明会を、4月12日（月）、22日（木）に白金校舎、4月15日（木）、19日（月）横浜校舎で開催し、各校舎で募集要項を配布した。催行日程は、2010年8月30日（月）～2010年9月6日（月）とし（詳細な旅程は表1参照）、企画主旨に伴い、いくつか応募条件を設けた。

表1. 命をつなぐ緑の回廊～パールの森プロジェクト ボルネオ・スタディツアー 日程

8日間	訪問都市	主なスケジュール
8/30 (月)	成田 コタキナバル	空路、コタキナバルへ 到着後、ホテルへ
8/31 (火)	コタキナバル サンダカン	午前：ロッカウィワイルドライフパークへ（絶滅危惧種など動物の見学） 午後：サンダカンへ移動 レインフォレストディスカバリーセンター（RDC）へ（施設見学、トレッキング等） セピロクエッジリゾートへ
9/1 (水)	サンダカン スカウ村	午前：オランウータンリハビリテーションセンター（ORC）へ（VTR視聴、補給餌見学など） 午後：ケラタムプランテーションへ移動。プランテーション見学、搾油工場見学 夕刻：スカウ村へ移動。ホームステイプログラム開始
9/2 (木)	スカウ村	午前：スタディサイトオランウータン調査地区トレイル、植林地草刈り 午後：リパークルーズ（BCTの森、消防ホースの橋見学） 夜：村の人たちとぼちよぼちよダンス交流会
9/3 (金)	スカウ村	午前：早朝クルーズ、クルーズ後植林 午後：KOCPスタッフのプレゼンテーション MGパール活動紹介、パールアクセサリ制作ワークショップ開催 夜：スタッフ村の人とぼちよぼちよダンス交流会
9/4 (土)	スカウ村 ビリット村	午前：早朝ジャングルクルーズ、ボルネオゾウ保全ユニットの活動同行 午後：キナバタン・ジャングルキャンプ（KJC）へ、ジャングルクルーズ 夜：ナイトリパークルーズ
9/5 (日)	ビリット村 コタキナバタンガン サンダカン コタキナバル	午前：モーニングクルーズ 午後：ビリット村出発、サンダカン市内へ移動、日本人墓地訪問 夜：サンダカン空港、コタキナバルへ
9/6 (月)	コタキナバル 成田	午前：自由行動 午後：空路、成田へ 到着後、解散

まず、春学期（前期）の活動として、白金グローバルフェスタ 2010（5月15、16日@白金高輪）へのMG パール出店活動（日々のパール製作や出店準備、当日の出店など、主に空きコマを利用した活動も含む）を求めた。また、事前学習として、DVD「パームオイル 近くて遠い油のはなし」の鑑賞会やBCT 事業責任者 坪内俊憲氏による講演会（6月）への参加を設定した。また、現地で村人との交流会の事前準備として、ぼちよぼちよ（マレーシアのフォークダンス）講習会も企画した。秋学期（後期）は、春学期と現地訪問の集大成として、ジャングルクリスマスフェスタ in 白金 2010 の企画立案（スタディ・ツアー報告も含む）及び、その他日々の活動参加を求めた。

募集の結果、10名の学生の応募があり、5月から本格的に事前学習と準備が始まった。募集要項で設定していなかったが、訪問先であるサンダカンについて、映画や書籍などを紹介し、事前学習を行った²。また、現地治安及び疾病関係について、外務省や旅行会社、BCT ジャパンより情報収集し、現地での急病の際の搬送経路など確認した。また、ボランティアセンター運営委員である平山恵先生の応急処置講習会に学生たちと参加したり、外務省から「NGO フィールドスタッフのための健康・安全対策ハンドブック」を取りよせて配布したり、その他注意事項についても学生たちに随時連絡した。

現地では、BCT 事業責任者 坪内俊憲氏、(株)日本エコプランニングサービス田中正純氏や、現地訪問先スタッフやガイドの全面的な協力を得ることができ、いつでも専門家たちから豊富な知識と情報をいただける最高の環境で今までの活動を再考することができた。また、今回ボランティアセンターよりスタッフ（筆者）が同行して学生たちの安全と健康の確保に努めるとともに、日々の振り返りを行った。最初の2日間はジャングルで過ごし、学生たちはそのダイナミズムとパワーに魅了されっぱなしだった。特に本プロジェクトの象徴でもある、オランウータンに出会ったときの感動は大きかった。また、2日目に訪問したRDCで坪内氏のガイドのもと、夕方から夜にかけて変化するジャングルの中で、森の声に全員が無言で耳をじっと傾けた1時間あまりは命と感動に満ちたものだった。大自然に身をゆだね、自分がいかに「ちっぽけな」存在なのかを確認し、自然の中で生きていくという本当の意味を思い知らされる体験は、どんなに巧みな言葉でも適わない。森の声の変化とは森の主の交代を意味するものでもあり、そこには生物多様性の保持における自然界のルールと秩序があり、共生社会が叫ばれる人間社会において未だに実現できない社会がそこにはあった。この感動的な体験は帰国後、12月に開催したジャングルクリスマスフェスタにおいて、「森ヨガ」という企画立案につながることになる。このような大自然の感動の中でどっぷり過ごした後、3日目に訪問したアブラヤシのプランテーション及び搾油工場で、私たちはそのコントラストの激しさに苦しむことになる。訪問させていただいた工場は、非常に開放的でプランテーションも工場内も隅々まで快く見学させてくれた。しかし見学後のバス車中は重苦しい空気が漂った。学生たちの口から語られた苦しさ——それはプランテーションではジャングルで感じたよ

² 映画「サンダカン八番娼館・望郷」、書籍「サンダカン八番娼館 底辺女性史序章」山崎朋子著、筑摩書房、1972年 等。

うな命を感じなかったことだった。プランテーション内にあった命は、アブラヤシの木、ハエ、スイギュウ、そして人間だけだった。また、プランテーション内は学校や宿舎などの福利厚生が整っていたが、そこで代々働く家族もいることを知り、果てしなく続くプランテーションの中で一生を送る現実、そしてその労働に支えられている自分たちの生活などに思いを巡らせながら、簡単には出ない「答え」について各自が思いを巡らせた。この強烈なコントラストの体験以降、学生たちの目が変わった。今まで見えていなかったものが見えるようになってきたのだ。たとえば、一見豊かに広がるジャングルの森のすぐ向こうに広がるアブラヤシの「森」が見えるようになってきた。そして川辺の木にぶら下がる野生のオランウータンとの遭遇という「感動」が、本来水が嫌いなはずのオランウータンと水辺で遭遇する意味を考えるようになっていた。ある学生は、セピロクの ORC で親を殺されたオランウータンの孤児を見た日の振り返り時、「野生で見た親と一緒にいたオランウータンの子どもとは違う。親を目の前で殺される経験は想像を絶する辛さだが、オランウータンも当たり前だが人間と同じ」とつぶやき、その後言葉を発することができなかった。このような強烈な現地体験と学びが多かった本ツアーだが、現地の方々に、MG パールの活動紹介や、アクセサリ製作ワークショップができたことは、学生たちの自尊心に大きな刺激を与えた。「こんな活動をしてくれていた日本の大学生がいたことに驚きと感謝の気持ちです。ありがとう」という言葉をいただけたことで、今まで空をつかむような感覚だったボルネオが一気に身近な存在になった。帰国後の学生たちの変化は前年度までと比べものにならないほど大きかった。それは「今まで想像の域でしか活動できず、啓発活動という意味で限界を感じていたが、それが吹っ切れて今までの全てが繋がった」と、現地最後の振り返りで話した MG パール代表の学生の言葉が行動として表れたものだった。ジャングルクリスマスフェスタでは学生によるオリジナル企画の立案やそれに伴う広報活動や段取りやマネージメントに奔走する姿が見られたり、ボラセントークイベントでの「マレー語講座」の実施や、スタディツアーホームページの開設など、学生たちの自発的な動きが活発になった（その他詳細は、本報告書 33～34 頁を参照願いたい）。以上のように、今年度スタディツアーを催行できたことで、学生が積極的に関わり生み出していくという動きにつながり、プロジェクトの質は大きく向上した。また、センターとして、学生への教育支援と機会の提供という意味も大きな成果を収めることができた。何より、無事故で全員が健康な状態で本ツアーを催行できたことは、協力関係者の皆様に心から感謝すべき点である。プロジェクト全体としては、3 者協働プロジェクトの構成員が同じ体験を共有できたことにより、3 者の結束は更に固くなったように感じる。社会貢献という点からは決して十分な「成果」が出せていない現状だが、BCT ジャパンからは、学生が目覚ましい成長にびっくりした、今後もぜひ一緒に頑張りましょうと力強くおっしゃっていただいた。今後は、プロジェクトの主旨である社会との情報共有と啓発というアプローチをどのように展開できるのかが問われている。来年度の催行に向けて、プロジェクトとの連動を視野に入れ、今年度の成果と課題を踏まえて、ツアーとその前後のコンテンツについて、再度検討と見直しを図りたい。

(李)

ソニーマーケティング学生ボランティアファンドについて

このファンドは、大学生の社会参加への第一歩となり、また、社会をより良くしていこうとするリーダーシップの芽生えとなるようなボランティア活動を支援することを目的とし、ソニーマーケティング株式会社の提案により、日本初の全国の大学生ボランティアを対象とするファンドとして2001年から始まった。当初より本学ボランティアセンターが事務局を担当させていただいている（ソニーマーケティング学生ボランティアファンドのホームページ www.sony.co.jp/v）。

今回は第10回目の募集となり、前回に引き続きAコース（助成金25万円を上限）およびBコース（助成金10万円を上限。こちらのコースは、新たにボランティア活動を始めようというグループや比較的費用のかからない活動規模の小さなグループにも助成をしようという考えのもと設けられている）を設定し、2010年10月4日～11月11日に募集を行った。審査では、前年同様「学生ならではの企画であるか」「企画が自己満足に終わっていないか、プログラムに社会性はあるか」「活動のユニークさ、チャレンジ性」「企画内容に計画性はあるか」「これまでにないような新規性はあるか」「ファンドが有効に生かされるか」の6つを評価基準とし、応募総数64団体の中から、予備審査、本審査を経て、Aコース17団体、Bコース6団体、合計23団体が助成対象として決定された。大学別には、国立大学10大学、公立大学10大学、私立大学44大学の合計64大学からの応募となった。分野別の応募状況としては、国際支援が一番多く、次いで地域コミュニティへの関心が高くなった。過疎化、農業地の活性化など、地域の問題に目を向けた地域密着型活動が見受けられたのも、そのあらわれといえる。他には、ボランティア振興、子ども、障がい者、教育、在日外国人、環境などがテーマとして扱われていた。活動地域としては国内48件、海外16件であり、海外の大半が東南アジアとなり、カンボジア、ミャンマー、フィリピン、インドネシアなどが多くなっている。本学からは、Bコースで1団体が助成対象として選ばれている。また、新規立ち上げの活動が26件と多く、10人以下の小規模団体が目立ったことも今年の特徴としてあげられる。

このあと、助成金を受けた団体はそれぞれ活動を行い、2011年6月には報告会が予定されている。報告会には助成団体の学生が全国から一堂に会し、いくつかの団体による活動報告や全体懇親会のほか、第10回という節目でもあるので、OBなどによるパネルディスカッションも検討している。当日は各団体の活動報告をまとめた報告書も配布する予定である。

(武村)

聴覚障がい学生支援について

1. 聴覚障がい学生本人への支援

ボランティアセンターでは、昨年に引き続き、白金および横浜校舎にそれぞれ1名のノートテイクコーディネーターを配置し、授業での情報保障を中心に、聴覚障がい学生支援に取り組んだ。

本学の情報保障には、①手書きによるノートテイク、②パソコンノートテイク（以下、PCノートテイク）、③手話通訳、④教材（ビデオなど）の文字起こし、がある。ボランティアセンターでは、聴覚障がい学生（以下、利用学生）からの申込みを受けて、ノートテイクや手話通訳者の募集を行い、実際に授業で通訳することが決まった段階で登録してもらい、授業のほか入学式や卒業式、各種オリエンテーションや学内で実施される講演会、オープンキャンパスなどへ通訳者派遣を行っている。

今年度実際に通訳に入った人数は学生50名、地域ノートテイク11名、学生手話通訳者2名、地域手話通訳者1名であり、サポートを必要とする利用学生は新入生2名を含む6名であった。利用学生6名のうち主な履修校地が白金校舎となる学生が4名、横浜校舎が2名であり、春学期にノートテイクを必要とする科目数は30科目（内訳は白金15、横浜15）、秋学期は24科目（内訳は白金11、横浜13）、手話通訳については、今年度は授業での利用が1回であった。

ノートテイクに関していえば、ノートテイクをやりたいと申し出る学生が増加する傾向にありながらも、利用学生がノートテイクを必要とする授業時間とノートテイクの都合が必ずしも合致しないことから、マッチングには困難が伴った。さらに、専門科目に関しては、ノートテイクをする上である程度の専門知識が必要なため、この点での人員確保も相変わらずの課題であった。ただ、今年度は、学科やその科目を担当している教員に協力いただき、利用学生と同じ学科の上級生や大学院生へ呼びかけてノートテイクが決まった科目があり、しかも、それが複数の学科で実現した。他にも、外国語科目の履修に際して、利用学生用に別途クラスが設定されたり、ノートテイクを配置できるクラスに変更していただくなど、各方面で格段の配慮を得た。このように、利用学生にとって学びやすい環境を提供しようという大学の姿勢が目に見える形で現れた1年となった。PCノートテイクに関しては、今年度も7科目（春学期4科目、秋学期3科目）で行ったが、前年同様、学生と地域PCノートテイクのペア、あるいは学生同士の場合には授業での経験がある学生と初心者の学生がペアを組むなど、マッチングを工夫した。手書きに比べてより多くの情報保障を行える点で、今後もPCノートテイクの必要性は増すと考えられるが、こちらも人員の確保が困難であった。募集広報の点で、さらなる工夫が必要と考えられる。

2. ノートテイクの養成

センターでは、外部から講師を招き5月と10月に白金・横浜それぞれの校舎で初心者向けノートテイク養成講座を実施している（受講者数は合計25名。2日間連続受講形式で受講時間は合計6時間）。養成講座に参加できなかった学生には、コーディネーターが後日個別研修を実施し、養成講座や個別研

修を経た初心者学生には、先輩ノートテイカーの隣で実習してからノートテイクに入るなど段階的なマッチングを行うようにしている。また、コーディネーターがノートテイカーの入っている授業に2回以上は入るようにして、それぞれのノートテイカーにアドバイスを行った。また、PCノートテイカー養成講座も実施した（受講者数は合計8名。受講形式や受講時間はノートテイカー養成講座と同様）。機材や専用ソフトのインストールなど情報センターの協力を得ながら、こちらも外部から講師を招き、6月に白金、10月に横浜校舎で行った。なお、各学期に2回ずつ、利用学生からは「利用学生報告書」、通訳者からは「通訳者報告書」を提出してもらっている。これは、実際に通訳に入った、あるいは通訳を受けた感想や反省、要望や質問などをそれぞれの授業について書いてもらうもので、コーディネーターやテイイクに関してのアドバイスをするうえでの参考資料となっている。また、学生ノートテイカー事務連絡会を各学期に1度開き、必要書類の配付とともにサポートに関する注意事項を伝え、普段顔を合わせる事のないノートテイカー同士の顔合わせの機会とした。

3. 聴覚障がいへの理解を深めるための啓発

『聴覚障がい学生サポートの手引き』を、教員用と本人・通訳者用の2種類作成し、授業担当教員、利用学生が所属する学科教員、利用学生、通訳者、関連部署に配布した。

11月には学生サポートセンターとの共催で公開講演会「大学での障がい学生支援－理解から、自立できる共生社会へ－」を白金校舎で行った。第2部では、本学卒業生でご自身も聴覚障がいをお持ちの長野留美子さんを講師にお招きして『聴覚障がい学生へのサポート－卒業生の立場から－』のテーマでお話しいただいた。また、利用学生と通訳者、通訳者同士が交流する場として7月と12月に交流会を設定した。12月の交流会では支援を受けている利用学生本人に『私の耳』というテーマで話してもらうなど、聴覚障がいへの理解と交流を深める機会を持った。

障がいを持つ学生が、障がいを持たない学生と同じスタートラインにたてるよう環境を整えることについて、本学においても、以前に比べるとかなり理解が深まり、支援に対する協力を得られるようになった。その現れとして、いよいよ2011年度から、障がい学生支援の窓口となる部署が、学生サポートセンターとして、白金・横浜それぞれの校舎に開室される。これまでボランティアセンターが行ってきた聴覚障がい学生に関する支援業務も、すべて学生サポートセンターに移行されることになる。

今年度は利用学生が6名となり、利用学生同士の、学科や学年を超えたつながりも深まり、その中で、障がいを受け入れ、支援を受ける心構えが自然と育まれたケースが見受けられたように感じる。また、聞こえる学生にとって「聞こえにくい」または「聞こえの不自由な」学生への理解も浸透しつつあり、サポートを自然なこととしてとらえる学生が増えているようにも感じている。新しい体制への移行後も、学生が学生を支え、共に学ぶという姿勢を大切にして、障がい学生の支援が、より充実した内容で継続して行われていくよう期待したい。

(武村)

白金校舎ボランティアセンター報告

[チーフ報告] 白金校舎学生スタッフ活動報告

1、白金学生スタッフとは

自らがボランティア活動に参加するだけでなく、ボランティア活動を通して、学生にボランティアの楽しさ、魅力を伝えたり、人と人とをつなぐ——つまり人と人の架け橋になることを活動目標とし、私たち学生スタッフ（以下学生スタッフ）は現在進行中の6つのプロジェクトに所属し、活動をしている。

2、今年度を振り返って

2010年の学生スタッフの活動は、実りの多いさらに発展した年であり、学生スタッフの「人と人の架け橋になる」という目的を実感した年であったと思う。それは、プロジェクトごとの活動が活発で、それが学生スタッフ全体の活性化につながったことに表れている。

私がボランティアセンターに関わり始めた2009年は、既にプロジェクトは確立されていてそれぞれの活動が行われていた。先輩方が考えた学生スタッフが目標とすることなど、基本的なスタンスは普遍化していたので、私はそれを受け継ぎ、絶やさないように長く続けていくこと、ボランティアセンターに関わり始めたばかりの人がコミットしやすいように、声をかけることをチーフとしての活動目標とした。それは、活動を細く長く続けていくことに意味があると思ったからであり、またボランティアセンターの学生スタッフは学部・学年は関係ないとはいえ、3年の私は先輩として後輩のサポートをする立場にあり、それが思いをつなげていく秘訣だと思ったからである。

4月は残念ながら新スタッフを迎えることはできなかったが、その後、普段各プロジェクトに関わっている人に声をかけ、勧誘企画を行ったところ新スタッフに登録してくれる人がいた。その中には、学生スタッフでは3人目となる横浜校舎在籍のメンバーもいて、白金学生スタッフは校地の違いという距離の垣根を越えた団体になってきていると思う。そして、普段の地道な活動が人と人とのつながりを広め、そして深くなっていくことを実感した。

また、2010年度は、新しいプロジェクト（山黒、報告書41～42ページ参照）が立ち上がり、より一層活動の幅が広がった。各プロジェクトも常に動いている状態でイベントが盛りだくさんであった。春学期の活動報告と秋学期の活動予定を各プロジェクトでプレゼンする夏合宿では、秋学期に予定される各プロジェクトの企画の多さに、また新しい試みが始まるのだという期待もあったが、果たして成し遂げられるのだろうかという不安もあった。しかし、準備が進む中でそれぞれが大変な時も、困ったことがあれば誰かが助けてくれた。学生スタッフで問題視されているプロジェクト間の横の連携についても、今年度はそれぞれのプロジェクトのイベントの協力を呼びかけると多くの学生スタッフが参加してくれたことが本当に大きな収穫であり、学生スタッフ全体での一体感を生み出したのだと思う。また、全体での定例ミーティングがない白金学生スタッフの活動は、全体の企画である9月の夏合宿と2月の研修会（詳細は報告書29～30ページ参照）が非常に重要である。夏合宿を通して、各プロジェクトの活動予定をそれぞれが把握し合ったことがイベントの活性化につながったのだと思う。

そして、もう一つの学生スタッフ全体の企画であり、お世話になっている方々への感謝の意を示す「白金合コン（詳細は報告書27～28ページ参照）」の際には、各プロジェクトを始め日頃白金ボランティアセンターにご理解、ご協力いただいている地域の方々や教職員の方々の温かさを改めて感じた。多くの方が集まり、学生の活動に興味を持っていただき、温かい言葉をかけていただく・・・、そんな経験は普段の大学生活ではなかなかないことだと思う。地域の方々の学生に対する期待を感じ、普段のひたすらにがむしゃらな活動を振り返り、さらに頑張ろうと思える機会であった。地道だががむしゃらな活動が信頼関係を築き、「人と人のつながり」を生み、「人と人の架け橋」になることができたイベントであったと思う。これからも「つながり」の大切さを感じ、活動を続けていければと思う。

私が考える学生スタッフの魅力は、様々な分野に特化するプロジェクトが進行している為、コミットすることで自分自身のフィールドをどんどん広げることが可能なこと、それを通じて様々な経験ができること、様々な人と出会えることである。「ちょっとしたきっかけで、ふらっと立ち寄ったボランティアセンターでこんなに多くの刺激を得た、楽しさを発見した。」という、きちんとした型にはまらない活動ができるのが魅力だと思う。そして多くの経験を積み、様々な分野に精通する方々と出会い、多様な考え方を吸収できたことが私自身の成長にもつながった。ボランティアセンターで頑張っている学生スタッフの姿を見ると、「私もまだまだ頑張ろう！」と思えたこと、そんな仲間をもてたことに感謝している。

私がチーフとして行ってきたことで特記すべきことはない。もちろん、それぞれのプロジェクトの把握をしようと心がけ、それが役割であることは自覚しているが、各プロジェクトが成果を生んだのは、紛れもなく学生スタッフ一人一人の頑張りである。「一人一人がコミュニケーションを図り、困ったことがあれば助けを求める。」ということは、簡単そうに思えて、意外と難しい。だからこそ重要かつ、必須事項である。学生スタッフ一人一人が責任を持ち、これからも実行していくべき点である。「困ったことがあれば、必ず誰かが助けてくれるし、自分も困っている人がいれば助ける。」そういった環境であることが普段の活動の安心感であったり、さらなる向上心につながっているのだと思う。また、多くの人が集まって何かを生み出すことは、苦勞も伴うが、楽しさややりがいは無限に広がるものだと思う。それらを覚えることができた環境に感謝し、人への思いやりを忘れずに一生懸命に活動していきたい。

3、 今度の展望

今後は、活動をつなげていくためにも新スタッフの勧誘が非常に重要である。校地の違いで1・2年生を勧誘しづらい状況ではあるが、だからこそ私たちの活動に本当に興味を持ってくれた学生が集まるのだと思うし、それがボランティアセンターで行われている活動らしさだと思う。ふとしたきっかけ、人との出会いを大切にしていきたい。今、置かれている環境に合わせて運営方法を変え、常に窓口の広い団体であること、決まりきったことよりも「人と人の架け橋」になることを目的に、これまでに築いた「つながり」を活かし、さらに発展した活動をしていくことがあるべき姿だと思う。また、学内外問わず、あらゆる可能性を追求することを止めない団体でありたい。（心理学部心理学科3年 齊藤 瞳）

【チーフ報告】 白金合コン 2010

【白金合コンとは？】

白金合コンとは、地域の方々と白金学生スタッフ、ボランティアセンターをはじめとした本学教職員が交流を通して「つながりの輪」を広げていくことを目的として行う交流会だ。また、普段はプロジェクト毎に別々に活動している学生たちが協働して準備及び実行することができるイベントでもある。

【合コン開催に至った理由】

昨年が好評だったため、2010年も白金合コンを開催することが考えられていた。そして9月の研修会で、改めて白金合コンの開催について話し合った。昨年の反省や今後の活動を考えた結果、「交流を通して『つながりの輪』を広げること」と「ボランティアセンターの活動に関わる地域の方々に、私たちの感謝の気持ちを伝えること」をテーマに、白金合コン 2010の開催が決まった。

【合コン開催日まで】

準備はまず企画書の作成から始まった。合コンの最終的な形をイメージしながら、9月に行った研修会中の話し合いで提案されたアイデアをまとめ企画書とした。合コンは、1. ボランティアセンター及び学生スタッフについての説明、2. グループワーク（白金学生スタッフオリジナルのカードゲームを使ったアイスブレイキングとワールド・カフェ方式のグループディスカッション）、3. 懇親会（カレーパーティ）という構成となった。企画書の作成後は参加者を把握する作業を始めた。企画書作成の段階で参加予定者としてリストアップした「ボランティアセンターの活動に関わる地域の方々」に招待状を送り出欠の程を伺った。最終的には50名程の方が参加して下さることになり、改めて合コンの開催は責任あることなのだと思った。しかし同時に、たくさんの方に集っていただけることが嬉しく、合コンを成功させたいという思いが強くなった。出欠の返事を待っている間、グループワークと懇親会を中心に残りの準備を進めた。これらの準備もとても大変だった。特にアイスブレイキングに使うカードゲームの準備は、うまく段取りをすることが出来ずギリギリまで準備に時間を費やした。そして、準備が不十分なところもあった。そのため合コンが始まってからもとても緊張した。

【合コンの当日】

この日は時間のある学生が、昼ごろから集まって当日準備を始めた。懇親会で振舞う予定の軽食の準備や会場の設営などを、少ない人数で頑張った。それでも学生スタッフ各人の能力の高さに救われ、何とか間に合わせることが出来た。合コンは予定より少し遅れてスタートした。会場は予想していたより早くから人が集まったため、知り合い同士のお喋りで少し賑わっていた。しかしボランティアセンター

及び学生スタッフについての説明が始まると、会場は静まりかえり皆真剣に説明に耳を傾けてくださった。集まってくださった地域の方々が、こうして真剣な気持ちで合コンに参加して下さっていると思うとより緊張した。説明が終わり、会場は静かなままグループワークに移った。まずアイスブレイキングとして、学生手作りのカードを用いたカードゲームを行った。これは、ドイツのカードゲームを参考に作ったもので、ゲームを通して白金学生スタッフが行っている6つのプロジェクトについて知ることができ、参加者たちも互いの名前を呼び合うことで打ち解けられる仕組みになっている。今回は時間の都合により、5人の学生と5人の地域の方で二人一組のペアを作り、ペア対抗でゲームを楽しんだ。そして、残りの人は周囲に集まって声援を送って頂いた。一部の方にしかカードゲームを体験して頂けなかったのは残念だったが、会場は予想を上回る盛り上がりを見せた。会場の緊張が十分にほぐれたところで次のグループワークに移った。普段は地域の方と学生・大学とが一堂に会することは滅多にないので、この機会を活かして、今後の私たちの活動につながる企画として、「地域と学生と大学の三者協働・コラボレーションについて」というテーマで、ワールド・カフェという手法を用いてグループディスカッションを行った。八つのテーブルに分かれてそれぞれ熱く議論を繰り広げ、様々な意見を交換しあった。今後の活動につなげるためにも、アンケート用紙を配布し、ディスカッションの内容や感じたことを集計した。懇親会では、学生たちが「一つ一つの具材がカレーを良いものにするように、私たちも一人ひとりが地域を良いものにしていく」という思いを込めて作ったカレーをメインに軽食を振る舞い、食事しながら会話を楽しんでいただいた。食材は、昨年続き、今年もセカンドハーベスト・ジャパンよりカレールーを提供していただいた。その他今年度新たにつながりができたNPO法人ばれっとのケーキや田舎会社東京支店の野菜を購入した。会場はとても盛り上がり、学生たちも合コンに集まっていた地域の方々と新たに交流を結ぶことができた。

【合コン後のつながり】

昨年は合コン後に、参加していただいた地域の方々にフォトアルバムと寄せ書きを贈った。今年は、昨年贈ったフォトアルバムが埋まるよう写真とメッセージを送る予定であり、改めて感謝の気持ちを伝えることができればと思う。

【感想・反省】

企画の運営は思っていた以上にずっと大変な仕事だった。今年度から学生スタッフに登録した私にとって初めてのマネジメント活動であったが、仕事に慣れていないためか、作業が予定よりも遅くなることもしばしばあった。そのことで学生スタッフの仲間やボランティアセンターの職員の方々に多くの迷惑をかけてしまった。学生スタッフの活動における基本である、「ハウレンソウ（報告・連絡・相談）」の徹底を心がけ、今後につなげていきたい。

（法学部法律学科3年 須田秀語）

[チーフ報告] 合宿・研修会

【はじめに】

私たち学生スタッフは、主に白金ボラセンの6つのプロジェクト（以下PJ）にそれぞれ所属し、「人と人をつなぐ架け橋」としてプロジェクトのマネジメントや情報発信などの役割を担っている。しかし「架け橋」となるには自分が所属するPJについてはもちろん、各PJの活動状況や知識を人に“伝える”力が必須となる。そのため、私たちは学期に一度研修会を開いて他PJの状況を把握し、共に問題解決を図ったり、学生スタッフイベントの企画立案を行ったりしている。このような情報共有を通して、学生スタッフ同士のつながりを深め、活動活性化のための協力態勢を築くことも、研修会の大きな目的である。9月は合宿、2月は日帰りの形態で行う。なお、本稿執筆時は2月の研修会前であるため、9月の合宿について報告する。

【2010年度9月研修会（以下合宿）】

2010年9月20日から22日まで、川崎市民プラザにて行われ、14名の学生スタッフと5名のPJメンバー、3名のOBが参加した。合宿ではスタッフ同士に留まらず、スポット参加者や学生スタッフではないPJメンバー、学生スタッフOB・OG、ボラセン教職員や外部講師の方とも交流を深め、つながりを再構築することを目指した。そこで合宿のタイムスケジュールやメンバーの自己紹介シートを盛り込んだ「合宿のしおり」を制作・配布し、交流の活性化に利用してもらえよう工夫した。さらに、参加学生共通の「おもしろいものをひろう」という目標を設定した。一見自分からは遠く感じられるような話にも自分にとっての「おもしろいもの」は埋まっている。この合宿を通してそれを沢山見つけられるように、常にアンテナを張って臨んでほしいと考えたからである。

1日目のコンテンツはボラセン教職員と外部講師による講演であった。今年度よりボランティアセンター長に就任された原田先生、ボランティアコーディネーター李さん、富士通株式会社、NPOサポートセンター・アドバイザーの長浜洋二さんに講師をお願いし、ご自身の専門分野と学生によるプロジェクト運営を絡めたお話を頂いた。また、学生スタッフチーフを務める齊藤瞳が、学生スタッフ全体の春学期の活動とその課題について総括した。原田先生からは、「伝え方」の極意——「面白く」「共感（感動）してもらえること」について学び、人に「伝える」ことを硬く難しく考えていたことに気付いた。今後、様々な方にPJ活動について知って頂けるチャンスを生かせるよう、原田先生から頂いたヒントを用いて、伝える力を磨いていきたいと思う。李さんの講演では、病院での暮らしを余儀なくされている長期入院児たちの話を通して、病棟や施設のような閉ざされた環境にある方たちとの関わりについて知ることができた。普段人に何かをしてもらうことが多い子供たちにとって、「自分が人に何かしてあげる喜び」を味わってもらうような遊びを考案したり、立場や垣根を越えて“みんな”楽しむためのアプローチを学ぶことができた。ゲスト講師の長浜さんからは、「かいぜん」の5カ条を学び、社会で活躍す

る企業がどのような方法で目標に向かって突き進んでいるのかを垣間見ることができた。チームで定めた目標に向けて、限りある時間でいかに価値（人に喜んでもらうこと）を生み出すかということ、目標達成のためには不必要なことを徹底的に排除し、毎日の行動を見直すということを教えて頂いた。

2日目は、6PJがプレゼンテーションを行った。1PJ60分間という限られた時間で、春学期の活動・秋学期の展望をプレゼンし、ワークを通して問題点の改善案や企画でのアイデアを募った。これを通して自分の活動に熱心になるあまり、埋もれてしまった活動の大切な目的、気付けなかった仲間の存在を改めて認識できた。また、場数を踏んで成長したプレゼンの技術や活動自体の魅力も、互いにより刺激をもたらし、共に成長していける基盤を構築できたのではないかと思う。スポット参加者は、話合いやワークの中で、学生スタッフが考え付かない斬新なアイデアや、素朴な疑問などを積極的に投げかけてくれて、とても参考になった。PJ発表後のセンター長補佐の浅川先生の講演では、文化人類学の観点から、「贈与と返礼」のお話をして頂いた。ある民族のクラという習慣に見られる、一見すると無意味にも思える「贈与と返礼」の繰り返し。しかし、この不思議な習慣は実は私たちの身の回りにも、PJ活動の中にもありふれているものだと気付いた。私は、浅川先生が仰った「贈与と返礼を続けないと人は生きていけない」という言葉がとても印象的であった。

1日目と2日目の夜は、交流を兼ねた夕食会が行われた。初日より打ち解けた雰囲気でも盛り上がった2日目の交流会は、学生スタッフもPJメンバーも違いがわからないほどに積極的な交流が見られた。ご講演頂いた講師の方々に詳しいお話を伺うこともでき、よりつながりが深まったのではないかと思う。

3日目は学生スタッフ企画・「白金合コン2010」の企画立案を行った。今年2回目を迎える白金合コンであるが、前回の反省とアンケートを基に「参加者がより密に交流できる会にすること」を目標にアイデアを出し合った。その後、ボラセン職員古坂さんからボラセンHPの現状と活動ニュースなどの日々の情報発信の大切さについて教えていただいた。

【合宿を振り返って】

4人の方の講演、6PJのプレゼン、企画や交流会など、とにかく盛りだくさんの2泊3日であった。その他にも、OBスタッフから伺ったこれまでの歩み、眠い目をこすりながら輪になって話した夜の振り返りなど、本稿に全て書ききれないがとても貴重で濃い時間を過ごせたと感じる。夜の振り返りでは、初参加のスタッフから、講演やプレゼンで人の話に耳を傾けることや自分から発信することを通して、この3日間だけでも自身の成長を実感したという感想が挙がった。合宿後に参加学生が提出したレポートでは、活動の中でひとり抱え込んでしまっていたことをスタッフと共有でき、気持ちが楽になったと書いた学生スタッフもいた。以上のように今回の合宿を通して、私たち白金学生スタッフらは自分の周りには、一緒に頑張る仲間やそれを見守って下さる教職員の方々、OBの皆さんがいるということのを再認識でき、合宿が秋学期に向けて新しいスタートを切るための踏み台となったのではないかと思う。

(心理学部心理学科2年 櫻井仁美)

[プロジェクト報告] しろかねサラダ (旧志田町倶楽部学生チーム)

【はじめに】

私たちは、「明治学院大学のある白金という街で明治学院大学の学生だからこそできる活動をしたい」と思った学生有志が集まったプロジェクトチームである。私たちは、白金の街に住む人、働きに来ている人、勉強に来ている人など、出会いのある全ての人々の縁とつながりを大切に活動をしたと考えている。また、明治学院大学は校地が2か所（白金・横浜）あるが、本プロジェクトには校地に関係なく学生や教職員が関わっており、「明治学院大学をつなぐ」も大切にしている。私たちの活動は2008年4月に白金志田町倶楽部の活動に参加したご縁で、白金高輪駅周辺地域から始まり「白金志田町倶楽部学生チーム」として活動してきた（詳細は2008年度、2009年度報告書参照）。一方で同時期に「港区青少年対策高松地区委員会」の活動や、「ふれあい運動会実行委員会」への関わりも始まり、白金台・高輪台駅周辺地域での活動にも参加してきた。こうして「白金」と呼ばれる地域の方々とのつながりが年々広がったことで、このたび「しろかねサラダ」というチーム名で新たに生まれ変わる事となった。この名前は、白金と呼ばれる街全体の中で、住民の方々だけではなく明治学院大学の学生や教職員など、仕事や勉強に関わりのある人々や団体などを様々な持ち味の個性的な「具」が白金地域というサラダボールに集ったり主張したり混ざり合う「サラダ」に見立てている。私たちはチーム名を一新したことによりこのような白金の「サラダ」の魅力を発信して多くの人に伝えていきたいと考えている。

【活動報告】

2010年度は地域主催のイベントへの参加の他、学生主催の企画も実現することができた。以下、時系列に沿って説明していく。

毎年4月29日に白金小学校において、ふれあい運動会実行委員会主催のふれあい運動会が開催されている。地域の大人や子どもが500名以上参加する大規模なイベントで、本学の学生は毎年参加しており、今年度もラジオ体操の手本や競技説明を担当させていただいた。昼食会を兼ねた懇親会では白金台地域に関わっている様々な立場の方と交流することができた。このように地域に住む人々が老若男女関係なく交われる場所があることを知り、この行事が四半世紀も続いていることに地域の力を感じ、またそこに私たち学生が関わられることを嬉しく思う。

5月15日、16日には白金地域で開催されたシロカネグローバルフェスタ2010（以下グローバルフェスタ）に参加した。今年度は当日参加する本学の学生ボランティアのリクルートとマネジメント、事前準備に加え、白金志田町倶楽部が主催するウォークラリー企画の台紙案を学生が担当するという参加企画が実現した。今年も多くの学生がボランティアとして参加してくれ、しろかねサラダのメンバー獲得にもつながった。そして去年に引き続き、白金学生スタッフのプロジェクト「MGパール（詳細は〇〇ページ参照）」がブース出店し、地域に向けて本学の学生の活動を広める機会となった。さらに、今年は本学の学生有志でステージに出演させていただいた。普段白金と呼ばれる地域で活躍する学生が、それぞ

れの活動を通じて感じた地域への思いを語り、自分たちの白金という地域への思いを観客である来場者や地域の方と共有し、私たちにとってとても意味のある初めての試みとなった。このステージは、今年でフェスタへの参加が3年目となり、今まで築いてきた信頼関係があったからこそ実現したのだと思っている。

また、グローバルフェスタに向け、「白金をもっと深く知ってもらいたい」という思いから白金の隠れた魅力を発信するガイドマップ「白金 Deep Map（以下、Deep Map）」を作成し、フェスタ当日に来場者に配布した。さらに、この企画でボランティアファンド学生チャレンジ賞に応募し、助成金をいただいた（詳細は報告書82～83ページを参照）。また、今回北里大学や東京農業大学の学生も参加しており、他大学とのつながりもできたので、今後何らかの形で関わることができたらと思う。その他、白金志田町倶楽部主催の防犯パトロール、JAZZライブに定期的に参加している。8月は港区と港区青少年対策高松地区委員会が共催するみなとキャンプ村に参加し、白金の小学校に通う小学生と一緒に山梨へ行った。3日間という短い期間ながらも自然の中で子どもたちと遊び、普段接点のない地域の子もたちとの距離を縮めることができたと思う。行き帰りのバス内でのレクレーションを任せていただき、ただの単発ボランティアとしてではなく、スタッフの一員として見てくれているのだという実感を持てた。

2011年1月現在、Deep Map 第二号の制作中であり、発行は2011年3月を予定している。2月には港区青少年対策高松地区委員会主催のいちご狩りのイベントがあり、メンバーが中心になってバス内でのレクレーションや自由時間の企画立案および実施を担当する。

【成果と反省】

これまでは地域でもともと行っている活動に私たちが参加するという形が多かったが、今年度はステージ出演やDeep Mapの創刊といった、「明治学院大学の学生だからこそできる活動」が多く実現した実りのある年となった。また、地域との関わりも3年目となり、継続して関わっていくことが地域とのつながりを深めるということを実感した。反省としては、特定のメンバーに役割が偏ってしまった点、両校地にメンバーがいるため、なかなか全体で集まることができず情報共有不足となった点が挙げられる。今後はメーリングリストを積極的に活用し、情報共有を徹底していきたい。

【今後の目標】

これまでよりも活動範囲が広がったことで、イベントや企画の可能性の幅も広がったので、今まで以上に私たちのカラーを打ち出していけるような活動をしていきたい。そのために自分たちが白金という地域を楽しみながら関わることを大切にしながら、地域の魅力を発信していこうと思う。そして、地域の方だけでなく地域活動に関わったことのない学生にも白金という地域で活動する楽しさ、魅力を知ってもらい、気軽に白金の街を歩いてもらえるような工夫をしていきたい。また、興味を持ってくれた学生を今後の活動に巻き込んでいき、地域の方々と一緒に白金の街を盛り上げていきたいと考えている。

（心理学部心理学科3年 本間由香）

[プロジェクト報告] MG パール

【はじめに】

私たち MG パールは、ボルネオ島での森林伐採やアブラヤシのプランテーション開発のため住み処を追われている野生動物を保全するために活動している、NPO 法人ボルネオ保全トラストジャパン（以下、BCT ジャパン）と、明治学院大学ボランティアセンターとの三者協働で、「パールビーズの森プロジェクト」を実施しています（プロジェクトの詳細は 2008、2009 年度報告書を参照）。このプロジェクトは白金・横浜の両校舎で展開していて、地域のお祭りや学内イベントでのパールビーズアクセサリー販売活動を通じて、ボルネオ島と私たちの生活が密接に関わっていることを多くの人に知ってもらうことを目的としています。

【活動報告】

本年度は、段々と知名度が上がってきた MG パールをもっといろんな人に伝える機会や、私たち自身も、もっとボルネオ島のことを知る機会を与えていただきました。具体的には、白金台地域で開催された「ふれあい運動会」や、白金小学校 PTA 主催のおまつりへの参加、そして、白金小学校のお母さん方との交流会などを通じて、白金地域の方々や、白金校舎からすぐ近くの白金小学校のお母さん方に MG パールのことを知っていただけたら、お母さん方を通じて子供たちとも交流することができました。5 月には、毎年恒例となりつつあるシロカネ・グローバルフェスタに出店し、二日間で多くの方にご来店いただきました。また 10 月には港区芝公園で開催された「みなと区民まつり」に初出店させていただきました。どちらのイベントでも、プロジェクトの趣旨を丁寧に説明しながら商品を販売することで、地域の方々に MG パールを知ってもらえるよい機会となりました。また、白金校舎に BCT ジャパン理事長の坪内俊憲さんをお招きして講演会を開催し、貴重なお話をたくさんお聞きすることもできました。そして今年度初めて、たくさんの方の協力のもと、「ボルネオスタディーツアー」が実施され、10 名の学生が参加しました。プロジェクト発足当時から、私たちの今までの活動の収益などで「緑の回廊」として、オランウータンたちのために購入した森である、「パールの森ミニ」を見に行きたいという思いがあったのですが、プロジェクト発足から三年目にしてついに、現地ボルネオに行くことができました。現地では、野生のオランウータンに遭遇したり、念願の「パールの森ミニ」を見ることができたり、地元の方々に MG パールの活動を紹介したり、実際に現地の女性たちと一緒にアクセサリーの製作を行いました。自分の足でボルネオに行き、自分の目でボルネオを見ることができたことは参加した学生一人一人に大きな影響を与え、私たちが MG パールの一員として、地球に住む生物の一員として考え、MG パールの活動の意義を改めて感じることができました。来年以降もスタディーツアーを通じて多くの学生がボルネオ島を訪れ、ボルネオ島の現状を知ってほしいと思います。そして今年で 3 回目となる「ジャングルクリスマスフェスタ in 白金 2010」を開催しました。スタディーツアーの報告会や、スタディーツアー中に体験した朝と夜のリパークルーズを再現した「ジャングルクルーズ」、実際にボルネオ

で録音した森の音を BGM に森や動物たちをイメージしながら行う「森ヨガ」など、実際にボルネオに行ったからこそ企画することのできた企画をスタディーツアーに参加したメンバーが中心となって実施しました。企画から参加した学生からは、「初めてイベントを企画する側に立って、イベント運営の難しさや、他者に MG パールのプロジェクトを理解してもらうことの難しさも感じたが、その課題は来年に生かしたい」といった感想がありました。企画の内容は昨年度よりも充実したものになったと思いますが、来年度はもっと広報に力を入れて、集客数を上げていけたらと考えています。また、今年度の活動を通じたパールビーズアクセサリーの売上は 102,600 円、募金額は 51,300 円となり、2008 年度からの総獲得森面積は 842.5㎡となりました。詳しくは下記の表をご覧ください。

表 MG パール 2010 年度活動内容

活動日程	活動内容	売上明細(販売を行っていない場合は空欄)	募金額(売上の半額)
4月20日(火)	アクセサリー製作講習会@白金校舎		
4月29日(木)	ふれあい運動会	1200円×9	5400円
5月15日(土)・16日(日)	シロカネグローバルフェスタ	1200円×22、600円×42、ワークショップ(1200円)×2	27000円
6月18日(金)	坪内さんの講演会@白金	1200円×6	3600円
7月4日(土)	白金小学校PTAのお祭り		
8月30日(月)～9月6日(月)	ボルネオ島スタディーツアー		
10月2日(日)	スタディーツアープレゼン@ザ・プリティッシュ・スクール・イン東京(渋谷キャンパス)		
10月10日(日)	みなと区民まつり	1200円×5、600円×13	6900円
10月17日(日)	白金小学校のお母さん方との交流会		
11月11日(木)	ジャングルクリスマス打ち合わせ@BCT		
11月12日(金)	ボルネオミニ報告会@横浜校舎		
11月15日(月)	ボルネオミニ報告会@白金校舎		
11月5日(金)～15日(月)	アジア文化祭での写真展示会@横浜校舎		
11月28日(日)	ぱれ☆コレ2010(詳細は報告書●ページ参照)へのアクセサリーの提供と参加		
12月18日(土)	ジャングルクリスマスフェスタin白金2010	600円×24、ワークショップ(1200円)×2	8400円
			合計51300円(森の面積427.5㎡)

【成果・反省】

今年度は、4月から7月はスタディーツアーに向けて、9月から12月はジャングルクリスマスに向けて活動していくという明確な目標があったことで、学生たちも向上心と意欲を持って活動に参加できたと思います。また、白金ボラセンのプロジェクトの横のつながりも密になったことで、ぱれ☆コレ2010に参加したり、ジャングルクリスマスフェスタに、他のプロジェクトに参加している学生スタッフが大勢関わってくれました。ジャングルクリスマスフェスタも、昨年度よりコンテンツ内容は充実していたと思います。しかし、両校舎で行っているプロジェクトであることもあり、なかなかメンバー全員が集まれる時間を作れなかったこと、ジャングルクリスマスフェスタに向けて、個人プレーの集まりのような形になってしまい、仕事を分散できず一人ひとりが抱え込む形になってしまったことが大きな反省点です。そして来年度は引き続き、両校舎で活動できるプロジェクトとして、大学生活を通じて継続して関わっていけるメンバーを増やし、メンバーが集まれる機会を作り、来年度のジャングルクリスマスに向けては、集客数を上げていくために綿密な計画を早い時期から BCT ジャパン、ボランティアセンターとともに練っていけたらより一層深みのあるプロジェクトになっていけると考えています。また今年作ることのできた地域や他団体との繋がりは来年度も継続して大切にしていきたいと思っています。

(国際学部 国際学科 3年 北原美奏)

【プロジェクト報告】 MG ☆ SUZU

【はじめに】

MG ☆ SUZU（以下SUZU）は、「アートでキャッチボール」をコンセプトに特別養護老人ホームの利用者さんとアート作品の製作を通じた交流を行っている。現在、白金校舎から徒歩15分の場所にある港区立特別養護老人ホーム白金の森（以下、白金の森）という施設を中心に活動している。私たちはアートをひとつのコミュニケーションツールと考え、そこから生まれる会話やつながりを大切にしている。出来上がった作品からは、その方の人柄やこだわりが感じられ、私たちがより深く利用者さんを理解することにつながっている。SUZUの活動を利用者さんに楽しんで頂き利用者さんのご家族、施設職員の皆さんにとっても利用者さんの新たな魅力を発見する手助けになれば幸いである。また広く一般の方々にも利用者さんの魅力あふれる作品を観て頂きたいと考え展示会も行っている。

【活動報告】

昨年度、メンバーの増員に伴い、出来ることが増えた一方で、見えにくくなったものもあった。それは「今後どういったことを目指すのか」「SUZUにしかできないこととは何か」ということだった。これらを再確認しSUZU自体が成長するために、2009年度秋、社会福祉法人福祉プラザさくら川での活動を休止し、充電期間を設けた。充電期間であった2009年度1月から本稿執筆時期である2010年度1月現在までに行われた主な活動は表1の通りである。

充電期間中を有効活用し、アートのアイデアを集めようと、1月にフランス大使館で行われた“*No Man's Land*”に出かけた。70人のアーティストによる大胆かつ自由奔放なこの展示会を通じて、自分たちの思う“アート”がいかに既成の概念に囚われていたかということやアートの無限大の可能性を再発見した。8月にも、「借りぐらしのアリエッティ×種田陽平展」と「生きのびるためのアート日韓合同展」を観覧し、見ている人を楽しませる空間の見せ方や様々な展示方法を学ぶことができた。

2月、私たちは白金の森で再スタートを切ることとなった。まず利用者さんとの交流から始めようと、お散歩や施設主催の回想法の時間にお手伝いに向かった。その後は、私たちの持ち込むアート製作の企画を通じた交流ができることになり、週に1回程度活動を続けてきた。明るく穏やかな利用者さんと、寛大な施設職員さんのおかげで、心温まる時間を過ごすことができた。

発足当初からSUZUを見守って下さった、俳人・花田春兆さん（以下春兆さん）と、春兆さんが入居する特別養護老人ホーム麻布慶福苑（以下慶福苑）とも交流することができた。今年は、“*No Man's Land*”観覧後の慶福苑訪問に始まり、7月の春兆さん主催イベント「第30回共に生きるみんなの歌と踊りのつどい」の観覧や8月の慶福苑夏祭りなどを通じて、つながりを持つことができた。そして嬉しいことに、秋に開催した学内展示会「白金アートミュージアム」に全面的にご協力頂けることとなった。

展示会も間近となった11月、春兆さんの作品に用いられる和紙を作らせていただくため、NPO法人

風の子会（以下風の子会）を訪ねた。春兆さんが会長を務める風の子会の皆さんは、「ひとりぼっちの障害者をなくそう」という団体のコンセプトの通り、とても明るくアットホームな雰囲気であつちを迎えてくれた。見せていただいた和紙は、原材料が牛乳パックだとは信じられないくらい本格的で綺麗だった。そして利用者の方につきっきりで教えて頂き、他愛もない会話を楽しみながら、私たちも 20 枚の和紙を完成することができた。

今年度ボランティアファンドチャレンジ賞を受賞したことで、11月24日～12月10日に初の学内展示会「白金アートミュージアム 丘の学園と森の特養とのアートの出会い～そして飛び入り遠囃子。昔の狸ばやしならぬ広尾の仲間たちの共鳴の出品～」を本学白金校舎パレットゾーン2階にて開催することができた（詳細は報告書80～81ページ参照）。また、展示会特別企画として俳句×写真の俳句ワークショップも行った。

表1. MG ☆SUZU 2010年度年間スケジュール

【2009年秋学期】	
1月28日	“No Man’s Land” 観覧
2月	白金の森での活動開始
【2010年春学期】	
4月～	月曜10:00～/木曜14:00～ 白金の森での活動
7月10日	「共に生きるみんなの歌と踊りのつどい」観覧
8月1日	慶福苑夏祭り
8月19日	「借りぐらしのアリエッティ×種田陽平展」 「生きのびるためのアート日韓合同展」観覧
【2010年秋学期】	
11月6日	風の子会にて和紙作り
11月24日	白金アートミュージアム
11月30日	俳句ワークショップ開催

【おわりに】

振り返ってみると、2010年度はMG ☆SUZUにとって大きなチャレンジの年であった。そして、このチャレンジを支えて下さった沢山の方々とのつながりを持てた1年でもあった。また、前年度の課題であった他プロジェクトとの協力態勢の構築という点は各種イベントを通じて大きく改善され、SUZUの活動の幅に広がりがあった。学内展示を行った反響は大きく、終了後に色々な方からお声をかけて頂いたことは驚きであった。今後は、新しい仲間を増やし、今年出来たつながりを大切にしながらアートの輪を広げていきたい。

(心理学部心理学科2年 櫻井 仁美)

[プロジェクト報告] MG natural

【はじめに】

『MG natural』は、明学生のためのボランティア情報誌である。「ボランティアを“自然”なことにするために」、「ボランティア活動にかける思いを“ナチュラル”に伝えたい」、「学生に愛され、“自然”と手に取ってもらえるフリーペーパーを作りたい」という思いから『MG natural』と名付けられました。ボランティアを明学生に広めること、人と人、他団体との繋がりをつくることをミッションとして活動しています。

【活動報告】

2010年11月にMG natural 第4号が発行されました。今までMG naturalの記事の編集はMG naturalの代表がIN Designを使って行っていたのですが、夏の研修会合宿で今後は学生スタッフがそれぞれ担当した記事を自分で編集すればいいのではないかという意見が出たため、秋学期から学生スタッフへのIN Designの講習会を行いました。

また、秋学期から生協と学生課の前にMG naturalを置いていただけることになり、より多くの明学生に手に取っていただける機会が増えました。

● MG natural 第4号の発行

2010年11月にMG natural 第4号を発行しました。第4号の内容はシロカネグローバルフェスタ2010、MG☆SUZU×こまどり社の対談企画、MG natural 探訪記、輝く★明学生、日米NPO ボランティア体験学習プログラム、ふれあい運動会の6企画で全12ページでした。元代表の須賀ゆきのさんからプロジェクトを引き継ぎ、何もかもが初めての手探り状態での制作でしたが、ボランティアセンターの方々や外部の方々のお力添えにより、なんとか形にして発行することが出来ました。

第4号はボランティアセンターと外部の繋がりに目を向け、新たな企画としてMG natural 探訪記を企画しました。MG パールのイベントであるジャングルクリスマスフェスタでお世話になっている第3世界ショップの森田千尋さん、また、元学生スタッフの葛原信太郎さんが設立したTetotE by 共有空間を訪れ、それぞれの仕事についてインタビューをさせていただきました。改めてボランティアセンターの繋がりの広さを感じるとともに、これからもこれらの繋がりを継続していきたいなと思います。



【反省】

2010年度の活動の反省点としてまず第1に段取りの悪さがありました。MG natural制作にあたっては企画・記事の依頼・打ち合わせ・編集・入稿といういくつかの過程がありますが、計画的に進めることが出来ていませんでした。実際にその企画を記事にするために必要な段取りや、編集作業を終了した後の最終チェック後の手直しにどれくらいかかるかなど、あらゆる事態を想定していなかったために結果として入稿が遅れてしまいました。今後はこのようなことがないように早め早めの行動を心がけて、計画的に作業を進めていきたいと思います。また、情報共有において、私が編集の作業中はそちらのほうにばかり熱中してしまい、経過などを他の学生スタッフに報告することを怠り、結果として私の個人プレーになってしまいました。今後は、学生スタッフ内での決まりであるハウレンソウ（報告・連絡・相談）を徹底し、情報がちゃんと流れるようにしたいと思います。

【今後の課題】

前年度からの課題として、まずMG naturalに関わるメンバーを増やすことがありました。しかし、一人ではメンバーを増やすためにはどうしたらいいか良い案が浮かんでこなかったのも、夏の研修合宿で参加者の皆様に意見を募ったところ、MG naturalは「ボランティアセンター発行の通信」であり、学生スタッフがボランティアセンターのことをよく知っているのだから、学生スタッフ以外の学生をメンバーとして募集するのではなく、学生スタッフがみんなでMG naturalを製作していけばいいのではないかと意見をいただきました。したがって、学生スタッフそれぞれが編集まで担当出来るようになるために、学生スタッフ全員にIn Design講習会を開いていきたいと思っています。

また、夏の研修会合宿の際に、参加者の方々からMG naturalの今後の方針や、企画についてなど、様々な意見をいただくことが出来ました。企画によっては実現が出来そうにないものもありましたが、素敵な企画案をたくさんいただいたので今後ちゃんと消化していけるように企画を詰めていきたいです。春学期（前期）は、学生スタッフで集まってMG naturalについての話し合いを行う場をとらず、メーリングリスト上で企画を募集していました。しかし、一人一人で考えるより、合宿の時のように実際にみんなで話し合いながら企画を考えた時のほうがたくさん良い企画が生まれるということがわかりました。今後は学生スタッフ内でちゃんと話し合いの機会を持ちたいと思います。

今までMG naturalはボランティアセンターの前でしか配布していませんでしたが、秋学期から生協と学生課の前にMG naturalを置いていただけることになりました。今後は、よりたくさんの明学生の方々に手にとっていただけるようになればいいなと思います。そのためにも内容をより充実させて今よりもっと良いものが出来るように努力をしていきたいと思っています。

（心理学部心理学科3年 酒井 麻里）

【プロジェクト報告】 COS 【Circle Of Shirokanaise】

【活動内容】

COS とは、“Circle Of Shirokanaise” の略で、明治学院大学のある白金という地域に根ざしたエコ活動を行っており「ゆるく・楽しく・かっこよく」大学周辺の清掃等をしている。気軽にできる活動を通して参加した学生同士のつながりを作ることが目的である。主な活動内容は以下の3つである。

1) 大学周辺の清掃活動

2) ペットボトルキャップの回収

3) COSblog の更新

*各内容の詳細は2009年度報告書28ページを参照。

【活動報告】

1) 春学期（前期）

春学期は月ごとに曜日を固定して定期清掃を行った。新規参加者もあり、メンバーも増え安定した活動ができた。6月は「昔の遊び」をテーマにイベントを行った。清掃をしながら公園に行き、童心に帰って遊ぼうという企画である。白金台にあるどんぐり公園でサッカーやキャッチボールをし、普段とは少し違った形で参加メンバー交流ができたと思う。7月に開催された「山黒（詳細は〇〇ページを参照）」が主催した白金校舎でのイベント「白金でまったり過ごす会」ではイベント参加者と一緒に白金校舎周辺でコラボ掃除を行った。このイベントでは清掃以外にも、たこ焼きパーティーやコラージュワークショップなど盛りだくさんな内容で、学内だけでなく学外の様々な立場の人と楽しく交流することができた。そして一緒に清掃活動をすることで、「山黒」のメンバーや学外の方にCOSの活動をただ知ってもらうだけでなく、COS独特ののんびりした「ゆるい」雰囲気を実際に味わってもらうことができたと思う。8月には港区リサイクル事業協同組合の方に来ていただき、たまっていたペットボトルのキャップを回収してもらった。回収を始めた2008年11月から2010年8月までに集まったキャップは200,000個以上となっている。

9月に行われた白金ボランティアセンター学生スタッフの研修合宿（詳細は29～30ページを参照）では、活動の報告、今後の計画について発表した。そこで、今まで代表が仕事を抱え込んでしまってメンバーに役割が振れていなかった状況や、活動しているもののメンバー同士の関係作りができていなかったという課題が明確化した。この合宿で他の学生スタッフからコアメンバーがそれぞれ空き時間を指定し、当日はそのメンバーがリーダーになって清掃活動を行うといった方法や、ミーティングは事務的なことだけ話すのではなく作業をしながら行うなど、今後の活動の立て直しについて様々な意見をもらった。

2) 秋学期（後期）

秋学期は各種イベントに参加したり、活動を工夫したりして充実した活動を展開することができた。

まず11月5日に高輪地区生活安全・環境美化協議会が主催した「高輪文化財周辺クリーンキャンペーン」に参加し、地域の方や地元の中학생たちと一緒に清掃活動を行った。活動を通して泉岳寺など高輪

地区にある文化財の存在を知り、よりこの地域に関心をもつことができた。また今期は白金の地域の方や白金ボランティアセンター内の他のプロジェクトメンバーとの横のつながりを作るために「種まき」と称して小学校や児童館、港区高輪地区総合支所など地域の施設に赴き、他プロジェクトのイベントの宣伝を行った。具体的には、3つのプロジェクト（山黒・SUZU・MG パール、詳細は41ページ、35ページ、33ページを参照）のメンバーと宣伝に行き、普段話す機会がなかったメンバーと一緒に活動することができた。種まきを通してCOSが他プロジェクトメンバー間をつなぐ架け橋のような存在になれるのでは、という新たな可能性を発見できた。12月からはメンバー内で仕事を役割分担するべく研修合宿で出た意見をもとに「リーダー制」を導入した。具体的にはコアメンバー内でリーダーを募り、その人が清掃活動の日時を決めて当日の活動をリードし、活動の様子をブログにアップするところまで担当することにしたのである。12月は4回実施した。その結果、どの道を通って清掃をするか決めた人や決めずに気ままに歩いた人、人が集まらず急遽工作を行った人などバリエーション豊かな活動を行うことができた。詳細はブログをご覧ください。（参照 URL：http://coscoscos.exblog.jp/）

その他、学園祭での清掃イベントやホームページのリニューアルも行った。旧ホームページは文章中心でインパクトに欠けていたため、トップページにCOSのロゴマークを大きく載せ、写真を多用してより見やすく「見たい」と思わせるページになるよう意識した。

【成果と課題】

「種まき」では他プロジェクトとのコラボができ、目的としていた学生スタッフ内の横のつながりを多少なりとも作る事ができたと思う。地域とのつながり、という面でも白金地域の様々な施設にイベントのチラシを置いていただけたので学生スタッフの活動を宣伝することができたと思う。また、高輪地区総合支所にイベントのお知らせを区のホームページに載せていただくこともできた。ただ、秋学期を通じて新規参加者が少なく、固定メンバーかつ少人数での活動が多かったことが残念な点である。参加者を増やすために、ブログの更新を頻繁に行い、ボランティアセンター前に次回の清掃日を書いたホワイトボードを設置するなど、広報面に力を入れたがその成果はまだ出ていない。活動をリーダー制にしたことでコアメンバー内の役割分担ができたので今後も継続させていきたい。

【今後の展望】

メンバーの大半が3年生のため、新メンバーの確保が急務である。まずはCOSに参加してもらいそこからコアメンバーになってもらえるような活動をするため、参加しやすい雰囲気作りや広報面での工夫、参加のきっかけとなるようなイベントを企画したいと考えている。また活動のモットーである“happy cycle,happy circle”の視点から様々な人たちとのつながりを広げ、COSの活動をさらに活発なものにするため、他団体が主催する清掃活動へ参加し、その意義や姿勢などを学んでCOSに還元したい。そして他プロジェクトとのコラボ企画も積極的に実現していきたい。

（心理学部心理学科3年本間由香、同2年佐藤ゆり）

[プロジェクト報告] 山黒

【団体紹介】

山黒とは、障がい者に関わる支援を行っている団体に関わっている学生同士のネットワークをつくることを目的に、2010年7月に白金ボランティアセンター学生スタッフのプロジェクトとして発足しました。学内のネットワークを活かし、より多くの学生や地域の人を巻き込んだ企画の立案や実施を行い、新たな人と人とのつながりを生みだしていくことを目指しています。



【活動報告】

(1) 白金でまったり過ごす会

[概要]：7月31日（土）に白金にあるNPO法人トータルヒューマンネット21「グループホームレインボー白金（以下、レインボー白金）」の利用者とスタッフ、地域住民、明学生が交流する場を作ることを目的とし「白金でまったり過ごす会」を開催しました。当日の参加者は約30名。イベントは全員でたこ焼き機を囲んでのたこ焼きパーティー、COS（報告書__ページ参照）とのコラボレーションイベントとして白金の街を歩きながらのゴミ拾い、そして新聞や雑誌を手で破り大きな紙に好きなように貼りつけていくコラージュアートづくりを行いました。



[成果と反省]：明治学院大学とレインボー白金は同じ地域にあるにもかかわらず、今まで両者はほとんど関わる機会がありませんでした。白金でまったり過ごす会を実施することでレインボー白金の利用者にとって大学へ足を運ぶきっかけをつくることができました。山黒にとっては、地域との関係性づくり、他のプロジェクトとのコラボレーション企画の可能性を探るなど、今後につながるイベントとなりました。反省としましては、学生同士で固まってしまう、外部の方々と交流できなかったということ、当日参加のボランティアとの情報共有ができていなかったためスムーズに動けなかったことの2点が挙げられました。人と人とのつながりを第一に考える山黒にとって、当事者と学生が交流しやすいような仕組みをつくっていくことがつねに必要なと感じました。

(2) ぱれ☆コレ2010～融合と発見～

[概要]：11月28日（日）にNPO法人ぱれっとが主催し、NPO法人クーピーファッションアートグループ、明治学院大学ボランティアセンターが共催する形で企画された、障がいのある人もない人もともに楽しむことのできるファッションショー・ぱれ☆コレ2010～融合と発見～（以下、ぱれコレ）に山黒がチームを結成し参加しました。このイベントの特徴は、障がいのある人とない人が1つのチームを作

り、数回にわたるワークショップを通して、チームごとに特色を出したパフォーマンスをつくり上げていくプロセスにあります。山黒チームは明学生のほか、プロのデザイナー、留学生や他大学の学生、そしてレインボー白金という、白金にあるグループホームの関係者で構成されました。私たち山黒も「障がい者」「福祉」という枠にとらわれず、様々な方たちと融合し、互いに学びあい、日々の変化を楽しみながらショーをつくり上げました。

本番当日の山黒チームは「ちょいわりーゼ白金」をテーマにレインボー白金の利用者と学生の14人がモデルとして出演しました。学生とレインボー白金の利用者がペアとなりギャング、ロリータ、パリジャン&パリジェンヌ、グループサウンズ、ウェスタン、水戸黄門といったイメージをもとにパフォーマンスを披露しました。

[成果と反省]：当日は関係者を含めると来場者は300人近く集まりました。モデルとなったメンバーは自由に個性的なパフォーマンスを披露し、会場は感動の渦に包まれました。当日のパフォーマンスも然ることながら。このぱれコレの一番の成果は、プロセスの中でつくり上げた関係性のあると思います。ぱれコレの目的はファッションショーという多くの人が興味をもつ媒体を通じて、日常では生まれにくいような出会いの場を作るということでした。実際に山黒チームには、福祉には全く関心がなかった学生が関わりましたが、障害をもった方と向き合うことで、新たな気づきや発見が生まれるきっかけになったという声を多く聞くことができました。一緒に楽しみ、ときには悩みながら衣装やパフォーマンスを作るというプロセスを通じて、障がいのあるなしに関係なく共感し合えるような関係を築くことができました。また、ぱれコレを通じて、活動に興味をもってもらえる学生が増えました。これらのつながりは次回につながる大きな成果でありました。反省としましては、目の前のことに追われてしまい、進行状況の把握が物や情報の管理が甘かった点が挙げられます。先にことをシュミレーションし、全てのことを組み立てて考える力をつけていくことが今後の山黒メンバーの課題であります。

【今後の方針】

昨年度は、ぱれコレの準備に追われてしまい、正式な山黒メンバーが確定していません。まずはメンバーを再募集し新制山黒を結成することから始めたいと思います。半年間でつくり上げた新たなつながりを活かし、学生らしいオリジナリティのある企画を考えていきたいと思います。福祉に全く関わったことのない学生を巻き込めるイベントとして間口が広く、交流の生まれやすい仕組みづくりを忘れないで活動していきたいです。また、企画・立案だけではなく山黒メンバーが日常で関わっているそれぞれの団体に抱えている問題を共有し、共に解決方法を考えられるような環境づくりをしていきたいと考えています。

(経済学部国際経営学科4年 黒澤友貴)

[卒業学年報告] 4年間を振り返って～私とボラセンの変化～

ボランティアセンター（以下ボラセン）にはじめて足を踏み入れたのは、大学1年生の時。入学式後の学校説明の中で、ボラセンと学生スタッフの存在を知り、大学生になったら新しいことにチャレンジしようと思っていた私は、単純に「面白そう」と思い、ボラセン学生スタッフ（以下学生スタッフ）になった。この時、学生スタッフとしての活動が私の中で大きなものとなろうとは考えてもみなかった。

1年生の頃は、活動に参加していたものの、「学生スタッフって何をやっているの?」と友達に聞かれても、曖昧な答えしかできなかった。大学生生活に慣れた2年の春、活動をせず、ただ籍を置くことに違和感を覚えはじめた。「自分は何がしたいのだろう」、そう思った時、ある先輩が白金地域の活動に誘ってくれた。それがボラセンでの活動を変えるきっかけとなり、白金地域でのお祭りの企画・運営、MGパールの活動や施設でのボランティアなど積極的に参加した。“自ら”考え、動くことの大切さを学び、色んなことを経験したくて、がむしゃらに活動していた。その中で様々な人と出会い、多くのことを学んだ。それを多くの人に伝えたくて2年生の秋、ボランティア情報誌「MG natural」を創刊した。インタビューでボランティアにかける熱い想いを聞いて刺激を受け、人にものごとを伝える難しさも経験した。2年の終わりからはチーフを引き継ぎ、しろかねサラダとMG naturalの代表をさせてもらうなど、ただ単に活動するだけではなく、マネジメントし、まとめる立場となった。責任も増えたがやりがいも感じたし、何よりスタッフ1人1人が自分のやるべきことを自覚して活動に励んでいたのも、代表であることをプレッシャーに感じることなく、自分らしく活動に参加できた。4年生の後半はあまり活動に参加できなかったことが心残りではあるが、学生スタッフとして活動した4年間はとても充実していた。以上のように私は学生スタッフとして変化してきたが、学生スタッフという団体もこの4年間で大きく変化してきた。私が1年生の頃と4年生の頃では学生スタッフ1人1人の意識も活動内容も活気も全く違う。しかし、これは簡単にできたのではなく、卒業した先輩や李さんをはじめ白金ボラセンのスタッフ皆で苦勞して作り上げた結晶である。私自身もその苦勞をしてきた分、その結晶をゴールとはせずさらに大きなものにしよう頑張っている後輩たちを見ていると、昔の苦勞も吹き飛ばすほど嬉しくなる。私が学生スタッフとなり、得たもの。それは良き仲間である。活動は楽しいことばかりではなく、時には辛いこともあったが、相談に乗ってくれ、助けてくれる仲間がいた。そして刺激し合い、切磋琢磨しながら互いを高め合える仲間がいた。そんな仲間が大勢できたことは、私が学生スタッフになって得た大きな財産である。そして、「“自ら”考え、行動すること」の大切さを学べたことも大きかった。受け身がちだった1年生の時の私は、どこかつまらなさを感じていたのだと思う。しかし、自分で行動することの大切さを知り、実際に行動にすることで視野も世界も広がった。ここで学んだことは社会に出て生かし、色んなことに挑戦していきたい。最後にボランティアセンターの職員の方々、大切な仲間、そして地域の方や関わって下さった沢山の方に感謝を述べたい。社会に出てボラセンで学んだ“謙虚さ”と“素直さ”を忘れず、大きく成長できるよう頑張っていきたい。 (心理学科4年 須賀ゆきの)

[卒業学年報告] ～山黒の黒～

私が学生スタッフになったのは大学4年の6月と比較的遅い時期であった。もともとNPO法人ぱれっと（以下ぱれっと）でインターンシップを行っていたため、ボランティアという言葉は自分にとって身近なものではあった。ただ、明学ボランティアセンターのことはほとんど知らなかった。たまたま足を運んだときに、コーディネーターの李さんが語る「学生スタッフ」というものになぜだかわからないが強く惹かれたのを覚えている。勢いで学生スタッフになり、NPO法人トータルヒューマンネット21「グループホームレインボー白金」（以下レインボー白金）でボランティアをしている山本さんと出会い、「山黒」を立ち上げることになった。そして、山黒を結成してから1カ月も立たないうちに、ファッションショー「ぱれ☆コレ2010（以下ぱれコレ）」の話が持ち上がった[山黒報告参照]。学生スタッフになる前は、すでにあるボランティア活動に乗っかるだけの現状に物足りなさを感じており、自分が主体となって作っていきることが楽しみであった。

しかし、イベント準備が始まり、200人規模のファッションショーを他団体と協働で地域を巻き込みながら行うということは予想していた以上に大変だった。自分がどの立場に関わるべきなのが見定められない、情報共有がうまくいかず仕事を一人で抱え込んでしまうなど当初考えていたように進まない葛藤にいつも悩まされ、問題の原因は自分自身にあるのに、周りのせいにしてしまうときも何度かあった。しかし、いつも悩んでいる自分の支えになってくれる頼もしい仲間がボラセンにはいた。みんなからの声かけがボランティアセンター、学生スタッフ、山黒メンバーという心強いつながりのなかに自分があることをいつも思いださせてくれた。このつながりが、自分たちが主体となってつくっていく学生スタッフの醍醐味なのだと感じた。ぱれコレをつくり上げるなかで、いつのまにかボラセンが自分にとっての居場所となっていた。学生スタッフになって僅か半年間であったが、ボラセンで出会ったこの仲間とのつながりは、自分にとって一生の財産になると思う。山黒には、他の関わっている団体よりも愛着をもつようになっていたし、愛着をもつになるにつれて、活動にやりがいを感じるようになっていった。就職活動の最中であつたにも関わらず、あつたとき勢いで学生スタッフになって本当によかつたと思っている。学生スタッフにならなかつたら、苦しい思いもせずに、自分の好き勝手に時間を使っていたのかしれないけれど、その分今のような出会いもなかつただろうし、成長もできなかつたのではないかと思う。

最後に、いつも失敗してばかりの自分に場数を踏む機会をつくってくださった、ぱれっと、レインボー白金、山黒メンバー、ボランティアセンター職員の皆様、本当にありがとうございました。この半年間は自分の甘さに気づかされることばかりでしたが、活動のなかで学生スタッフの大切にしている「責任と自覚」という言葉の意味や重さを何度も再確認することができました。まだまだ未熟な自分ではありますが、ボラセンで得た貴重な経験を社会人になってからも実践の場で活かし続けていきたいと思つています。

（経済学部国際経営学科4年 黒澤友貴）

[卒業学年報告] こんなはずじゃなかった!!

大学卒業を間近に控え、ふとその4年間を振り返ると、ボランティアセンターでの日々がまず思い出され、それと同時に数々の「こんなはずではなかった!」というエピソードが蘇る。そもそも、ボランティアセンターの学生スタッフになったことが、1番の「こんなはずではなかった!」である。

私がボランティアを最初に行ったのは、大学1年の秋、高齢者施設内の喫茶スペースでの活動だ。そのご縁でボランティアセンターとの関わりを持たせて頂くことになるのだが、それをきっかけに、気がつけば自分のやる気に火がつき、2年の春、MG☆SUZU(前頁参照)を立ち上げ、学生スタッフに登録、ボランティアファンド学生チャレンジ賞(前頁参照、通称「ボラチャレ」)に応募、助成が決定した。ここに至るまで、本当にあっという間であった。物事に対し、積極的とは言い難い自分にとって、団体を立ち上げたり、審査員を前にプレゼンテーションをするボラチャレの審査会など、出来れば避けて通りたいような出来事ばかりだったので、あのところ私が思い描いていた大学生活とは全く違う、自分には少し背伸びをしていたような日々であったように思う。そのお陰で、今までの自分より成長できた。特に、学生スタッフの研修会や、ボラチャレの報告会、新メンバー獲得のための説明会など、人前で発表する機会が多かったため、「人に伝える力」を鍛えられた気がする。自分以外の人が話している姿を見て刺激を受けたり、SUZUの活動を進めていく中でいかにその魅力を伝えられるかを考えていく中で、まだまだ未熟ではあるが、そこは成長出来た部分であり、またその大切さを知ることが出来た。

最初はメンバーが私ひとりのMG☆SUZUだったが、1年間で4人になり、今では二桁になった。私が3年の時に行った展示会をもって代が替わり、今年の秋、念願だった学内展示「白金アートミュージアム」(前頁参照)が開催された。展示会を観に行った時は、新しくなったSUZUの姿を見たようで、何とも言えない思いがこみ上げてきた。後輩たちの努力、施設の利用者の方々や職員の皆さま、ボランティアセンターの職員・学生スタッフの皆さまなど、本当に多くの力がSUZUを支えてくださって、そしてあのSUZUが今も存在しその上大きくなっていて、設立当時の私には想像出来ないまさに「こんなはずではなかった」である。考えてみれば、私はいつも多くの方に支えられていた。よく、1人でSUZUを作ったということに「すごいね。」と驚いてくださる方もいるが、立ち上げたときも本当に1人だったことは1度もない。ボランティアセンターの職員の方々をはじめ、学生スタッフの先輩や同学年の友達などが、いつも力を貸してくれた。ボランティアセンターは、どんなに落ち込んでいても、行けばまた何でも出来そうな気になれる、不思議な力があつた。その不思議な力に支えられ、幾度となくぶち当たった壁を一緒に乗り越えてきたかけがえのないメンバーや、さらにSUZUを成長させてくれた素晴らしい後輩など、私は多くの出会いを得ることが出来た。これほど中身の濃い経験をする事になるとは、「こんなはずじゃなかった!」な4年間であり、これを糧に今後も成長していきたい。

最後に、今まで支えて下さったボランティアセンター職員の皆さまを始め、多くの方々に感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。(社会学部社会福祉学科4年 依田ツカサ)

[卒業学年報告] 小さなきっかけから大きな宝物

私は2年生からMG☆SUZUのメンバーとして活動してきた。きっかけはほんの小さなこと。授業中に配られた勧誘チラシを受け取ったことが始まりだった。チラシに書いてある説明会、行こうかな、でもちょっと面倒くさいからやめようかな、と悩んだ末、行くだけ行ってみようかと踏み出した一歩から全ては始まった。踏み出して良かったと今心から思う。現在メンバーは10人以上だが、当時は3人しかおらず、私が4人目のメンバーとなった。心細いスタートだったが、そこから紆余曲折を経て現在のSUZUができあがり、私は学生スタッフにもなり、大きな宝物に出会うことができた。

宝物その1.「仲間」…SUZUメンバーはもちろんのこと、他のプロジェクトで活動している魅力的な学生スタッフにも出会うことができた。皆が黙りこくった話し合いの場できちんと自分の意見を言える人、ゴミが散乱した中で手が汚れるのも構わずさっと動いて拾える人、会うたびに満面の笑みを浮かべてくれる人、皆の知らないところで地道な努力を続けてくれた人、たくさん学ぶことがあった。素敵な仲間がたくさんいた。私はこんな仲間と卒業後もずっとずっとつながっていたい。

宝物その2.「福祉の勉強」…特別養護老人ホームで活動する中で、高齢者の方や施設職員の方と関わってきた。相手の立場に立って行動すること、手を握ること、笑うこと、一緒に喜ぶこと、一緒に楽しむこと、「心」について本当に多くのことを学ばせていただいた。そして、どんな施設が利用者さんとご家族にとって幸せなのか、福祉職で働くってどんなことなのか、失敗と反省を繰り返しながら私なりに勉強することができた。本当に感謝している。

宝物は他にも挙げればキリがないけれど、大きく2つを挙げた。きらきらした思い出を、本当にありがとうございます。

いつも温かくサポートし、学生の成長を見守って下さったボラセン職員の方々、私にたくさんの刺激と笑顔をくれたSUZUと学生スタッフの仲間たち、福祉って何なのか考えさせて下さった施設職員の方々、どうもありがとうございました。SUZUとして、また学生スタッフとして活動できたことは、私の大切な宝物です。



学内展示の様子（みんな忙しくて全員揃わず）

展示会の打ち上げの様子（OB・OGも参加）



（社会学部社会福祉学科4年 小平愛実）

《寄稿》 「めいがくのすきま展」報告

昨年度に引き続き今年度もまた「めいがくのすきま展」と銘打ち、6月7日（月）～11日（金）に明治学院大学・白金校舎ボランティアセンターの空間を使ってこまどり社・作品展をおこないました。

前回は2ヶ月半という長い期間を使った展示でありまして、その期間中に制作された作品（時には会場内にて公開制作）を不定期的に配置していくやり方でしたが、今回の展示はこまどり社が3月下旬～4月上旬にかけて大阪・釜ヶ崎に滞在し制作した作品の巡回展の一環でもありまして、その際に制作した風景画59枚を中心とした展示で、5日間と短期間の開催でした。

それら絵のひとつひとつはそんなに大きくなくとも枚数が多く、それらを展示先の空間（このたび巡回した各所空間はどこもギャラリー的構造ではない生活空間）にどう配置していくかがこの巡回展のテーマの1つであり、展示に使う空間の構造によって方法を変えつつやってきました。

昨年の「すきま展」では日常空間の隙間に混ぜ込むやりかたで、あえてそこに作品がある（それが作品であるのか）とは気づきにくいような配置を試みた展示だったのですが、今回は逆に全部の絵を1箇所に集約させたオブジェ的立体を段ボールを土台に作り、それを空間内の壁に立て掛ける一目瞭然な展示法になりました。

59枚の風景画は滞在中に釜ヶ崎の町のなかの至る風景をマジックペンで1枚につき約10分程度で描いた簡素なもので、描こうと思ったきっかけとしては釜ヶ崎滞在期間中に会った人たち約20人ぐらいに私の似顔絵を描いてもらった折に、それら似顔絵がどれとして見事に他の絵と同じ顔のように描かれてはいないが、すべてが私の似顔絵以外の何物でもなく見えた辺り、いわば「同じものを見ていても人によって目に映る風景は同じではないはず」と思いしところに端を発してであり、自分がこの土地と直接向き合うのなら、やはり自分の主要表現法である絵を描く行為を媒介としたいという思いもあつての行為でした。

そしてそれが「自分の意識や感情のフィルターを通した上で映る風景」に忠実に描写する行為というある種捏造的な要素も内包する風景画を描くことで、既に定義されたものとしてあるかの様々な前提をいちど自身の感覚にて再検討する思考。それは本来は多様なはずだがイメージが固定されがちなボランティア行為の前提を洗いなおすことと結び付けられないか、と言えば強引な妄言かもしれませんが…。

個人の生活者としての感覚の直接的行為、それ自体がアートになりうる可能性を含むという提案は昨年の報告でも書かせてもらいましたが、展示でも自分の制作のスムーズにはいかない、あえて荒削りな部分を意図的に晒すことで、その辺りを空間に足を運ぶ方々に感じ取ってもらいたいとも目論みました。

とはいえ今回はすでに内容の決められた作品の巡回展の一環でありましたが故、ボランティアセンターという場所でやる意義と密接な意図を含んだ展示とまではいかず、ヒトと人との関わりの中から作品が創り出される感覚をあまり含み切れなかった心残りがあります。もしまた機会があれば、その辺りをテーマに据えた展示なりワークショップ的な試みをやれたらと思っております。（こまどり社・仮屋崎）

リレートーク～白金ボラセンから広がる輪～

全面ガラス張りで横浜校舎の中央に位置する建物の1階に構える横浜ボランティアセンターとは対照的に、白金ボランティアセンター（以下、白金ボラセン）は窓がなく、半地下のような雰囲気の本館1階部分に位置している。したがって、学生たちから「気軽に立ち寄りにくい」という意見をよく聞いていた。しかし、白金ボラセンを「夢を語る場所」にしたいという想いもあった。また、白金校舎は昼休みが40分と短く、食堂は学生で混雑するという状況があった。このような白金ボラセンと大学の状況をずっと認識していたのだが、なかなかそれを「コーディネート」するアイデアが思いつかなかった。それを2009年度のセンター拡張（詳しくは2009年度報告書を参照）を機に少しでも改善できればという思いで始めたのが、白金ボラセンの拡張リニューアル記念イベントとしてスタートした「リレートーク～白金ボラセンから広がる輪～」である。具体的には、お昼休みの時間に、学生を始め、学内教職員や学外の様々な方々に30分という時間を好きに使って発表していただき、発表しない人々はランチを食べながら耳を傾けたり、時には一緒に議論したりする、というものである。聴衆は自身の都合で自由に入退室可能である。また、発表内容もボランティアに特化したものでなくていい。学生の発表では、自身のボランティア体験を話した学生もいれば、旅の報告や好きなマンガについて熱く語った学生、報告会に来れなかった人にも聞いてほしいと、日米NPOボランティア体験学習プログラム（詳細は本報告書12～15ページ参照）での個人発表を披露した学生、ボルネオスタディーツアー（詳細は本報告書16～19ページ参照）に参加し、次年度の参加時はぜひマレー語を話したいからと「マレー語講座」を毎週開いた学生、授業で聞いた内容で抱いたささやかな「疑問」を、学部や立場を越えて投げかけた学生など、バラエティに富んでいた。また、学生スタッフやサークルによる、イベントや団体説明があったり、地域の運動会でデモンストレーションをする学生たちの「ラジオ体操講習会」といった、スピーチ以外の発表もあったりした。その他、学生たちが参加したイベントや、地域のケーブルテレビで放送された番組、その他関わりのあるNPOスタッフが出演しているテレビ番組のDVD上映会も開催された。センター拡張時、壁と窓のない白金ボラセンの特性を活かし、奥の壁は物を置かず、プロジェクター投影を考えて白壁にしたのだが、おかげで投影時のコントラストは抜群だった。そしてこの様子はセンターの外からもよく見え、通りがかりの学生がのぞきこんだり、ふらっと入ってきたりすることもあった。学外者の参加では、こまどり社によるすきま展2（詳細は本報告書47ページ参照）記念ギャラリートークショーや、港区の団体職員による地域イベントの紹介などがあった。学内教職員では今年度から着任した当センターのセンター長とセンター長補佐が発表した。2010年度は1月現在までに33回実施し、スケジュールはカレンダーに書き込むデザインのページを作って事前にホームページにアップし、白金ボラセン前のイーゼルに貼り出した。来年度も白金ボラセンを、多様な人々が多様な内容で夢を語り合い、出会う場所にすべく、来年度も本企画を継続し、参加者を募りたい。そして、白金ボラセンの活用方法の一つとして積極的にアピールしていきたい。

（李）

白金校舎学生スタッフホームページについて

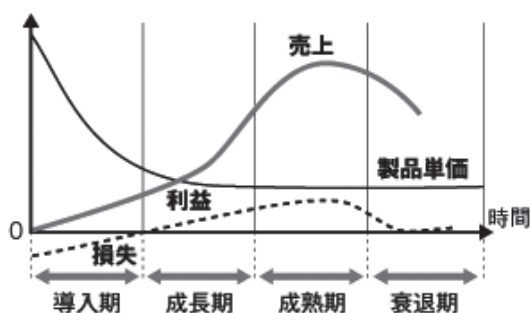
様々な方々のご理解とご協力、そして学生たちの日々の地道な活動の蓄積の結果として、白金ボランティアセンター（以下、白金ボラセン）は年々活動の幅を広げてきた。そんな白金ボラセンの様々な事業を支えてくれている、一番のパートナーであり、仲間は学生スタッフである。現在、白金ボラセン学生スタッフはプロジェクトという名称のもと、6つの活動を展開しているが（詳細は本報告書31～42ページを参照）、これらは日々変化と発展を続けている。このような状況の中、改めて現在のホームページを見直し、改善点を検討する必要があるという議論が起こった。また、白金学生スタッフは卒業学年の学生たちがいること、そしてどの学年のタイミングでも受け入れていることから、毎年半数程度新たな顔ぶれがそろそろ。このような学生たちに、限られた時間と環境の中で学生スタッフの活動内容やポリシーを伝えることは容易ではない。しかし、ホームページのリニューアル作業を行うことによって、これらをうまく「コーディネート」できるのではないかと考えた。また、ホームページは何らかの情報を発信する媒体であるが、情報の伝達は一方通行にならざるを得ない。したがって、発信者（作成者）は発信内容をよく理解し、閲覧者の立場で何度も客観的に見直すといった、2つの立場の往復を繰り返さなくてはならない。それは学生スタッフの指導において重視している、他者への貢献のためには己をよく知り、己を客観的に見ることのできる力と、全体状況を把握する力の育成にもつながる。以上のような状況と目的をもとに、今年度、白金ボラセン学生スタッフのページの大幅なリニューアル作業が始まった。学生たちはまず、現在のページを検討し、必要なもの、削除すべきもの、新たに加えるべきものの内容をまとめたたたき台を作成した。それをもとに、コーディネーター（筆者）と白金ボラセンのウェブ担当スタッフの3者で協議を行い、内容と技術の両面から議論し、内容をブラッシュアップしていった。当然ながら、ホームページは文字や文章だけではなく、デザインや構成も複合的に合わさったうえでの情報発信方法である。したがって、アイコンなどのデザインや写真、レイアウトについても、「なぜこうするのか？」という問いに答えることを求めた。学生たちは予想以上に様々な目を持つことが求められ、そのバランスを見出すのに苦心していた。しかし、自身の日々の活動を、なんとか形にして発信したいというモチベーションと、他の学生たちと切磋琢磨ができる環境による刺激（ページトップにプロジェクト名を共通のフォントで記載すること以外、全て自由とした）もあり、完成のスピードは異なるものの、何とか年度内に全てのリニューアルが完成する予定である。そして白金ボラセンとしても今年度内にリニューアルの準備を進め、学生スタッフに関する内容とそれ以外の内容を整理し、より分かりやすく白金ボラセンを理解していただけるよう工夫した。今年度特に力を入れた「活動ニュース」という日々の活動の発信と更新の甲斐あってか、白金のページを開設した2009年5月29日より設置しているカウンターも、ボランティアセンターホームページの奥にあるにも関わらず6000を超え、地域の方々からも楽しく閲覧しているとおっしゃっていただいている。今年度整えたホームページを、来年度存分に活用したい。

（李）

2010 年度を振り返って

筆者がセンターに着任して早くも5年が過ぎた。そして現在の白金ボランティアセンター（以下、白金ボラセン）の基幹事業となっている学生スタッフと学外の方々との3者連携プロジェクトを始めて3年が経過した。時間の量を考えると焦燥感に苛まれるが、時間の質を考えた時、多くの困難や壁に直面しながらも、仲間たちと共に乗り越えてきた日々と、その蓄積の結果として現れた変容と成果に誇らしい気持ちになる。このような結果と形が見え始めたのは、ちょうど1年前に実施した、秋学期（後期）学生スタッフ研修会での2009年度総括の時だったように思う。そして、筆者の着任以来4年間、共に歩み活動の基盤を築いてくれた学生スタッフたちが卒業したこともあり、個人的にも2010年度は新たな局面と展開があるだろうと感じていた。ジョエル・ディーンが1950年に提唱したプロダクト・ライフサイクルの理論から例えると、今年度は成長期と成熟期の狭間に該当すると考えた。つまり、ある程度見出せた「成果」に甘んじるという選択も可能であり、その結果活動が陳腐化する可能性も孕んでいるとみなすことができる時期になるのではないかと予想した。さらに、特に導入期においてはまだ目に見える「成果」を発信したり、示したりすることが難しいので、悩みの種にはならないが、ある程度の「成果」や「カタチ」が現われ出すと、学内外問わず、多くの団体や個人に関心を示していただくようになり、実に多様な出会いが発生する。しかし、一方で私たち自身も、成熟期にさしかかろうとしているタイミングであれば、成長が鈍化し、結果が頭打ちになっているのではと焦りやすくなる可能性も考えられる（表1参照）。

表1. プロダクト・ライフサイクルの概念図



出典：野村総合研究所 HP (<http://www.nri.co.jp/index.html>)

つまり、チャンスとリスクが紙一重に混在する時期に突入するのである。したがって、活動内容を更に頻繁に見直し、より具体的に焦点を定め、ぶれないポリシーを仲間と共有しながら、現場の中におけるニッチ戦略を自ら見出していくことが必要となってくる。このような問題意識を2009年度末に感じながら今年度を迎えたが、2010年度が始まってから、このような問題意識は自然に白金学生スタッフら

¹参考文献：野村総合研究所 編著「経営用語の基礎知識（第3版）」2008 ダイアモンド社

との間で共有されていき、よく話題にも上るようになったが、実際の現場は生モノであり、当然ながらシナリオ通りに進まないことのほうが圧倒的に多かった。しかし今年度は、特に学生スタッフプロジェクトにおいて実に多くの成果と発展、変容を遂げることができた。新たに6つめのプロジェクトとして立ち上がった「山黒」では、「ばれ☆コレ 2010」の参加を通してプロジェクトの主旨である知的障がい者の余暇支援活動に関わる学生たちのネットワーク作りの素地を作ることができたり、白金校舎近隣に位置し、日ごろ学生たちがボランティアに伺わせていただいていたNPO法人トータルヒューマンネット21「グループホームレインボー白金」の皆様とも、チームとして一緒に参加していただいたことにより一層交流を深めることができた（詳細は本報告書41～42ページ参照）。また、このイベントはボランティアセンターも共催として関わったことで、イベント会場の提供をはじめ、イベント全体に積極的に関わらせていただくことになった。主催団体であるNPO法人ばれっと、共催団体である内閣府NPO法人クーピーアートファッショングループをはじめ、多方面の多くの関係者の皆様と協働させていただく機会を賜ったことは、白金ボランティアセンターの今後の活動においても、多くの可能性を与えていただいたと感じている。また、「志田町倶楽部明治学院大学学生チーム」から「しろかねサラダ」として新たなスタートを切ったが、新たに何らかの活動を加えたりしたものではない。今までの活動を通じた蓄積とそれに伴いバラバラに存在していた白金地域での活動をまとめただけである（詳細は本報告書31～32ページを参照）。白金地域と一言と言っても住所も高輪、白金、白金台と微妙に異なったり、それぞれの地域性があったりとバラエティに富んでいるのだが、大学・学生という立場だからこそそれぞれに関わらせていただいたり、活動させていただけた部分もあるかと感じている。今後も、地域に対する今までの感謝の気持ちを忘れず、これらの異なる魅力を大学・学生という立場から紹介させていただいたり、出会いの場作りとしての役割を少しでも担えたりできたらと考えている。そして今年度より新たなフィールドで活動を再開させた「MG☆SUZU」は、3年越しの夢だった学内展示を実現することができた。それは、プロジェクト開始時より、常に見守り続けてくださった俳人花田春兆先生と、前ボランティアセンター長補佐である茨木尚子先生の存在なくしては実現することはできなかった。今年度からプロジェクトに参加してくださった港区立特別養護老人ホーム白金の森と、特別養護老人ホーム麻布慶福苑の利用者とご家族の皆様、スタッフの皆様にも心から感謝申し上げます。そして今回の学内展示は、特定非営利活動法人風の子会ともつながりをつくるきっかけにもなった。同様に「MGパール」もプロジェクト開始から3年目の今年、念願だった現地ボルネオに学生たちと訪れることができた（詳細は本報告書33～34ページを参照）。スタディーツアーを催行できたことにより、学生たちのモチベーションは目を見張るほど上がり、新たな意欲的な学生たちとの出会いにもつながった（詳細は本報告書16～19ページを参照）。何より、今回の現地訪問に、ずっと根気良く一緒に歩いてくださった、NPO法人ボルネオ保全トラストジャパンの皆様とご一緒できたことは非常に感慨深く、意義深いことであった。「COS」も新たな局面を開くことができた。昨年度まで、学生スタッフはプロジェクトに囚われ、他のプロジェクトや学生ス

スタッフとの連携が不足しているという課題があったのだが、COSが各プロジェクトに参加している学生スタッフやそれ以外の学生たちも巻き込んで、「種まき」と称した、広報活動と街歩きとネットワーク作りを兼ねたクリーン活動を始めたのである。それによって新たな学内外のつながりができたり、活動や分野を超えた学生の連携が次々と実現したりして、大きなイベントが続いた今年度を無事乗り切ることができた（詳細は本報告書39～40ページ参照）。特に、港区高輪地区総合支所の皆様にはあたたかく迎えていただき、ご支援を賜った。「MGnatural」では、卒業生や日ごろお世話になっている学外団体を積極的に紹介させていただき、記事の内容の充実を図った（詳細は本報告書37～38ページ参照）。他にも昨年に続き、そして昨年度よりも大きな会場で、「白金合コン」も開催することができた（詳細は本報告書27～28ページ参照）。以上、学生スタッフを中心に白金ボラセン報告の筆を進めたが、それには理由がある。学生スタッフらは「人と人をつなぐ役割を担う」ことを共通のミッションに掲げているが、彼らは、これらのプロジェクトを通して学生スタッフではない、他の学生たちをインスパイアしていくという、ピア・エジュケーションの重要な担い手として活躍しているのである。実際、プロジェクトの様々な活動を通して、多くの学生たちがボランティア活動に参加してくれた。それはイベント当日だけではなく、白金ボラセンが推奨している「空きコマボランティア」というスタイルでの関わりが圧倒的に多かった。そうした日々の小さな関わりを経て、今までボランティアに関心や関わりがなかったり、ボランティアセンターを利用したことがなかった学生たちが、白金ボラセンに出入りするようになったり、トークイベントに参加するようになったり（詳細は本報告書48ページ参照）、時にはホームページの活動ニュース（詳細は本報告書49ページ参照）に記事を掲載したりするようになっていった。今年度、学生スタッフは1年生から4年生まで19名であり、横浜校舎在籍の学生たちも含まれている。ボランティアセンターは学生の課外活動を通じた教育支援を行う部署であることから、教員と学生といったような強力な関係性はない。また、高校までとは違い、学生たちは毎日大学に来るわけでもなく、授業の取り方も学生によって異なる。このような状況の中、筆者ができることは非常に限られているが、19名の学生たちのわずかな隙間時間を活用しながら、彼らと信頼関係を築き、プロジェクトを展開している。そして彼らにはニーズに対応して行動するプレイヤーと、全体状況を見渡し黒子として行動できるマネージャーの2つの役割の経験と往復を求め、この実践に必要な指導を行っている。

以上、今年度享受できた豊かな収穫と成果について報告したが、これらはあくまでもプロセスの帰結であり、結果として示された変容が「成果」としてとらえることができたと考えている。「成果」だけを切り取ると、非常に「美しい」のだが、ここに辿り着くまでのプロセスは困難と失敗の連続である。しかしこのプロセスこそボランティアセンターが担う課外活動を通じた教育支援の現れであり、私たち教職員にとっても、学生たちにとっても、忘れてはならない、味は苦いが非常に効力のある財産である。今年度卒業していく学生のうち、チーフを務めた学生が昨年（2009年度）の研修会でのチーフの引き継ぎの際、学生スタッフらに語った言葉が思い出される。「学生スタッフにとって重要なのは義務と責任を負

うことです。義務と責任は重くて面倒な印象がありますが、義務と責任なくして、本当の“充実”や“楽しさ”はありません。」本来ならば、筆者が伝えなくてはならないところだが、このように学生たちは日々の協働を通して、着実に仲間として成長し、確実に頼もしい存在となっている。本報告書でも、細かい内容については、学生たちがそれぞれ分担して執筆しているため、筆者がこれ以上加筆することはない。しかしこの学生の言葉に少し補足するならば、義務と責任の追及は、当然ながら自分自身に向けたものであり、その次に他者に対する義務と責任の追及が発生するということである。本学の教育理念は「Do for Others（他者への貢献）」であるが、今年度は前述したような問題意識をもってスタートしたことや、結果として成熟期にさしかかりつつも、多様な出会いや経験を伴いながらもまだ成長できたことによって、他者へ貢献するということはどのようなことなのか、「他者へ貢献」する過程は自分を知るプロセスでもあることを、学生たちと深く考えさせられた1年であった。ボランティアは他者に何らかの「善い」行為をするということが普遍的価値観として見做されているが、自分にとって「善い」行いは他者にとっても決して「善い」とは限らない、というボランティア活動における盲点を幾度となく考えさせられた。他者に対する行為や言動を通して、自分自身も問われている。そのような無意識なカルマを自分自身も孕む可能性があることを常に意識していくことを今後も肝に銘じたい。

ボランティアセンターのリーフレットをリニューアルした2009年3月、筆者は白金ボランティアセンターの紹介の冒頭に「夢を語る場所として」という見出しをつけた。それから2年が経ち、今年度を振り返ってみると、白金ボラセンは、「夢を語る場所」から「夢を実現する場所」へ変貌を遂げた、もしくは遂げつつあると総括できよう。そしてそれは一重に、日々汗を流してくれた仲間である学生スタッフをはじめとした学生の皆さんと、惜しめない理解と協力を、変わらず注いでくださった学外の様々な団体・個人の皆様のおかげである。今年度（2010年9月）で5回目の参加となった、スリランカ大使館が主催する「スリランカフェスティバル」には、今回も50名を超す学生たちが参加させていただき、学生が伺い始めて4年目の林試の森クリニックも、引き続きあたたかく学生たちを受け入れてくださっている。その他も、たくさんの方々のご理解とご支援、ご協力を賜った。字数に限りがあるため、全ての方々をご紹介することができないが、心から感謝申し上げる。

2011年度は、本稿で明らかにした学生スタッフの役割と特性を更に活かし、発展させることができる教育支援の在り方について検討していきたい。現在、プロジェクトを取り巻く学生は、「コア（学生スタッフ）」と「メンバー（学生スタッフではないが、プロジェクトメンバーとして活動している）」、「どちらでもない（気軽にタイミングが合うときのみ参加する）」の、大きく3パターンに分かれているが、「コア」と「メンバー」の棲みわけ、もしくは棲み分ける必要のないロジックの整理が必要であるという声が、学生たちの中で提議されている。意見は、次のステップへのチャンスへの合図である。来年度も白金ボラセンの成長期が続くことも視野に含め、学生たちと一緒に考え、成長していきたい。（李）

横浜校舎ボランティアセンター報告

横浜校舎学生スタッフ活動報告

2010年度、私たちボランティアセンター横浜学生スタッフは「地域と学生の架け橋になりたい!」「明学生にボランティアをより身近に感じてもらいたい!」という思いで、地域のイベントへの参加のほか、明学生にボランティアに一步踏み出してもらえるような様々な企画などを行ってきました。2008年12月から始めた「戸塚区民市」への参加、2009年から始めた登校しながらごみ拾いをする「どうせ登校するなら」、そして他大学との交流となった赤十字献血促進運動の「ボラフェスタ in KANAGAWA 2010」への参加などの活動をしました。それに加え、正規留学生のコミュニティ作りをする「アジアの“わ”」や、明学と地産地消システムで関わりを持つ大木農園で農作業を定期的にするようになり、とても充実した一年となりました。

【戸塚区民市への参加】

戸塚区民市は戸塚西口商店街が地域を盛り上げるために行っている朝市です。戸塚区役所駐車場で月に一度開催しています。私たちはこの区民市で物産品の販売や宣伝を手伝ってきましたが、前年度の区民市全体の反省としては区民市の宣伝が上手く出来ていないことや来客者の年齢層の片寄りなどが挙げられました。それを踏まえ、



私たちはボランティアチャレンジファンド賞でいただいた奨励金を

もとに、季節に合わせた「アート企画」など子どもを対象とした学生主体の企画を始め、より区民市に幅広い年代の方を引き付けるような装飾に力をいれました。(区民市での活動についての詳細は72～73ページを参照)

この戸塚区民市で私たちはボランティアサークルと地域のパイプ役としても働きかけました。昨年に引き続き、明学ボランティアサークルからJUNKO Association、なんとかなるさ、あちょみだが、この区民市に参加をしてくれました。また今年度から新たに、Free♥Willが参加を始めました。さらに、一般学生が個人的に区民市に参加したいと言ってくれることもあり、さらに明学と地域の交流が深まってきたように思います。今年度の戸塚区民市での活動で子ども企画を行うことにより、幅広い年代の方に区民市を楽しんでいただけたことがわかりました。これは、より区民市を盛り上げるための大きな一歩になったと思います。課題は、やはり子どもの人数です。さらに多く子どもが来場してくれたら、より活気のある区民市になると思います。子どもを対象とした企画を続けることによって、子どもが大人を連れてくるような区民市を商店街の方たちと一緒に作りあげていきたいです。

【どうせ登校するなら】

「どうせ登校するなら」は2009年11月に始めた企画で、「環境」、「気軽さ」、「交流」をテーマとしています。朝8時頃に戸塚駅に集まり、そこから横浜キャンパスまでの通学路のゴミを拾って登校します。その名の通り、どうせ登校するなら何か戸塚地域に貢献しながら登校してもいいのではという発想からこの企画が始まりました。授業の前に行う企画で、特別な持ち物も必要としないので、参加しやすいボランティアになっています。



この企画には、毎回ゲストを呼ぶようにして、参加する学生がより楽しめるようにしました。例えば、今年度には、渋谷のパプティスト教会の牧師さんや、カリフォルニア大学の留学生がこの企画に参加してくれました。また、これは学生同士のネットワークも深まる活動もあり、他学科を越えて交流する光景が見られました。なかには、大学に興味を持たなかった学生が、この企画に参加することで、積極的に学校にくるようになったという学生がいることも耳にしました。

この企画により、地域の清掃に貢献できただけでなく、学生間のつながりやボランティアへの意識を高められたのではないかと思います。とても気軽に行なえるボランティアなので、ボランティア経験がない学生の初めの一歩目として、さらに多くの学生に参加してもらえようと思います。

【ボラフェスタ in KANAGAWA 2010 への参加】

赤十字神奈川支部が主催する「ボラフェスタ in KANAGAWA 2010」に参加しました。このイベントは年に一回、神奈川県内のボランティア活動を行っている大学生がボランティアを通して、献血促進を呼びかけるためのイベントで、私たち横浜学生スタッフは昨年度から参加しています。



今年度、私たちは来場者にキャップ集めと献血活動に興味を持ってもらおうと思い、「ボトルキャップアート」、「けんけつちゃんの貼り絵」、献血イメージソング「いのちのリズム」の手話歌、そして「活動紹介ポスター」を行いました。ボトルキャップアートでは約4000個のキャップを用いて、「地球」、ボラフェスタのメインテーマである「絆」の文字、そして「赤十字のマーク」を作りました。そして、キャップアートで使用したキャップと事前に各大学で集めたもの、当日会場で集めたものを合わせて、15万個を超えるキャップが集まりました。今回集められたキャップはワクチンに変えられ、発展途上国の子どもたちに届けられます。事前準備で色々大変な点もありましたが、結果的に多くキャップを集められ、良かったです。

また、終了後の反省点として、「大学間の交流ができていなかったこと」や「献血活動に関する活動があまりできていなかったこと」が挙げられたので、これらの反省点を活かして来年に活かしたいです。この活動を通して、世間の献血活動への理解が深まってくれば、と思います。

【2010 年度ボラセン☆通信】

今年のボラセン☆通信は4月と9月に春号・秋号を発行しました。

4月の春号では新入生向けに「ボランティアを通して新たな一歩を踏み出そう」というテーマを掲げ、まずはボランティアの魅力を知ってもらうために学生スタッフの意見を載せて読みやすい紙面にしました。9月の秋号は、「いろんな場所で出会う笑顔」というテーマで、春号よりも一歩踏み出せるように実際に参加しているボランティアを取り上げ、「戸塚区民市」「大木農園」「アジアの“わ”」を載せました。ボラセン学生スタッフではない人も一緒にボランティアをする機会が増え、誰でも気軽に、一緒にボランティアに参加できることが伝えられたと思います。



【大木農園】

大木農園は明治学院大学の近くにあり、大学と地産地消システムを結ぶ農園です。私たち学生スタッフは今年度から、月に一度この大木農園で農作業をさせていただきました。農業に興味を持つ学生も多く、一度参加してくれた学生の多くはリピーターとなり、「次はいつありますか」とボラセンを尋ねてくれます。大木農園の経営者の大木さんは殺虫剤を使わず、独自に開発したネットを使うことで、有機栽培を行なっていることから、学生が学べることはたくさんあります。大木さんと話す機会が増えたことから、今ではとても気軽にコンタクトをとれるようになりました。人数の多いときには、バーベキューを開いてくれることもありました。今後も大木農園での活動への参加を促したいと思います。



【アジアの“わ”～明学で異文化交流をしてみませんか？～】

この企画は、マレーシアからの留学生である学生スタッフが友人の日本人学生と協力し合い、今年度の春から始めたものです。正規留学生は日本語を流暢に話しているので、また外見からすぐに留学生と分かるわけではありません。2010年度には全学で137人を超える留学生が学んでいることは、あまり知られていません。しかし、いくら日本語が上手だと言っても日本の大学での生活は困らないとは言えません。日常の会話はスムーズにできるものの、正規留学生がキャンパスに一人で見かけたり、留学生から「明治学院大学での勉強や同世代の日本人学生との文化の違いなどの悩みを相談できる人がおらず、学校からの正規留学生のための支援やイベントが少ないので、大学生活をあまり満喫できない」という声を耳にすることがありました。



そこで始めたのがこのアジアからの正規留学生が参加できるコミュニティ作りをする「アジアの“わ”」

です。お互いの国、文化、言葉などを分かりあうことで、留学生と日本人学生同士、また、留学生同士の接点を増やし、交流を深めてもらうことを目指しています。

初めての企画だったため、最初、イベントに人が集まるかどうかをすごく心配していましたが、初日の活動には15人ほどの留学生、日本人学生80人以上もの参加者が集まってくれて、アジアに関心を持っている学生がたくさんいることがわかり、この企画を立ち上げてよかったと思いました。春学期から週一回昼休みにご飯を食べながらの留学生による出身国の紹介、アジアの文化の違いについてグループディスカッションや食事会をしました。春と秋を含め、17回イベントを企画しました。同じアジアでも違う文化や習慣を紹介しました。

そのほか、アジア各国の料理を食べながら正規留学生と日本人学生の親睦を深めるために、7月に横浜校舎ブラウン館でアジアの“わ”の食事会を開きました。留学生、教職員を含む約75名が集まり、楽しい時間を過ごしました。参加した留学生やベトナム、ミャンマーの教育支援をしているJUNKO Association、学生スタッフ、先生がそれぞれ得意料理を披露し、韓国や中国、タイ、マレーシア、ベトナム、日本の料理が会場に並びました。「台湾が好きな人と出会えた」（台湾からの交換留学生）、「新しい留学生と知り合いになれた」（国際学部日本人学生）などの声を頂きました。初めての試みで上手くいかないこともありましたが、この食事会がねらいとした国際交流が実現できたと思います。参加者の方からの喜びの声を聞いて企画への達成感を感じられました。

11月実施の鎌倉ハイキングでは国際学部のヴィッシー先生が鎌倉を案内してくれました。オリジナルのハイキングコースを歩き、学生に日本の歴史についていろいろと教えてくれました。日本人の参加者はアメリカ人である先生に日本史を教わるのは不思議な感覚でした。「この鎌倉散策を通して、もっと自分の国の歴史について知りたくなった」という声を頂きました。

12月には各国のアジアの料理が楽しめるクリスマス食事会を企画しました。学生サークルのゴスペル・クワイアと白金ベルハーモニーリングーズに演奏してもらいました。素敵な演奏を聴きながら、料理がさらに美味しくなりました。加えて今回は留学生、日本学生のほかに、多くの先生方の参加も得られ盛況でした。「普段は関わらない日本人学生や留学生と話せて楽しかった」などの声を頂きました。

毎回たくさんの学生に参加してもらい、みんなで楽しいひとときを過ごすことができました。はじめはうまく交流できなかった学生たちも回を重ねるごとに仲良くなり、アジアの“わ”が広がっていく様子が見えてきました。毎回楽しんでもらえるような企画を考え工夫するのは大変でしたが、「参加者からは留学生の友だちが出来た」、「いろんな国の文化を知れて良かった」など、楽しかったという声を多くもらいました。このようなアジアの“わ”は、私たち正規留学生と日本人学生の距離を縮め、コミュニティをつくれます。今後もたくさんの企画を作り、大切にしていきたいです。

学生スタッフスケジュール

アジアの“わ”スケジュール

<p>3月：合宿</p> <p>4月：桜祭り、ボラ通春号発行、大木農園 どうせ登校するなら（2回）</p> <p>5月：新入生勧誘、戸塚まつり、大木農園</p> <p>7月：小田急夏祭り、どうせ登校するなら</p> <p>8月：納涼祭</p> <p>9月：ボラ通秋号発行、大木農園</p> <p>10月：どうせ登校するなら（2回） 防災紙芝居</p> <p>11月：ボラフェタ in KANAGAWA 2010 どうせ登校するなら</p> <p>12月：どうせ登校するなら、大木農園</p> <p>※ 8、9月以外の月は戸塚区民市へ参加</p>	<p>[春学期]交流テーマ</p> <p>5/13 活動や留学生紹介</p> <p>5/20 アジア人が住みやすい都市</p> <p>5/27 カルチャーショック</p> <p>6/3 中国</p> <p>6/10 台湾</p>	<p>6/17 韓国</p> <p>6/24 マレーシア</p> <p>7/8 終了式</p> <p><イベントの開催></p> <p>7/1 食事会</p> <p>韓国語教室</p>
	<p>[秋学期]交流テーマ</p> <p>10/25 すごろく</p> <p>11/8 愛の囁き</p> <p>11/15 国際恋愛</p> <p>11/22 Free Talk</p> <p>11/29 伝統的な衣装の紹介</p>	<p>12/6 お正月</p> <p>12/13 クリスマスの過ごし方</p> <p>12/20 食事(クリスマス)会</p> <p><イベントの開催></p> <p>11/5~15 写真展</p> <p>11/28 鎌倉ハイキング</p>

2010年度は、地域密着型から国際ボランティアまで取り組んだため、とても忙しく充実した一年になりました。そこから学ぶことはたくさんありました。なかでも、長く参加を続けている戸塚区民市や大木農園では、企画を行う上での「信頼」の大切さを知りました。互いに顔や性格を知り信頼感があると、企画作りもとても円滑にいき、ときにはその企画作りに気軽に協力を求められます。このように、企画を行う際には互いに信頼感を持つことでより良いものが生まれるということを学びました。来年主体となる学生スタッフは、子どもと接するボランティアに興味のある人が多いので、新たな企画が生まれることが期待できると思います。

(横浜学生スタッフチーフ：国際学科2年日高大樹、

サブチーフ：国際経営学科2年小邑正史、国際学科2年庄克強)

小田急分譲地の地域活動への関わり～「小田急コスモス」の活動

2008年1月以降、学生グループ「あったかサークルひまわり」が横浜キャンパス北門近くの小田急分譲地自治会の地域活動に参加して、地域交流を深めてきた。2010年3月に「ひまわり」のコアメンバーが卒業したのに伴い「ひまわり」は解散し、活動を引き継いだ学生たちが「小田急コスモス」を組織して、ボランティアセンターと協働しながら活動している。今年度はこれまで通り、地域活動としてサロンすみれ（茶話会）、しあわせの会（高齢者のデイサービス）、自治会のお祭りに参加してきた。上級生が在籍校地の変更や授業のために思うような参加が難しいなか、1年生が空き時間をフル活用して熱心に活動に取り組んでいた。また7月の夏祭りにはコスモスメンバーに加えて、友人、留学生を含め13人の学生が参加して、住民の方が出店するかき氷や焼きそば等の屋台の手伝いを通して、地域との交流をおこなった。

今年度は民生委員・児童委員会会長から「高齢者の活動だけでなく、子ども向けての活動に取り組んでくれないか」という依頼がきっかけとなり、子ども会とのコラボが進んだ。子どもを対象としたボランティアサークルで経験を積んだ学生が子ども会の会長と相談しながら準備を進めて、夏休み中の8月に子どもたちの遊びの活動を実施した。夏の猛暑のなかパンダの格好をした学生は、スイカ割りやドッチボール、スーパーボールすくいなど、子どもたちが喜ぶたくさんの遊びを用意し、学生と子ども交流は大変盛り上がった。保護者から「学生はよく練った企画を準備していて、安心してみていられる」「違う学年の子どもと遊ぶ機会がこれまでになかったので、よい経験をさせてもらった」と好評であった。準備を進めた中心的な学生は「自分たちで企画して、子どもたちと思いっきり遊ぶ活動を作ることが夢だった。とても達成感があったので、またぜひやりたい」と、子ども会と学生の初コラボ活動は大成功であった。

秋学期には「私たちがお世話してもらっているような雰囲気を変えたいので、しあわせの会の方に喜んでもらえることが何かしたい」という思いのもと、地域の方に親しんでもらえる曲を選曲しながらリコーダー演奏をした。演奏をきっかけに話が進むなど、学生とデイサービスに参加する方々との交流が進んでいた。

12月には「小田急コスモス」の活動内容と性格を明確にするための話し合いがコーディネーターとの間でもたれ、今後は高齢者、お祭り、子どもという3本柱を据え、更に公園清掃にも参加して、地域づくりに多面的に関わっていくこととなった。

今年度、新しく活動を引き継いだ「コスモス」学生は遠慮してしまって、地域の方に話しかけられないなど、思うように交流できないこともあるという。地域と学生の交流の試行錯誤のなかで進んでいるが、そうした手探りのなかにこそ学びのプロセスがあることを留意しつつ、学生と地域の思いがつながるよう、根気よく活動を支援していきたい。

(市川)

「戸塚区民市」を拠点とした地域と学生の協働の進展

戸塚区民市は再開発で揺れる戸塚駅西口地域において地域の活性化と人々の交流をねらいとして、商店街が中心となり立ち上げた青空市である。ボランティアセンター横浜学生スタッフと国際協力サークル（あちょみだ、JUNKO Association、なんとかなるさ）は、2008年12月より参加している。横浜学生スタッフは区民市に出店する商店の販売の手伝いやステージイベントの企画に取り組み、国際協力サークルは学生が支援するベトナムやタイの村等で入手した雑貨を戸塚区民市で販売し、その売り上げをベトナムの子どもたちやタイ北部の山岳民族の支援に役立ててきた。

今年度の戸塚区民市は2010年4月に戸塚駅西口の再開発ビルがオープンして、駅前地域が様変わりしたなかで行われた。横浜学生スタッフは戸塚地域の歴史を多くの人に知ってもらいたいと考え、会場に隣接する戸塚小学校の壁面に「戸塚今昔写真展～歴史ある戸塚、変わりゆく戸塚」を展示したり、地域の環境団体桜セーバーの協力を得て、竹トンボの製作教室等を展開した。学生スタッフ企画の定着と充実化が今年度のセンターにとって課題であったが、6月に横浜学生スタッフが「Do for とつか」という企画でボランティアファンド学生チャレンジ賞に応募したところ、助成を受けられることとなり、その活動として毎月子ども広場やアート活動などの企画を展開した。（横浜学生スタッフの取り組みは本書57～61ページに、「Do for とつか」の取り組みは、本書72～73ページに記載している。）

2011年1月現在で実施回数は26回に及び、学生と区民市に訪れるお客さんとの交流は盛り上がってきた。区民市に毎回訪れているお祖母さんと小学生のお孫さんは、アジア雑貨を購入することが、途上国支援として役立つことを知り、学生が取り扱うタイやベトナムの商品を購入し学生の活動を応援してくれている。区民市の来場者にとってフェアトレードは必ずしも身近ではない場合もあるが、学生による紹介がきっかけとなって、フェアトレードに関心を持ってくれるお客さんが増えるなど、学生が取り組む国際協力活動が地域にも浸透してきていることが伺える。

再開発ビルのオープンから1年近くが経過する2011年2月に向けて、西口商店街と再開発ビルが協力して雪まつりイベントを開催するという計画が生まれている。分断された地域内が協力し合いまちづくりに取り組む機運が生まれてきていたことは、戸塚区民市を拠点として協力関係を盛り上げてきた成果と考えられる。一方、商店街と学生が協力するプロセスにおいては、すべてが順調に進んだとはいえず、協働の難しさを感じたことがあった。しかし、商店街との連絡・調整にあたった学生は「辛抱強く一つひとつ問題を乗り越えながら活動を続けていく大切さが戸塚区民市での活動を通して分かってきた」「地域と活動をする上で、信頼関係を築くことがなによりも大切だと理解した」と振り返るように、問題を乗り越えるプロセスのなかにこそ、学びがあるということ、筆者も学生も学んでいる。今後も一つひとつのステップを踏んで進めていくことが大切なことと捉え、戸塚区民市が拠点となり地域と学生の協働が進むように取り組んでいきたい。

（市川）

大木農園での農作業の取り組み

本学横浜キャンパスでは2009年度よりエコキャンパス化を進め、その取り組みの一つとして地元戸塚の有機農家「大木農園」と連携した循環型「地産地消」を同年11月より推進している。横浜キャンパス内の生協食堂では大木農園の野菜を材料にした料理が提供され、食堂の野菜屑やキャンパスの落ち葉を大木農園が堆肥にして活用するという循環システムが動いている。こうした大学と大木農園のつながりを受けて、2010年2月よりボランティアセンターの呼びかけで学生が農作業の手伝いに行くようになった。学生の農業への関心は高く、今年60名を超える学生が大木農園に訪れて農作業に携わった。農園では年間で約58種類の野菜を育てており、学生はじゃがいもの収穫や玉ねぎの苗の藁敷き、いちごの苗をビニールで保護する作業、草取りなど、季節に応じてさまざまな作業に取り組んだ（活動の様子は、ボランティアセンターのHPで紹介している）。どの作業も根気がいるものばかりで、大勢の学生が終日作業をして、やっと予定された範囲が終えられるような野菜づくりの苦労を学生は体験している一方、「成果が目に見えるので、農作業は達成感がある」と言って楽しんでた。また農業を通じて社会や仕事について理解を深める場面があった。農業は自然に関わっているので競争社会から遠いと感じていた学生がいたが、日本のTPP参加などの社会の変化から影響を受けやすく不安を抱えている農家が多いこと、実家が農家の学生にとっては、これまで積極的に関わってこなかった農業ではあったが、自分の人生と両親が営む農業の関係を見つめ直している場面もあった。作業の後には、大木さんを囲んでバーベキューをして、人生や夢について語り合う場面があり、農園での学びは広がっている。

学生とセンターが媒介して、大木農園の有機農業や地域連携の仕組みを海外に発信するというエピソードがあった。横浜学生スタッフが、横浜に本部がある国際機関「アジア太平洋都市間協力ネットワーク(CITYNET)」に、大木農園と本学の循環型「地産地消」について紹介したところ、CITYNETが関心を示し、10月に横浜で開催された国際会議「Post-AWAREE Project（環境保護社会の達成による地球温暖化防止への取組）」で、大木氏が発表者として招かれ、防虫ネットを使用した有機野菜作り、学校等との身近な地域社会との協働することで、安定した農業生産の環境づくりをしている話しをした。大木農園の学内での関心は高く、教職員から「大木農園に行ってみよう」という声を聞くことも多い。今後は学生参加を促すだけでなく、教職員が気軽に大木農園に関わってもらえるような呼びかけを積極的にしていきたい。

地域密着型プログラム「とつかプロジェクト」への支援

学生の戸塚地域への関わりを促進し、地域福祉の推進を担う学生を育成する「とつかプロジェクト」（横浜市戸塚区社会福祉協議会主催、とつか区民活動センター、明治学院大学ボランティアセンター協力）に本ボランティアセンターは、学生募集やオリエンテーションや振り返りのワークショップの講師、プログラム企画に関するアイデアの提供などで関わった。このプログラムは戸塚区在住・在学の学生

を対象としていたが、今年度は本センターから紹介を受けた本学の学生15名のみが参加した。

プログラムの導入として参加学生は7月上旬に「お見合い会」(受け入れ団体と学生の顔合わせ)と、8月上旬にオリエンテーション(地域課題や学生と地域の協働の実態と課題について学び、活動目標を立てる)で事前学習に取り組んだ。8月、9月には戸塚区社会福祉協議会(福祉)、上倉田地域ケアプラザ(福祉)、ドリームハイツ地域運営協議会(まちづくり)、大木農園(環境)の4団体から1団体を選択し、7日~10日間のフィールドワークをおこなった。8月末には学生は「善了寺」(共生文化の発信地)や「舞岡公園」(市民運営の公園)等、戸塚地域の5つの現場に訪れ、多様なアクターが地域づくりに取り組んでいることを学んだ後に、フィールドワークの中間報告をした。11月には活動の成果と学びを発表し、さらに今後の地域と学生の協働の可能性を考えるための報告会を実施した。第一部では、受け入れ団体ごとに、それぞれどのような地域のニーズに応えながら活動を展開しているか、工夫や苦勞などを紹介したあとに、一人ひとりの学生が活動から得た学びを発表した。例えば、上倉田地域ケアプラザで活動した学生は、当初は障がい児とうまく関係が作れず苦勞したが、ケアプラザのスタッフの助言のもと辛抱強く子どもと向き合った結果、次第に子どもたちの目標となるようなお兄さんとして活躍できるようになったこと、子どもに関わる際にはどんなときも子どもと真剣に向き合うことが大切であると学んだ、と報告した。ドリームハイツで活動した学生は、ハイツでは住民が地域での暮らしやすさとニーズに応じて配食サービスやコミュニティカフェなどの活動を作り、住みやすいまちづくりに取り組んできたこと、10年後にはハイツの高齢化率が50%を超えるが、異世代交流をするなどの工夫をし、地域内で協力しながら来るべき課題を乗り越えようとしている姿にとっても感動した、と話をしていた。第2部は学生が主体となって準備して地域と学生の懇親会とおこなった。軽食を食べながら和やかな雰囲気の中、とつかプロジェクトの思い出や今後の展開について話をしていた。学生は自主活動として10月にドリームハイツ内のサロンで携帯電話講座を開催したり、多くの学生が大木農園を知り、関われるように農園を紹介するリーフレットを作るなど、学生の地域参加がそれぞれ事後にも進んでいた。「とつかプロジェクトを大学内で広めたい」という学生と地域の要望のもと、2011年1月に大学内での小規模の報告会を開催した。テスト前の時期で来場者は多くはなかったが、戸塚地域の様子と学生の関わりを学内に広める貴重な機会となった。

プログラム参加者や活動に関わった地域関係者から「とつかプロジェクト」の継続と発展の声が多いことから、今後は戸塚区社会福祉協議会、とつか区民活動センター、明治学院大学ボランティアセンターが協働して、取り組むこととなった。本センターとしては学生の地域参加(サービス)と活動を通じた学び(ラーニング)が深められるよう、さらにプログラムの充実化をはかっていきたい。

(市川)

横浜市立倉田小学校への訪問授業

ボランティアセンターでは、センター開設以来、横浜校舎正門近くの倉田小学校と交流がおこなわれている。昨年度は小学校からの依頼により「手話サークルぼけ」が、小学校の校歌に手話の振りをつけて、手話歌を教えるという取り組みがあった。今年度はカンボジアの教育支援に取り組む学生サークル「ぼけっと」が「小学生とカンボジアの子どもたちとをつなぐ活動をしたい」とセンターに訪れたことがきっかけとなり、交流活動が動き出した。5月に筆者と学生で倉田小学校に訪問して相談したところ、校長先生、教頭先生が熱心に対応して下さり、交流のねらいや計画について具体的な協議が進んだ。カンボジアに関するだけでなく、日常活動にも関わってほしいという小学校の依頼を受けて、学生は5月から田んぼの代かきや田植えの作業などに取り組んだ後に、10月からカンボジアについての連続授業を行った。子どもたちはその学習成果を11月の発表会「倉田秋祭り」で披露した。（「ぼけっと」による活動は、本書78～79ページに記載）

こうして倉田小学校と明学生が連携しておこなう倉田小学校での授業は、今年度大きく進展し、1月には中国で砂漠緑化に取り組む学生が生物多様性や国際協力をテーマに出張授業したり、2月には横浜学生スタッフの主催で5年生全員の約90名が横浜キャンパスに訪れ、大学生との交流を通して進路を考える交流企画の準備が進んでいる。学生にとっては、子どもたちに伝える過程で自らの活動を見つめ直すという効果が生まれている。今後もセンター、学生、近隣小学校の協力関係を進展させていきたい。

地域作業所「パン工房 Ange」とのコラボレーション

今年度は昨年からの学生と Ange の協力関係を基盤にして、学生サークル「あちょみだ」や「なんとかなるさ」との交流が進んだ。Angeがおこなうオープンカフェでは、上述の2つのサークルがアジア雑貨を販売したり、「なんとかなるさ」が提供するフェアトレード商品の Ange の店頭での常設販売が今年度6月からスタートした（詳しくは74～75ページに記載）。さらに、横浜キャンパス内9号館でのパン販売に関しては、学生がローテーションを組んで関わるなど、Angeと明学生の交流が学内に浸透していることが伺えた。

学生は活動を通して、フェアトレードの意義を地域の方にどのように伝えたら理解していただいているのか、Angeのスタッフの方との会話や助言のなかから、学びとっていた。Angeにとっては「ワークサポートセンターの役割は、発達障がいのある方が社会で働く力を身につけることであるので、学生との交流により通所者のコミュニケーション力が高まり、社会への関心が広がっている」とコメントをいただいた。最近では学生から倉田小学校の子どもたちに、Angeのことを伝えたいという提案があるなど、学生との交流がきっかけとなり、Angeの地域との関わりが進展している。こうして、大学と Ange は協力関係のなかから地域に開かれた場として変化させることができたと考える。今後も双方が協力し合うことで、学生の多様な育ちを支える場として、機能するよう取り組みたい。

（市川）

2010 年度を振り返って

横浜ボランティアセンターは、新入生が在籍する横浜キャンパスの特徴から、学生が本学の教育理念“Do for others”への理解を深めるための導入活動の充実化を図っている。学生が地域社会の多様性と地域貢献の可能性への理解を深められるよう、これまで協働してきた戸塚区民市や柏尾川魅力づくりフォーラム、小田急分譲地自治会の活動に加えて、横浜キャンパスと連携して循環型「地産地消」を進めている大木農園での農作業の手伝い及び倉田小学校への訪問授業などの、新たな活動に取り組んだ。こうして広がったセンターと戸塚地域の活動地図は【図1】として示した。ボランティア募集团体による説明会では、今年度学生の活動実績がある団体を重点的に大学に招き、活動先に参加経験のある学生が体験談を話すという工夫をおこなった。昨年度までは説明会に参加した学生をどのように実際の活動参加に結びつけるかということが課題であったが、実際に学生から話を聞くことでやりたい気持ちが強くなったとの声があり、説明会で学生が発信することで新たな学生の参加が進むことが確認された。今年度からスタートした「ボラセン☆トーク Day」(昼休みにボランティアをテーマに交流)では、大木農園での活動を開拓した学生、中国の砂漠緑化活動に取り組む学生から活動への思いや魅力についての話、原田センター長や浅川センター補佐からは国際協力 NGO の役割の広がりや豊かな高齢期のための行政による支援の取り組みなど、専門の立場から講演があった。トーク Day は多様な立場からの経験を直接聞けると好評であった。

学生スタッフは、地域と学生の架け橋として、学生にボランティアを広めるための様々な企画を立てながら取り組んでいる。(詳しくは 57～61 ページを参照) 今年度は戸塚区民市の活性化を目指す「Do for とつか」(詳しくは 72～73 ページを参照) や登校時のゴミ拾い「どうせ登校するなら」など、学生が気軽に参加できるような活動がたくさん生まれた。さらにマレーシア出身の留学生の学生スタッフの問題意識がもととなり、アジアからの正規留学生と日本人学生の交流と相互支援の関係づくりに取り組んだ。留学生から「アジアの“わ”に参加してから、友だちが増えて大学生活に充実感を感じられるようになった」、「大学内での留学生の存在を知ってもらえる機会が増えた」という声が多いことから、学生スタッフが留学生支援に取り組む意義が確認された。また「アジアの“わ”」が進むに連れて、留学生のセンターへの訪問や地域のお祭りに参加する機会が増え、留学生が“Do for others”の精神について理解を深め、活動に関わる機会が増えたと言える。

このようなセンターとの関わりを通して、学生はさまざまな立場にある人、社会との具体的な関わりを展開させ、学生の活動が新たな活動のはじまりへと発展するという循環が生まれている。例えば、カンボジアを支援学生サークル「ぼけっと」の倉田小学校での訪問授業が好評だったことから、その後、小学校からの依頼で学生がおこなう砂漠緑化活動の授業や学生スタッフが主催する倉田小学校との交流プログラムが生まれた。「とつかプロジェクト」での学生のはたらきが評判になり、子育て支援施設「とっ

との芽」や「上倉田地域ケアプラザ」からセンターに依頼があり、管弦楽部が訪問演奏に行くなどがあつた。こうして学生はセンターから活動を提供されるだけでなく、学生自身がつながりや新たな活動を生す、協働の作り手として成長している。

これまで、学生による地域社会への貢献をどのように図るか、その導入部への支援について述べてきたが、さらにセンターが関わって生まれた活動の新たな企画の立ち上げや充実化の支援も行っている。横浜学生スタッフや学生サークル「ぼけっと」、「なんとかなるさ」が地域との協働企画を進めるにあたっては、コーディネーターが相談に応じたり助言した結果、「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」の応募・助成へと発展した。また外国につながる子どもたちの学習支援と交流に取り組む「こ・こ・ろ」は、コーディネーターとの話し合いから進学支援というテーマが明確になり、「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」への応募・助成へとなった。タイの山岳民族を支援する「あちょみだ」は、センターが助成金申請のサポートをしたところ、タイの少女たちへの保健衛生活動や人身売買防止プロジェクト企画で、「(財) 学生サポートセンター」、「横浜 YMCA 夢すくすく賞」から助成金が授与され、活動の更なる充実化が図られた。

今年度の取り組みを通して、センターは活動支援だけでなく、活動から得られる学びの充実化に対する働きかけの必要性を感じている。取り組みは当初目指したように進んでいるか、活動の成果や課題はどういったところにあるかなど、活動に携わる学生や地域関係者とともに振り返り整理したいという課題意識が学生やコーディネーターのなかで生まれている。今年度は Ange や倉田小学校との連携では、プログラム評価の手法を取り入れ、活動の当事者である学生や地域関係者が活動のゴール設定や結果や成果について話し合うことで、活動の目標や計画についてコンセンサスづくりを試みた。こうした振り返り活動は着手したばかりであるが、今後は実践面だけでなく、活動からどう学ぶかという評価手法も高めていきたい。「とつかプロジェクト」の参加学生からは、「ドリームハイツで問題意識を深めた支援のあり方について自分が専門とする心理の分野で掘り下げたいが、どのように学科での勉強に結び付けていったらいいのか分からない」「福祉のまちづくりに興味を持ったので、政治の分野で深めたい」など、地域社会での活動を通して育った問題意識をどのように大学での学びへと発展させていくかという課題も明らかになった。今後は、センターと学部、教員との効果的な連携方法、学生の地域社会での経験が学びへと昇華されるような方策を探っていきたいと考えている。(市川)

【図1】 横浜キャンパス近隣コラボ Map (横浜市戸塚区)

- ① 柏尾川魅力づくりフォーラム
- ② 戸塚区民市
- ③ どうせ登校するなら
- ④ 地域作業所 Ange
- ⑤ 小田急コスモス



ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2009

「ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2010」の審査と中間報告

明治学院大学公認ロゴグッズの本体価格の10%を積み立て、大規模災害の被災者支援や環境保護活動に役立てようという試みが2005年秋から始まった。これが「明治学院大学ボランティアファンド」である。ボランティアファンドは2006年度より受け入れを開始し、2010年度4月には854,633円を2009年度の明学グッズ売上高の10%として受け入れた。2010年度は過年度からの繰り越しを含め2,281,956円をファンドとして運用している。

ボランティアセンターでは、このファンドを原資として、2007年度に「ボランティアファンド学生チャレンジ賞（通称ボラチャレ）」を設立し、学内のボランティア団体や新しく活動を始めようとするグループによる企画の実現を支援してきた。初年度の2007年度は「環境保護」に関連する企画案を募集し、3企画の応募があり3企画を助成した。2008年度には助成対象を「明学生のボランティアによるキャンパスのある身近な地域での地域貢献活動」に広げ、14企画の応募があり5企画を助成した。2009年度は8企画の応募があり6企画を助成した。

2010年度も2008年度・2009年度に引き続き、「地域」「ボランティア」「明学生」をテーマとした企画を募集した。4月12日～6月4日の間に8企画の応募があり、6月19日に白金校舎にて公開審査会を実施した。公開審査会では学生や5名の審査委員（大西学長、学外の有識者として白金地域より嶋委員、戸塚地域より植田委員、原田ボランティアセンター長、浅川ボランティアセンター長補佐）を中心とする一般聴衆を前に、企画ごとに企画内容のプレゼンテーションを行った。続いて審査委員による審査会が開催され、6企画を助成企画として選定し、総額450,000円近くを助成した。6月30日には横浜校舎にて授与式を実施し、学長から受賞企画の代表者に奨励金が手渡された。

各企画は活動期間を経て、12月1日に白金校舎での中間報告会で報告した。中間報告会の第一部では受賞団体が活動の進捗状況や抱えている問題などについて発表した。発表した学生からは発表に向けて準備することで企画を見直す機会になったという感想が多く寄せられた。質疑応答では、あるグループが抱える悩みに対し、他の企画に携わっている学生から具体的な提案がなされるなど、それぞれに刺激となっている様子が見えられた。第二部では、学生が地域に関わることで何を感じ、何を学んだかを整理し、さらに深化・発展させるための気づきを得ることを目的とし、受賞団体メンバーによるグループワークを行った。浅川センター長補佐、李コーディネーター、市川コーディネーターのファシリテートのもと、活発な議論が交わされた。

中間報告会後には中間報告書を執筆し、本書のこの次のページから掲載される予定である。どんな中間報告を書いてくるのか楽しみである。さらに、各企画は中間報告会で得た気づきを生かし、活動を一層進めることとなる。最終的には5月の最終報告会での発表と活動報告書の提出が予定されている。

（森下）

「Do For とつか」

「Do For とつか」は私たち横浜学生スタッフが学生と地域の架け橋となり、戸塚区民市への参加を通して、よりよい戸塚のまちづくりに貢献しようという思いから始めた企画です。

「戸塚区民市」は西口の商店街が戸塚を盛り上げるために行っている朝市で、戸塚区役所の駐車場を使い、月に一度開催しています。学生スタッフは地域の方のお手伝いとして、物産品の販売や、人を引き付けるような学生企画を行っています。このボランティアファンドは、「戸塚区民市」での活動の発展のためにいただきました。

戸塚区民市は徐々に知名度が上がり、常連客も増えてきました。しかし、最近この区民市で課題となっていたのが、戸塚駅西口再開発に伴い以前より区民市への来客数が減り、その運営が難しい状況になっていることでした。さらに区民市を盛り上げるために考えたのが来客の年齢層を幅広くすることでした。区民市に足を向ける大半が年配の方で、子どもの数は多くありませんでした。しかし、季節に合わせて商店街が行う「雪祭り」や「夏祭り」などには子どもが多く、会場に活気がありました。2月の区民市後に行われたミーティングでから「子どもが来てくれば、より多くの商品が売れるし、盛り上がるのではないか」といった声を商店街の方から聞きました。

そこで横浜学生スタッフは、地域の子どもを対象とした企画を区民市で継続的に行うことにしました。例えば大きな横断幕に季節に合ったアートを子どもたちと作製する企画をしました。3月には桜アート、4月には鯉のぼりを子どもたちの手形を使って、色を付けて作品をつくりました。5月には母の日アートと題して、折り紙でつくったカーネーションと、感謝のメッセージを書いたカードをお母さんにプレゼントする企画を行いました。

このように、一層の発展を見込む企画を行うことで、多くの子どもをひきつける区民市ができると考えました。助成金を貰った後、残念ながら8月、9月は区民市が休みになってしまい学生主体の企画を行うことができませんでしたが、10月の区民市では子どもと地域がかかわるような新たな企画を2つ立てました。

1つは宮崎の口蹄疫被害者への応援企画です。このとき、区民市は宮崎で口蹄疫の被害を受けた牧場を応援するため、宮崎の物産展を行ないました。それに合わせ、私たち学生スタッフは、子ども達にも宮崎で何が起きているのか知ってもらいたいという思いから、わかりやすく宮崎で起こったことをイラストにして、区民市の会場に貼りました。足をとめてそのイラストを観てくれる子どもも多く、宮崎で起こった厳しい状況を伝えられたかと思えます。

もう1つの企画がハロウィーンにちなんだ企画です。区民市の会場の商店街の方のお店やボランティア団体のお店を含む目印がついているい



くつかのブースに「Trick or Treat!!!」と子どもに言ってもらうと、お菓子をあげるという企画でした。この日はちょうど会場の隣にある戸塚小学校で幼稚園児の運動会があったため、多くの子どもが参加してくれました。初めは恥ずかしがりながらも、合言葉を言ってくれました。

このハロウィン企画により、さらに地域との交流を深めたように感じました。今までは、学生スタッフと子どもの間での企画でした。しかし、この企画は地域の方々のお店に、事前に企画を説明し、協力をしていただいたので、子どもと商店街の方がかかわる新たな企画になりました。

長く区民市に関わってきたことで、商店街と学生スタッフのお互いの絆が深まり、信頼が増したように感じます。たとえば、区民市を自由に使わせていただいたり、区民市のポスターを学生にも作らせていただけるようになったことです。そのことにより、子どもの目を意識した、ポスターを作ることができました。

また、戸塚区民市は装飾に欠けるとの意見が地域の方とのミーティングで出たので、その一部として、ボトルキャップアートの作製も進めました。いただいた助成金で板と発泡スチロールを購入し、キャップを簡単に取り付けられる板を作りました。ボトルキャップは糊や接着剤を付けると、リサイクルとして回収してもらえなくなるので、板の作製には苦勞をしました。

この用意したボトルキャップアートを活用し、12月にはクリスマスをモチーフとしたボトルキャップアートを企画しました。

現在、戸塚区民市の参加で一番の課題となっているのが、地域の方とのコミュニケーションの手段です。今までは、主に、電話とメールで意見の交換や次回の区民市の企画説明をしてきました。しかし、ポスターを学生で作らせていただいた際に行き違いがあり、地域の方が求めているデザインではないということを知りました。その後、区民市の主催の方とミーティングを開き、ポスターの方向性をどのようにするか話し合いました。地域の方の意見は、学生のポスターの全てを否定しているのではなく、高齢者の方には地域のポスターの方がわかりやすいということでした。その結果、商店街の方が作るポスターと学生スタッフが作るポスター両方を掲示することで、より幅広い年齢層の方に来客してもらえるのではという意見にたどり着きました。メールや電話だけでは、意見にずれ違いが生じる場合があるので、これからはできるだけ地域の方と直接会う形で、区民市の方向性を決定づけていきたいと思えます。



区民市のポスター

「Do For とつか」により、さらに子どもに楽しんでもらえる区民市をつくれたと思います。子どもが企画に参加してくれている間に、大人が買い物をするという光景も見られたことから、区民市会場の店にもよい効果があるよう思えます。課題は、やはり子どもの人数です。まだ子どもの来場は少ないので、より魅力的な企画をつくり、子どもが大人を連れてくるような区民市にしたいと思えます。

(ボランティアセンター横浜学生スタッフ 国際学科国際学部2年 日高大樹)

地域密着型フェアトレードプロジェクトについて

【はじめに】

私たちは、フェアトレードの存在を広めるために戸塚地域や学内で活動している「なんとかなるさ」です。フェアトレードとは、日本語で言うと「公正取引」で、搾取や悪条件下の労働がなく、対等な関係の貿易のことを指します。私たち消費者は安いものばかりに目が行きがちですが、フェアトレードの存在を知ること、安いものには安い理由があるということがわかり、安すぎる商品には何か弊害が起きているのかもしれないという考えが沸いてきます。自分の何気ないお買い物で誰かが苦しんでいるかもしれない、それを知るか知らないかでは、消費に対する考えが変わってくると思います。そのため私たちは、フェアトレードを知り消費のしかたについて考える人を増やすべく、活動しています。このプロジェクトでは戸塚地域でのフェアトレード認知度を高めるために動いています。なぜ戸塚地域なのか？それは、校舎があり大学生が行き交う戸塚地域で私たちが地域の方とコミュニケーションをとることが楽しいからということと、大学がある街で何か地域へ大学生から発信したいと思うからです。地域住民にとっても、自分の地域の大学に活気があることはよいことだと思うし、私たちが地域に積極的に携わることで、私たちの活動もより身近に感じてもらえるのではないかと考えています。

【内容】

プロジェクトは、「パン工房 Ange とのコラボレーション強化」「地域でのイベント開催」の2本の柱で構成されています。「パン工房 Ange」は横浜校舎近くにあるYMCAのワークサポートセンターで、私たちは以前から他のボランティアサークルと合同で店頭雑貨販売を行わせていただいたり、イベントに参加させていただいてきました。その後は合同でなく独自に関わるようになり、2010年6月からは、フェアトレード商品をお店に置かせていただいています。この活動はタウンニュース戸塚版と白金通信へ掲載され、また、Angeでのパーティーにも参加させていただきました。関係をより深めるため、また、お世話になっているAngeのため、プロジェクト広報や交流に力を入れています。

「地域でのイベント開催」については、準備段階として月に一度の区民市、倉田小学校での運動会、戸塚お結び広場というイベントに参加してきました。また、白金祭においてフェアトレードを紹介する紙芝居を作成し展示しました。

【学んだこと】

このプロジェクトの2つの柱において、私たちは交流や出店など、小さな積み重ねを大事にしてきて、その大切さを実感しています。パン工房 Angeには週に1度商品管理のためにお店に伺うことで、コミュニケーションを重ね、いろいろな話ができるようになり、私たちの活動についてアドバイスやアイデアをいただきました。また、地域での活動でも、月に一度の区民市に毎回参加することで、区民市開催側の方々、足を運んでくださる地域の方々と交流することができ、他のイベントに出るなど広がりもで

きました。日々の活動は小さくても、続けていくうちになにか得るものがあるということを学びました。

【課題】

「パン工房 Ange とのコラボレーション強化」について、先日のボランティアファンドチャレンジ賞報告会のアンケートにて、「コラボレーションというより商品を置いてもらっているだけ」「もっと地域と繋がって」という意見をいただきました。本当に的を得ている意見なので、真摯に受け止め、次の活動に繋げていきたいと思えます。コラボレーションというと共同で商品開発などができたら理想なのですが、フェアトレード商品は安いとは言えないので、なかなか難しいものがあります。したがって、この先できる活動の例としては、地域新聞紙へ取材をお願いしたり、パン工房 Ange で、フェアトレード商品を試食しながら勉強会のようなものを行うなどの活動が考えられます。

また、「地域でのイベント開催」については、実際あまり動き出すことができていません。イベントにも様々な形があり、フェアトレードに詳しい方やお店の方に来ていただいて講演会をするのか、私たちが主催で勉強会を行うのか、その際どのような内容にするのか、定まっていないので考えなければなりません。また、フェアトレードを説明する簡単なゲームを考案したのですが、小学生にわかってもらえるような内容にするには非常に難しいことがわかり、失敗に終わってしまいました。これについては練り直したいと思っています。

【最後に】

私たちは現在岐路に立たされています。授業で、日常で、様々なことを学んでいくうちに、「果たしてフェアトレードが一番よい方法なのか？」という疑問が沸きつつあります。サークルの中でも、フェアトレードのよい効果をふまえた上で、「フェアトレードは所詮先進国のニーズに合わせて商品を作っているだけで、生産者のためにならない。食料を作って自給自足した方がよいのでは」という意見の一方で、「実際、貿易をして収入を得ないと子どもに教育を受けさせたり、インフラを整備することができない」という意見もあります。私たちのサークルにとってこれは非常に重要な議論であるので、真剣に話し合っていきたいと思っています。



(なんとかなるさ 社会学部社会学科3年 山口翠里)

お茶べり - Free ♥ Will -

【1. はじめに】

私たち Free ♥ Will は、インドの児童労働問題に取り組んでいる団体です。2008年に設立し、2009年度よりインドの児童労働問題を解決するというビジョンのもと、本格的に活動を開始しました。昨年度までは学内を中心に写真展やワークショップなどの啓発活動を実施してきましたが、今年度からは児童労働問題を一人でも多くの人に知ってもらうことを目的に、お茶べりという新しい企画を通して学内から地域へと活動の輪を広めています。今後は上述の活動を継続していきながら、団体の方向性を模索していく予定です。

【2. 企画の目的】

「ちょっとお茶しませんか?」…おしゃべりは、人と人が繋がりあうとき。そこにはお茶と笑顔があります。ご近所の人と、インドの子どもと、ちょっとお茶べり。」というコンセプトのもと、インドの子どもと日本人が繋がる架け橋になれば、という思いからスタートした企画です。紅茶をキーワードにインドの児童労働問題を啓発するとともに、地域の関係を深める場づくりをすることを目的としています。

【3. 企画の内容】

今回の企画で私たちは、日本でも馴染みのあるインドの紅茶に注目しました。日本が輸入する紅茶の約20%がインド産のもので、ダージリンティーやアッサムティーは日本でも有名です。その紅茶の製造過程には働かされている子どもがいるという現状もあります。そこで私たちはその現状を知ってもらい、「いつも気軽に飲んでいる紅茶にも、もしかしたら児童労働が関わっているかもしれない」ということを身近に感じるきっかけ作りをしたいと思います。そこで、私たちは今流行のタンブラーにオリジナルデザインを簡単に作成できるという特性に着目し、インドの子どもたちに絵を描いてもらい、それをタンブラーのデザインにすることにしました。商品として販売することで啓発効果を生み、得た収益は絵を描いてくれた子どもたちへの寄付金とします。

また、インドの児童労働問題は身近にある問題だからこそ自分の身近な人と共に考えてほしい、という思いから活動対象を大学のある地域としました。そこで、戸塚区民市⁽¹⁾などの地域に根ざした行事に参加し、タンブラー販売や写真展、ワークショップを実施することで、児童労働問題を啓発するとともに、地域の方々と私たち学生とが交流する場づくりをしています。

【4. 企画の経過】

9月：インドの子どもを対象にお絵かきワークショップの実施（約100人の子を対象）

(10月：タンブラーの商品開発)

10月16日：戸塚区民市にてタンブラー販売

11月1日～3日：白金祭にてお茶べりの実施（タンブラー販売、写真展）

カフェ10⁽²⁾と協力のもと出店し地域住民の方と交流

11月10日～11月22日：白金・横浜校舎図書館で写真展開催（地域行事の広報、タンブラーのPR）

11月26日～12月9日：カフェ10でお茶べり実施（写真展、タンブラー販売）

12月4日：とつかお結び広場⁽³⁾にてタンブラー販売

12月17日：善了寺キャンドルナイト⁽⁴⁾でタンブラー販売

お茶べりの実施にあたり、白金・戸塚両地域の活性化事業に携わる多くの方々と関係をつくることができました。それぞれの活動に参加するなかで、地域住民の方とおしゃべりをする機会も多くありました。白金祭ではカフェ10と協力して出店したことで、学生だけでなく地域の方々とも交流できる場となりました。また、フェアトレードの紅茶をその場で楽しめる空間を作り、より会話が弾むよう工夫しました。

【5. 地域での活動を通して得たこと】

この企画を通して、私たちは「地域に関わる明学生が少ない」ということと「地域は若い力を必要としている」ということを実感しました。白金地域の自治体の会長の「若い人の力が地域を活性化してくれるから、どんどん地域に関わってほしい。」という言葉から、地域と明学生とが関わることの大切さを学びました。また、これまでの学内だけでの活動では気づくことのなかった様々な地域の魅力を感じ、関わりがなかった人々と出会うなかで、地域には多様な人たちが関わり合いながら暮らしているのだということを知りました。

【6. 課題と展望】

これまでは主に地域の方々が主催する行事に参加する形で活動を行ってきましたが、タンブラーに関心を示す地域住民は少なく、関係を深める場づくりまでには至らないことが多くありました。その一方で白金祭では、私たちが主体的に地域の方と協力し出店したことで、啓発活動をしながらも地域の方々と深く交流できる場となったので、今後は私たち自身が開催する行事を増やしていきたいと考えています。また、タンブラーのデザインを明学生や地域の人とインドの子ども達との合作にするなど、製作過程から多くの人を巻き込めるものへと、この企画を改善していきたいと考えています。

(注釈)

(1) 戸塚ほのぼの商店会主催の戸塚区民市。学生や商店の人などが協力して毎月1回催す小さな市場

(2) メリーロード高輪が運営する、情報発信を目的とするコミュニティカフェ

(3) 市民活動団体やボランティア団体・個人が集まって活動内容を紹介するイベント

(4) 明治学院大学と関わりのある戸塚善了寺で毎年2回開催されるキャンドルナイト

(Free ♥ Will 社会学部社会学科3年 森田友希)

地域交流から国際交流の芽が生える

私たち「ぼけっと」は2008年にカンボジア学校建設を目標に設立された団体です。そして2010年の3月に念願の学校が完成し、4月からはカンボジアの子ども達に「本」を通しての教育支援「図書普及プロジェクト」(以下、第2P)を行っています。この第2Pには絵本作成、詩集作成、おはなし会、移動図書館、テキスト作成、ミニマム図書館と、全部で6つのアプローチがあり、今回の企画「地域交流から国際交流の芽が生える」はそのうちの1つの絵本作成活動の一環で横浜キャンパスの最寄りの小学校「横浜市立倉田小学校」(以下、倉田小)に行ったことが始まりです。はじめは生徒達の家にある古い絵本をいただけないか、フィードバックの授業を行えないかの2点をお願いするだけのつもりでした。この時に校長先生が『どうせやるなら子ども達のためになることをやって欲しい』と仰ってください、この言葉から私たちが考えた企画となりました。

この企画の目的は2つあります。小学校の授業や行事と、ぼけっとの活動が一緒になることで子ども達に国際社会へ対する何かのきっかけを作ること、この交流により明治学院大学と倉田小の距離が縮まりお互いの活躍の場が増えることです。そのために、授業以外にも様々な行事に参加することで子ども達との間に壁をなくそうと力を入れています。授業では、ぼけっとのアプローチの1つである詩集作成のメンバーが中心となり、カンボジアの学生と倉田小の生徒で詩集を交換することにしました。この授業は生徒達が実際に主体になれる他、詩集も手元に残るので、より楽しんでもらえるのではないかと思います。詩集の交換の経過は以下の通りです。

詩集交換の経過

8月…カンボジアにてフリースクールの生徒に詩を書いてもらい持ち帰る

9月…倉田小にて打ち合わせ 総合学習「みのり」の授業枠で5年生を対象に授業をすることに決定

第1回目授業 テーマ「カンボジアってどんな国?~カンボジアとぼけっとの活動について」

10月…第2回授業 テーマ「ぼけっとの活動紹介」

第3回授業 第2回の続きと質疑応答

授業見学 子ども達の自宅学習の発表を聞く

11月…「倉田小秋祭り」見学 5年生は「みのり」の授業の成果を発表

12月…第4回授業 テーマ「子ども達に詩を書いてもらう」

ぼけっとメンバーに詩を配付、英訳作業開始

9月の打ち合わせで子ども達にはまずカンボジアとぼけっとを知ってもらおうと決めました。9月10月の授業の結果、カンボジアに興味を持ってもらい、子ども達とも親しくなることができました。また秋祭りでは、子どもたちが想像以上にカンボジア、ぼけっとのことを調べてくれていて、メンバー一同

喜びと共に責任感やモチベーションがより強くなったことを感じました。今後は英訳の作業を慎重に行い、ボラチャレで詩集の製本代として頂いた助成金 94,500 円を責任もって使わせていただきたいと思います。

これまでの活動を通して

まず始めにボラチャレの話を持ちかけてくれたボランティアセンターの市川さんをはじめスタッフの皆様にはこのような場を与えてもらい大変感謝しています。また急な話にも真剣に耳を傾け、無作法で詰めの甘い意見にいつも向き合ってくれる倉田小の校長先生と副校長先生にも、心よりお礼を申し上げます。他にも小学校の先生方や生徒達、保護者の皆様にはとてもお世話になっております。私たちは自分達でも驚くほどのスピードでプロジェクトを進行させることができました。それは地域の皆様が私たちを受け入れてくれたからこそです。企画以外でも地域を大切にしようという気持ちを心から持てるようになりました。また授業や行事に参加することで、子どもはもちろん保護者の方とも親しくなることができ、最近では戸塚駅近くでアルバイトをしているメンバーが保護者の方に声をかけられたという話も聞きました。また、ぼけっとの活動において、偶然にも保護者の方が学内で働いていらっしゃるにより、工事の都合でミーティングの場所が取れない時に自治会館を貸し出してくれたり、絵本集めを町内に回覧板で呼びかけてくれたりとうれしい展開となっています。今、私たちが活動できているのはこのボラチャレがあったからこそかもしれません。またこういったことが私たちに強いやる気と充実感を与えてくれ、より良い授業にしたいといつも思います。ただ、現在のところ時間調整がうまくいかず、一度も倉田小に足を運べていないメンバーもいるため、少しでも早く全員がこの気持ちを共有できればと思っています。この関わりをぼけっとだけでなく、大学に拡大していければ嬉しいです。またボラチャレの素晴らしいところは、報告会などを通し、他の団体や普段は話す機会がない人との意見交換ができることにもあると思うようになりました。自分たちのような国際ボランティアの団体が、なぜ地域密着型の企画をやるのかと自分でも最初は思いましたが、人と人が交流し助け合うことがボランティアの根本なのではないでしょうか。



1回目の授業の様子 みんな手を挙げて積極的でした

(ぼけっと 国際学部国際学科3年 砂川朝暁)

白金アートミュージアム

<企画目的>

私たち MG ☆ SUZU は、港区の特別養護老人ホームの利用者の方々とアートを通して交流を行っている学生チームである。利用者さんの個性や魅力を多くの人に伝えるための発信源として定期的に展示会を開いている。利用者の方々、観に来て下さるご家族の方や地域の方、お互いに笑顔になってもらいたいという私たちの思いが込められている。これまでの活動ではホーム内の展示だったが、今回の「白金アートミュージアム」では、MG ☆ SUZU 初となる大学での展示を企画した。地域に住んでいる方誰もが気軽に訪れることができ、学生にもアピールしやすいため、より多くの方に作品を見て頂けると考えたからである。

<経過と実績>

11月24日～12月10日の期間、白金キャンパスのパレットゾーン2階にて白金アートミュージアムを開催した。開催にあたって、私たちは白金地域にいらっしゃる様々な方や施設とコラボレーションをさせて頂いた。私たち学生が地域の方と活動を共にし、展示会実現という共通の目標を持つことで、大学・地域・施設同士のつながりを強化するきっかけになると考えたためだ。主な活動先である特別養護老人ホーム白金の森をはじめ、白金ボランティアセンターや以前からつながりのあった俳人・花田春兆さんにも作品の提供など全面的にご協力頂けることになり、実現に向け準備は進められていった。さらに日頃の白金の森でのアート制作活動に加え、春兆さんが入所されている特別養護老人ホーム麻布慶福苑の利用者の方々と作品制作、NPO 法人風の子会の皆さんとの和紙制作も行うことができた。この企画を通して「多様なコラボ」が生まれたということは、春兆さんが付けて下さった白金アートミュージアムの副題「丘の学園と森の特養とのアートの出会い～そして飛び入り遠囃子。昔の狸ばやしならぬ広尾の仲間たちの共鳴の出品～」にも表れている。「丘の学園」は明治学院大学、「森の特養」は白金の森、「広尾の仲間たち」は広尾にある麻布慶福苑と花田春兆さんのことを指しており、それぞれが「アート」という手段を通して共鳴し、手を取り合うことの大切さを示している。

多くの方からの温かいお力添えがあり、白金の森の利用者の方々の作品、花田春兆さんの作品（風の子会の皆さんと作った和紙を用いた陶俳画）、慶福苑の利用者の方々の作品という、華やかな合同展示を開催することができた。しかし、その背景にはメンバーの葛藤もあった。作品の魅力を引き立たせるためにどのような展示方法が良いかメンバーで試行錯誤し、その結果、副題のイメージに合わせた森の空間を演出することになった。パーテーションを木に、机を切り株に見立て、作品にも手作りの額縁を付けたり、所々に葉っぱや動物の装飾を施すなど、メンバーのアイデアを加えながら作り上げていった。また、私たちは完成された作品だけでなく、制作過程の交流も「アート」であると捉えている。そのため、制作中のエピソードを作品と一緒に展示することで、作品に込められた作り手の思いが伝わるよう工夫をした。展示が少しでも多くの方の目に留まり、何かを感じ取って頂けたなら幸いである。

白金アートミュージアムの特別企画として、花田春兆さんをお迎えした俳句ワークショップを学内で
行なった。学生も一般の方も、初めて出会ったにもかかわらず、一緒に俳句を詠むことで楽しい時間を
共有し、笑顔で交流することができた。春兆さんの温かいコメントや参加して下さった方との会話を楽
しみながら和やかな雰囲気の中で行われたこのワークショップは、新しいコミュニケーションとしての
アートの形を私たちにを見せてくれた。参加者の皆さんから好評だったので、またこのような楽しさを共
有し、出会いを広げていけるような企画をしていきたい。

<企画を通して得た学び>

展示会を観に来て下さった方の温かい反応が何より嬉しかった。作品を観に来て下さった利用者の方々とご家族の方から、笑顔で「ありがとう」の言葉を頂けた時、活動してきて本当によかったと心から思った。展示を観るまでMG☆SUZUを知らなかった学生や地域の方が励ましの声を下さったり、作品の魅力に共感して下さる方がいたことが、活動に対するモチベーションにも繋がっている。そして今回の企画を通して、MG☆SUZUは本当に多くの方に支えられていると実感した。協力して下さった方々や施設との信頼関係が強まったことは、今後の活動において大きな財産である。また、メンバー内の絆も困難を乗り越えるたびに強まっていくのを感じていた。私たちにとって初の学内展示ということで不安もある中での企画であったが、実現できたことで自信を持ち、今後よりよい活動に繋がれると信じている。まだまだMG☆SUZUには未知数の可能性があることを期待し、向上していきたい。

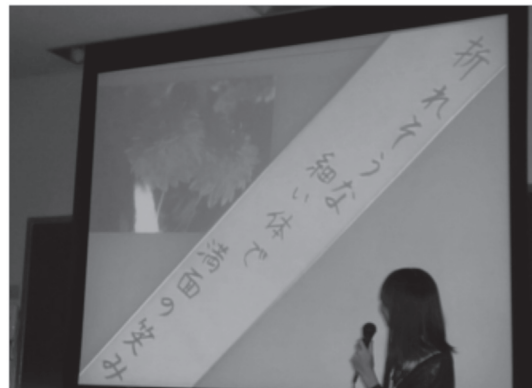
<今後の課題>

様々な方とコラボ出来たのはよかったが、周りに頼りすぎていた部分があった。白金の森、麻布慶福苑や春兆さんからの協力がなければここまでの展示はできなかつたらうし、広報活動においてはメンバーから発信したチラシや情報により足を運んだという人は少なく、私たち自身ももっと力を蓄えなければならないと感じた。準備段階での計画性のなさでは、皆様にご迷惑をお掛けしたり、慌ただしく時間に追われることが多々あった。これらの反省を生かし、今後はMG☆SUZUの活動をより多くの方に知って頂けるようアプローチを考え、余裕を持った活動を行っていけるよう工夫していきたいと思う。

(MG☆SUZU 社会学部社会福祉学科3年 外山葵)



展示会「白金アートミュージアム」



俳句ワークショップの様子

白金の魅力発見！ Deep Map

【企画内容・目的】

私たちは「明治学院大学のある白金という街で明治学院大学の学生だからこそできる活動をしたい」と思った学生有志らが集まったプロジェクトチームである。明学の輪、地域の輪を広げていくために、今後も様々な活動を通して、地域の方々と共に白金の街を盛り上げていきたいと考えている。(プロジェクトの詳細は報告書 31～32 ページを参照。)

明治学院大学の校舎がある白金地域は、一般に「セレブの住む街」や「高級住宅地」というような、新しい街のイメージが挙げられるが、私たちが白金で活動していくうちに、そういったイメージだけでなく、地元の人が経営する昔ながらのお店や、下町風情ただよう町工場なども多いことに気付いた。また、自分の地域に愛着を持つ方や、地域のつながりを大切に活動をしている人や団体など、様々な出会いがあり、地域のあたたかさを発見することができた。そこで、そんな白金の街をより多くの人に知ってもらいたいと思い、タウンマップ等には載っていない白金地域の知られざる魅力を紹介することにした。そして、2010年5月に制作・発行したのが「白金 Deep Map (以下、Deep Map)」である。ボランティアファンド学生チャレンジ賞では、Deep Map 第二号、第三号の製作費を助成していただいた。このマップを通じて白金地域の魅力を発信し、白金地域に住んでいる方々と明治学院大学の学生とのつながりの輪を広げていきたいと考えている。

【企画の経過】

現在 Deep Map 第二号の制作が進行中である。今後の予定としては3月に Deep Map 第二号を完成させ、可能であれば3月実施予定の港区青少年対策高松地区委員会主催のふれあいコンサートで配布する。イベントで Deep Map を配布するのは、直接地域の方から声を聞くことができる機会であるからだ。その後しろかねサラダのメンバーで反省会を行い、次号をよりよいものにするべく、イベントで得た地域の人々の意見をもとに Deep Map 第三号の作成を開始する。そして5月には白金志田町倶楽部主催のシロカネグローバルフェスタに参加し、Deep Map 第三号を配布する予定である。他にも白金志田町倶楽部主催や港区青少年対策高松地区委員会の主催するイベントなどに参加し、Deep Map を配布していきたいと考えている。我々がイベントなどで地域の人々に Deep Map を配布していくことで、ただ単に地域の人々と交流できるだけでなく、地域の人が白金をより深く知るきっかけになると思っている。また私たちにとっては、Deep Map に対する感想・意見を直接地域の人から聞くことで、Deep Map の技術や面白さの向上だけでなく、モチベーションの向上につながるという Win-Win の関係を築くことができると考えている。

【活動を通して得た学び・課題】

第二号のコンテンツの企画をした際、既存の雑誌やフリーペーパーとの違いが出せず、「白金のデートスポット」や「女子会コース」など、明学生でなくてもできるコンテンツではないかとコーディネーター

の方から指摘を受けた。一方で、第一号をイベントで配布した際、地域の方から「白金に住んでいるのに知らなかったことがあった」という声を聞くことができた。そういった発見は外から白金に通ってきている私たちならではの視点で、明治学院大学の学生だからこそできることであると思っている。第二号ではそれを忘れて企画をしていたように思い、プロジェクトのコンセプトでもある「明治学院大学の学生だからこそできること」という原点に立ちかえることの重要性を実感した。企画はまだ進行中なので、今後はプロジェクトのコンセプトを意識し、また地域の方からの意見や感想を聞きながら制作を進めていきたい。また、一番の課題は、我々メンバー自身が活動を楽しむことができなかつたことである。なぜそれが大切かといえば、ボランティアは世の中で必要とされているセクターを補う役割を果たしているが、同時に主催者側が活動に愛着を持つことがボランティア活動の持続に繋がるからである。

活動を自ら楽しむことができなかつた理由として、1. メンバー同士でのコミュニケーション不足、2. 活動の趣旨が曖昧なこと、3. 地域の人々からの理解が得られなかつたことの3点が考えられる。3. についてだが、Deep Map 第二号作成にあたり地域の店などにインタビューを求めたところ、何のための取材でその情報を学生がマップにする意味は何かを問われ、最終的には取材を断られてしまった。「白金の魅力を多くの人に伝える」という目的意識を持って企画に取り組んではいたが、それに協力してほしい人々が理解してくれることの難しさを感じた。これらについてはメンバーの一部で話し合い、その反省を元に今後の活動方針を確認するに至った。

【今後の目標】

この Deep Map は学生と地域を結ぶツールとなり、我々メンバーが地域のことを一つでも知ったという証になるのではないかと考える。

そのようなフリーペーパーにするためには、まずはメンバー自らが地域のことを知る必要があると考える。そのために、空いている時間を見つけて白金地域に足を運んでみることにした。それは Deep Map を作るための活動という意味が主ではなく、ただ単に地域のおもしろさを発見することで地域を知り、活動を楽しむための土台作りの意味で、「白金で遊ぼう」ということである。そして、結果的に地域に密着したフリーペーパーを制作できればと考える。

また、なぜここであえて「マップ」ではなく「フリーペーパー」という言葉を使っているかという点、我々はマップの概念に囚われずにマップを越えた「マップ」制作を目指しているからである。例えば、メンバーが白金の街を練り歩いた様子を描きながら地域を紹介するなどのストーリーを交えたものや、一面をすごろくにして地域を紹介する、などのユニークなフリーペーパーを制作できればと考えている。

そして、しろかねサラダのイベントで出来上がった Deep Map を配り、地域の方へ活動を知ってもらおうと同時に、地域の方から意見を募り、Deep Map がより良いものになるように今後の「マップ」制作に努めたい。

(しろかねサラダ 心理学部心理学科3年 本間由香・社会学部社会学科1年 山本恵理子)

Ⅱ. ボランティア調査

新入生のボランティア意識—「新入生ボランティア活動アンケート」から

1. 調査の目的と概要

ボランティアセンターでは、毎年4月新入生オリエンテーションの際に、ボランティア活動に関するアンケート調査を行っている。この調査は、新入生のボランティアへの意識や活動の意向を明らかにし、センターが取り組むべき課題についての情報を得ることを目的としている。2001年度に開始した新入生を対象としたこの調査は、本年度で10回目を迎えた。年度ごとに、調査項目に多少の見直しはあるものの、基本的には同じ質問項目を用いてきた。調査結果は各年度の報告書で公開されている。

2010年度は2405名の新入生から回答を得ることができた。調査概要は以下の通りである。

調査対象者	明治学院大学 2010 年度 1 年生
調査期間	2010 年 4 月
調査方法	各学部の新入生オリエンテーションにて調査票を配布し、その場で回収した。
調査結果	総数 2405 名 (男子 : 990 名 (41.2%)、女子 : 1408 名 (58.5%)、不明 7 名)

文学部 (英文学科 192 名、フランス文学科 114 名、芸術学科 130 名)

経済学部 (経済学科 238 名、経営学科 147 名、国際経営学科 123 名)

社会学部 (社会学科 162 名、社会福祉学科 206 名)

法学部 (法律学科 265 名、政治学科 130 名、消費情報環境法学科 174 名)

国際学部 (国際学科 287 名)

心理学部 (心理学科 126 名、教育発達学科 77 名)

調査項目	<ul style="list-style-type: none">・大学入学以前のボランティア活動経験について・大学時代にボランティア活動に参加したか・参加したい理由、活動日の希望、活動頻度の希望、活動内容・参加したくない理由・関心のある活動領域・ボランティア活動を始めるにあたっての心配事について・ボランティアセンターの認知度など
------	---

2. 調査結果

(1) 大学入学以前のボランティア活動経験について

「これまでにボランティア活動に参加したことがありますか」という質問に対して、「はい」が47.2%、「いいえ」が52.3%であった（図1）。今年度の新入生の約半数が、大学入学以前に何らかのボランティア活動に参加した経験があることがわかった。ボランティア経験のある学生の割合は、2008年度は50.3%、2009年度は50.3%であったことから、近年、新入生の半数程度は、高校までの学生生活においてボランティア活動を経験してきていることがわかる。

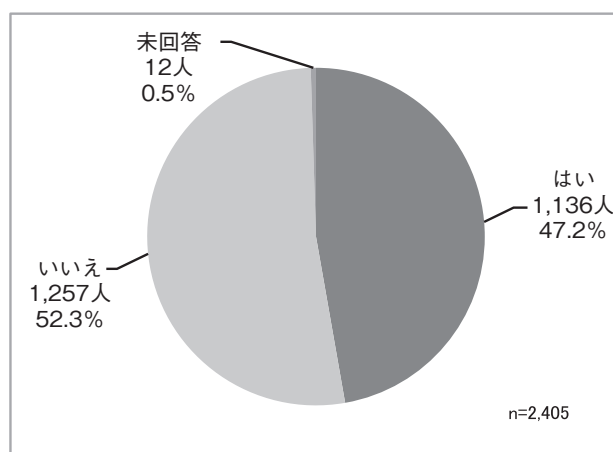


図1 「これまでにボランティア活動に参加したことがありますか」

(2) 大学時代にボランティア活動に参加したいか

「大学時代にボランティア活動に参加したいと思いますか」という質問に対して、「はい」が60.4%、「いいえ」が39.0%であった（図2）。「はい」と回答した学生が、2008年度61.2%、2009年度62.6%であったことから、入学後のボランティア活動への参加希望は約6割程度であることがわかる。

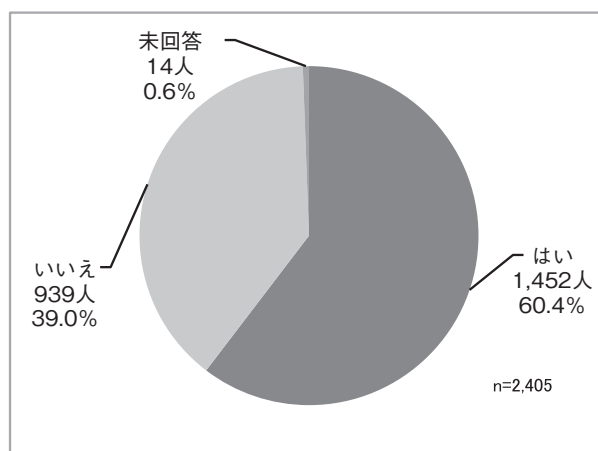


図2 「大学時代にボランティア活動に参加したいと思いますか」

次に、学科別に「大学時代にボランティア活動に参加したい」と回答した学生の割合を求めた（表1）。

表1 大学時代にボランティア活動に参加したいか・学科別（カッコ内は09年度）%

社会福祉学科	83.5 (82.2)	国際経営学科	56.9 (63.4)
国際学科	82.9 (84.0)	芸術学科	55.4 (60.8)
教育発達学科	77.9	政治学科	50.8 (67.2)
心理学科	65.9 (72.5)	消費情報環境法学科	48.3 (55.6)
社会学科	64.8 (57.7)	経済学科	46.2 (50.0)
英文学科	64.1 (71.4)	経営学科	45.6 (33.5)
フランス文学科	63.2 (61.0)	法律学科	43.8 (44.8)

参加したいと回答した学生の割合が本年度最も高かったのは、社会福祉学科の83.5%であり、昨年度トップであった国際学科82.9%とならび、ボランティア活動に高い参加意欲を示している。本年度より新設された教育発達学科の学生も77.9%と高い割合を示しており、心理学科、社会学科、英文学科、フランス文学科がいずれも60%以上の値を示していた。全体的にみると、今年度の新入生の半数以上が「大学時代にボランティア活動に参加を希望する」と回答した学科が14学科中10学科であり、13学科中11学科を占めていた昨年度に比べて、ボランティア活動に意欲的な学生が、やや減少する傾向にあることが示唆される。

また性別にみると、ボランティア活動参加意欲については、女子学生の70.9%が参加を希望しているのに対して、男子学生は45.4%にとどまっており、ボランティア活動の志向性は女子学生の方が高いことがうかがえる。

「大学時代にボランティア活動に参加したい」と回答した学生（1452名）に対して、「ボランティア活動に参加したい理由（複数回答）」を尋ねた（図3）。その結果、理由として挙げられているのは、「新しい出会いや経験を得たい」（59.5%）、「ものの見方や考え方を広めたい」（52.9%）という回答が多かった。次いで、「知識を広げたい」（41.3%）、「授業では得られないものを学びたい」（35.1%）、「地域や人のために役立ちたい」（34.8%）という回答になっている。昨年の結果と比較すると、順位、割合ともほぼ同様な結果であった。なお、これを性別にみると「新しい出会いや経験を得たい」「授業では得られないものを学びたい」「地域や人のために役立ちたい」「ものの見方や考え方を広めたい」という理由をあげた女子学生の割合が、男子学生に比べて高く、この傾向も昨年と同様であった（表2）。この「ボランティア活動に参加したい理由」については、後ほど新たに節を起こして詳細に検討する。

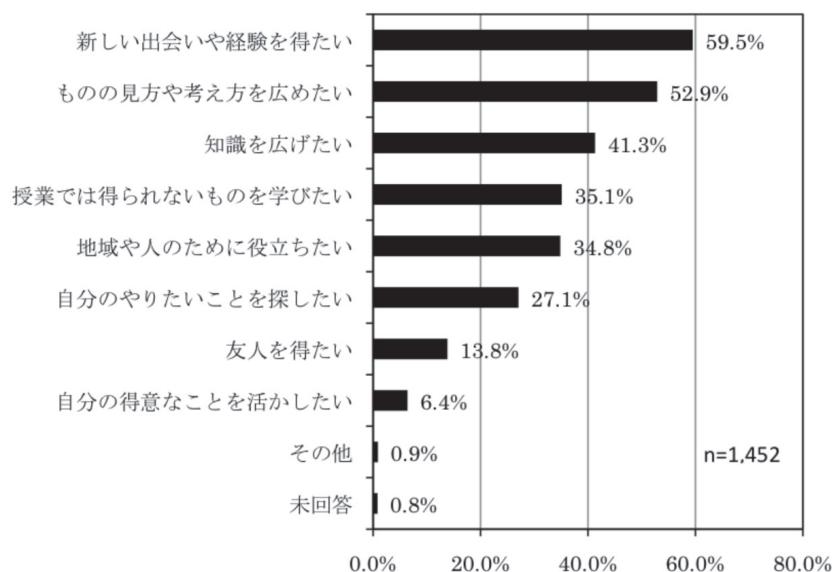


図3 ボランティア活動に参加したい理由（複数回答）

表2 ボランティア活動に参加したい理由・性別（複数回答）

	回答者数	自分の やりた いこと を探し たい	新しい 出会い や経験 を得た い	知識を 広げた い	授業で は得ら れない ものを 学びた い	地域や 人のた めに役 立ちた い	もの の見方 や考え 方を広 めたい	自分の 得意な ことを 活かした い	友人を 得たい	その他	未回答
全体	1452	393	864	600	510	506	768	93	201	13	12
	100.0	27.1	59.5	41.3	35.1	34.8	52.9	6.4	13.8	0.9	0.8
男	449	128	240	187	137	144	208	34	79	7	4
	100.0	28.5	53.5	41.6	30.5	32.1	46.3	7.6	17.6	1.6	0.9
女	998	264	623	411	371	362	556	59	121	6	8
	100.0	26.5	62.4	41.2	37.2	36.3	55.7	5.9	12.1	0.6	0.8
未回答	5	1	1	2	2	0	4	0	1	0	0
	100.0	20.0	20.0	40.0	40.0	0.0	80.0	0.0	20.0	0.0	0.0

次に、参加したいと回答した学生に対し、希望するボランティア活動のスタイルを尋ねた（図4）。活動日に関しては、最も多いのが「夏休み、冬休み等の長期休暇中に」で62.1%であった。次いで「休日」（23.6%）、そして最後に「平日」（14.3%）であった。これも昨年度と同様の結果であり、時間的に余裕のある長期休暇中に活動に参加したいとする学生が大半であり、「平日」に大学の講義やアルバイト、部活動やサークル活動などと並行して、ボランティア活動を希望する学生は1割程度であった。センターに寄せられるボランティア情報では、休日等に行われるイベント的なプログラムと同様に、日常生活における継続的なボランティア活動への要請も多いことから、学生のニーズとのマッチングが課題であることも、例年と同様である。

頻度に関しては（図5）、「月に1～2回」（32.4%）、「2ヶ月に1回くらい」（32.8%）、「一定期間に集中して」（27.8%）の順であった。「週に1回くらい」という頻度の高い活動を希望する学生の割合は、7.0%

と昨年同様に低い値となっていた。活動形態については（図6）、「いろいろな活動に挑戦していきたい」（82.7%）が高く、「ひとつの活動を続けていきたい」（16.0%）に大きく差をつけている。この傾向も昨年とほぼ同様であり、ここ数年変化はみられない。

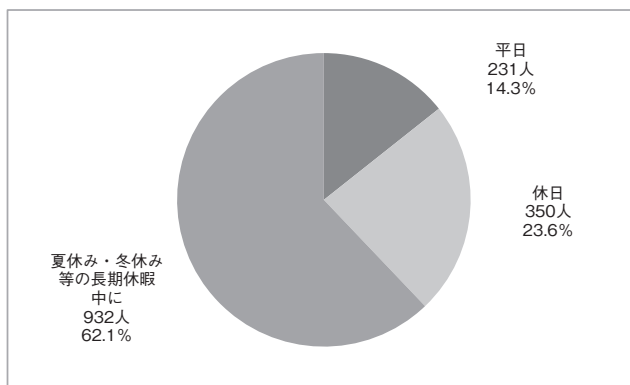


図4 希望する活動日

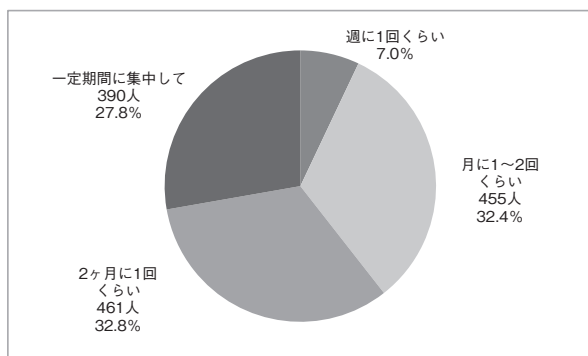


図5 希望する頻度

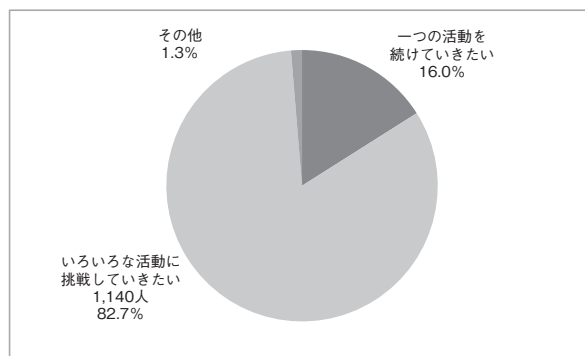


図6 希望する活動形態

一方、大学時代にボランティア活動に参加したいとは思わないとした学生（939名）に対し、複数回答によってその理由を尋ねた（図7）。その結果、「時間がない」（41.7%）、「関心がない」（32.4%）、「きっかけがない」（30.5%）、「やりたいものがない」（16.1%）、「知識や技術がない」（13.1%）、「情報がない」（11.2%）、「お金がない」（9.4%）であった。例年通り、講義やアルバイト、部活動やサークル活動などの時間的な制約があって、ボランティア活動に充てる時間がないと感じている学生が多いことが示唆される。前述した通り、新入生の半数以上が入学前にボランティア活動を体験していることを考え合わせると、「これまでの体験からいやになった」（28%）という回答の割合は例年と同様であり、なおかつ低い割合であったことから、入学前のボランティア活動における「嫌な体験」が主たる阻害要因になっているわけではないことが示唆される。これらの点については後ほど、さらに詳しく検討したい。

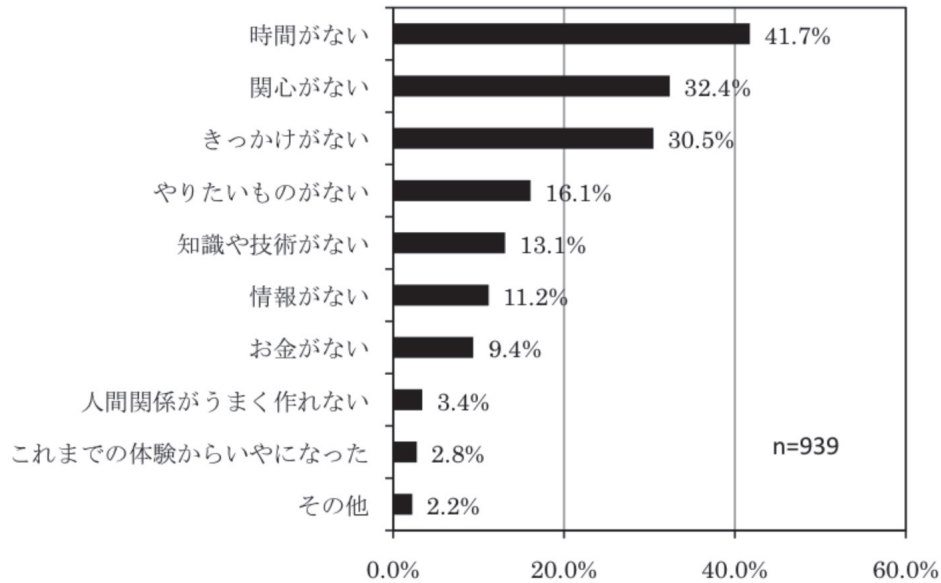


図7 ボランティア活動に参加したいとは思わない理由

(3) 関心があるボランティア活動について

「関心があるボランティア活動分野」を複数回答にて尋ねた(図8)。その結果、「国際」(17.8%)が最も多く、「環境」(13.7%)、「子ども」(13.6%)、「文化」(13.4%)、「まちづくり」(12.7%)、「社会福祉」(8.8%)、「スポーツ」(7.8%)、「心理」(7.1%)、「ボランティア活動支援」(5.0%)の順であった。この順位、割合については、2009年度とほぼ同様の結果であった。

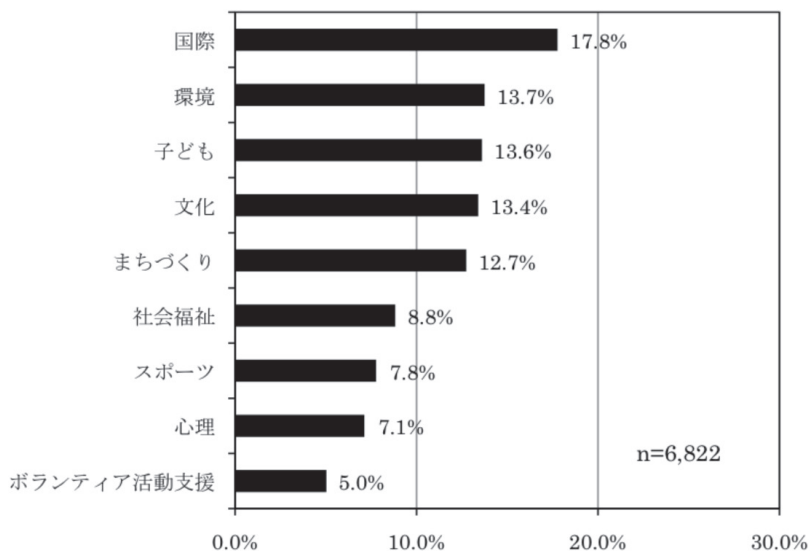


図8 どのようなボランティア活動に関心があるか

それぞれの領域のさらに関心のある活動について、分野ごとの希望者にさらに尋ねた。希望の高かった「国際」「環境」「子ども」領域の具体的な活動内容を、図9～11に示した。

「国際」領域では、「異文化交流」「国際協力」活動を、いずれも半数以上が希望しており、関心の高さがうかがえた。また、「環境」領域では、「ゴミ・リサイクル」(37.8%)、「森林保護」(37.4%)、「動物保護」(35.7%)がいずれも3割を超えていた。「こども」領域では、「保育園・赤ちゃん」が約6割、次いで「放課後活動」が5割と希望が多い。これら人気のある3領域の具体的な活動分野希望は、2007年度からほとんど変化がみられず、固定した希望分野となっている。

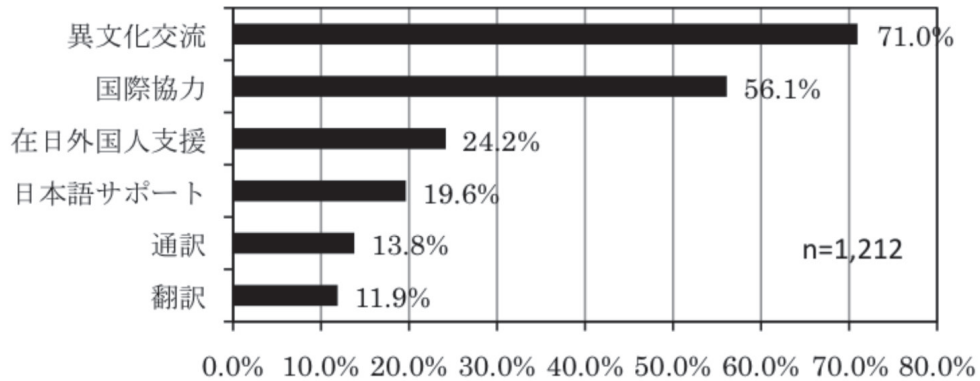


図9 国際の希望分野 (希望者に複数回答)

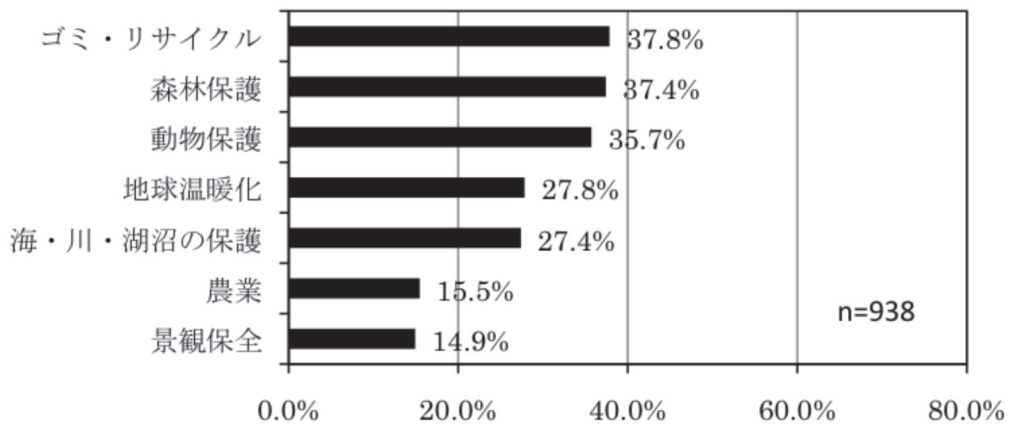


図10 環境の希望分野 (希望者に複数回答)

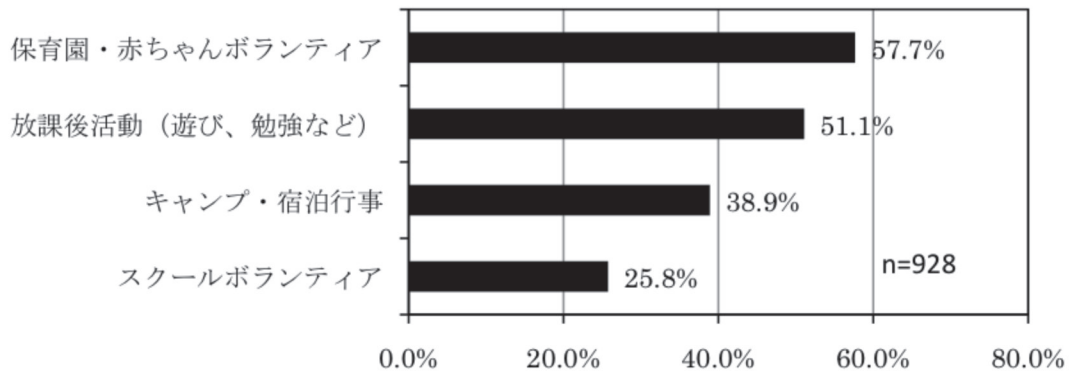


図11 子どもの希望分野（希望者に複数回答）

その他の領域についてみると、「文化」領域では、「音楽」（63.3%）、「映画」（40.7%）が高く、「美術館・博物館」（30.2%）、「歴史」（21.9%）、「食」（21.3%）、「演劇」（19.3%）、「科学」（6.1%）の順であった。本学には理科系の学科が存在しないことが、このような結果をもたらしていると推測される。「まちづくり」領域では、「祭り・イベント」（83.9%）と希望が突出しており、「地域おこし」（18.3%）、「災害」（14.4%）、「子育て支援」（11.3%）、「町並み保全」（5.9%）であった。「社会福祉」領域では、「障がい児・者支援」（48.5%）、「高齢者支援」（46.0%）、「病院ボランティア」（42.5%）の関心が高く、「路上生活者支援」（15.0%）、「自助グループ支援」（11.0%）という結果であった。「心理」領域では、「不登校児童・生徒の支援」（72.2%）、「メンタルフレンド」（53.5%）であった。「ボランティア活動支援」領域では、「企画・広報」（49.9%）の人气が高く、ついで「事務補助」（27.4%）、「人材育成」（21.3%）、「ボランティアコーディネート」（14.9%）、「資金調達」（12.2%）、「ホームページ管理」（12.2%）、「政策提言」（11.1%）であった。こういった領域ごとの細部の活動希望分野についても、この数年の傾向には、ほとんど変化がみられなかった。

（4）ボランティア活動を始めるにあたっての心配事

「ボランティア活動を始めようとするとき、主に心配なことは何ですか」（複数回答）では、「自分ができるか」（44.2%）が最も高く、次いで「相手とうまく接することができるか」（32.4%）、「最後まで続けられるか」（31.4%）、「役に立てるか」（28.9%）、「自分の時間がなくなってしまうか」（27.0%）の順で比較的高い割合を示していた（図12）。この順位や割合も、ほぼ例年と同様であった。

（5）ボランティアセンターの認知度

最後に「明治学院大学にはボランティアセンターがあることを知っていましたか」に関しては、「はい」と回答したのは52.8%、「いいえ」が40.9%、「未回答」が6.4%であった（図13）。「はい」という回答をした新入生の割合の変化をみると、2005年度41.6%、2006年度42.3%、2007年度68.0%、2008

年度 47.4%、2009 年度 49.1%となっており、2007 年度に突出して認知度が高かったが、この3年間はほぼ半数程度の新生が認知しているという割合で落ち着いてきている。2011 年度の新生については、2011 年度より新たに取り組むこととなった「One Day for Others」についての情報提供を入学前に行っているため、認知度がさらに高くなることが期待される。

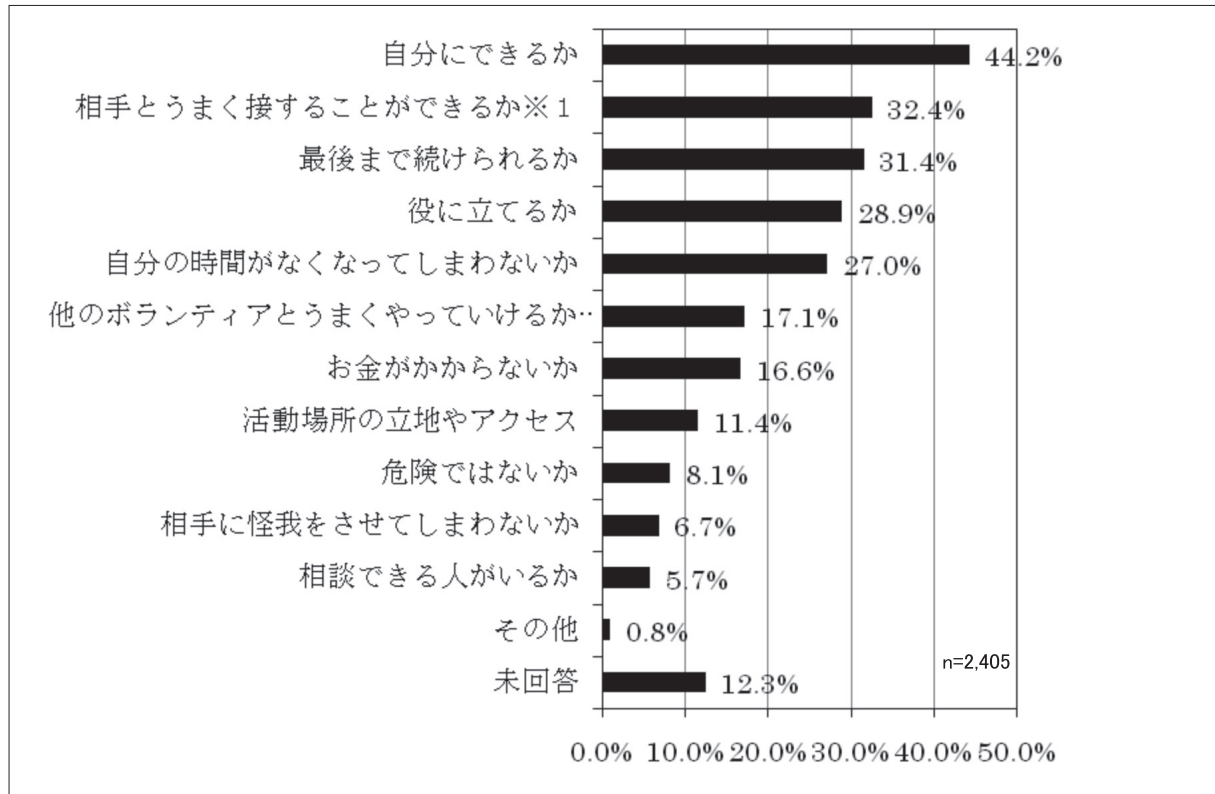


図 12 ボランティア活動を始めに当たっての心配事

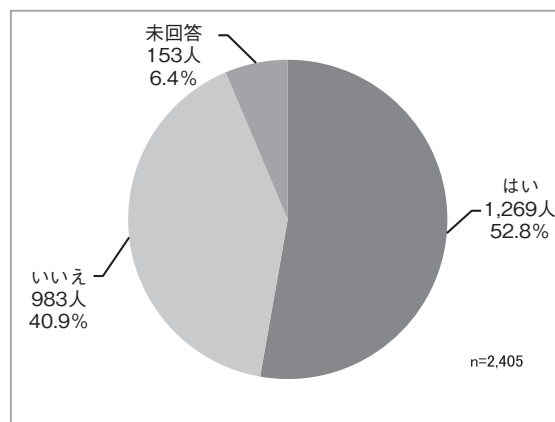


図 13 ボランティアセンターの認知度

3. ボランティア活動へ参加したい理由および参加したくない理由についての要因分析

ここまで、単純集計および簡単なクロス集計を用いて、回答の分布について概観してきた。最後に、大学時代にボランティア活動に参加したい理由および参加したくない理由について、もう少し分析を深めてみたい。前述した通り、参加したい理由について調査票では、「新しい出会いや経験を得たい」から「その他」までの9項目の選択肢から当てはまるものを全て選んでもらっている。この回答パターンの背後にどのような要因が潜んでいるのかを、主成分分析という手法を用いて探ることとする。

(1) 参加したい理由について

大学時代にボランティア活動に参加したいと回答した学生1452名のみを対象として、参加したい理由9項目の背後に潜在する要因を、主成分分析を用いて析出した。また、性別との関連を検討するために、性別（男性：0、女性：1のダミー変数）も加えた。なお、分析結果を見やすくするために、因子負荷量の絶対値が0.25以上のものだけを表3に示した。

表3 参加したい理由

	第1主成分	第2主成分	第3主成分
自分のやりたいことを探したい	0.487	0.281	
新しい出会いや経験を得たい	0.696		
知識を広げたい	0.668		
授業では得られないものを学びたい	0.631		
地域や人のために役立ちたい	0.501		
ものの見方や考え方を広めたい	0.677		
自分の得意なことを活かしたい	0.387	0.566	
友人を得たい	0.487	0.522	
その他			0.953
性別	0.316	-0.588	
固有値	2.761	1.117	1.015
寄与率	27.613	11.171	10.151
累積寄与率	27.613	38.784	48.935

分析の結果、3つの主成分、すなわち3種の要因が析出された。第1の要因（第1主成分）は、「新しい出会いや経験を得たい」「知識を広げたい」「授業では得られないものを学びたい」といった項目に大きな負荷を示していたことから、＜知的好奇心＞を示していると考えられる。また性別が第1主成分に対して正の大きな負荷を示していたことから、この「知的好奇心」は女性に特徴的なものであることが示唆された。この点はクロス集計の結果と同様の結果であった。第2の要因は、「自分の得意なことを活かしたい」「友人を得たい」「自分のやりたいことを探したい」に対して大きな負荷を示していたことから、＜自己実現欲求＞を示していると考えられる。この第2の要因については、性別が負の大きな負荷を示していたことから、男性に特徴的なものであることが示された。第3の要因として析出されたのは、

「その他」という項目であった（したがって第3の要因は<その他>と命名できよう）。これは、これまでの調査で用いられてきた選択肢では測定できなかった「理由」を、固有に選択している学生が存在することを示している。したがって、学生へのヒアリングなどを通して、8項目以外の理由を探索しておく必要があることがわかる。

なお、累積寄与率は、これらの3種類の要因によって参加したい理由の48.9%が説明されることを示しており、半分弱しか説明できていないことがわかる。このことから、現在我々センタースタッフが想定している「参加希望理由」とは異なる、新入生が実際に抱えている「参加希望理由」を明らかにしておく必要があることがわかる。

(2) 参加したくない理由について

大学時代にボランティア活動に参加したいと回答しなかった学生939名のみを対象として、参加したいとは思わない理由10項目の背後に潜在する要因を、主成分分析を用いて析出した。また、性別との関連を検討するために、性別（男性：0、女性：1のダミー変数）も加えた。なお、分析結果を見やすくするために、因子負荷量の絶対値が0.25以上のものだけを表4に示した。

表4 参加したいと思わない理由

	第1主成分	第2主成分	第3主成分	第4主成分
関心がない	-0.305	0.456	0.434	
時間がない		-0.767	0.256	
情報がない	0.554	0.296		
きっかけがない	0.602		-0.348	
お金がない	0.4	-0.424	0.432	
知識や技術がない	0.588			
やりたいものがない	0.267		0.458	-0.292
人間関係がうまく作れない	0.489		0.274	0.29
これまでの体験からいやになった		0.267		0.535
その他				0.687
性別			-0.534	
固有値	1.615	1.276	1.233	1.054
寄与率	14.684	11.596	11.211	9.585
累積寄与率	14.684	26.28	37.49	47.075

分析の結果、4種類の要因が析出された。第1の要因は、「きっかけがない」「知識や技術がない」「情報がない」といった項目に大きな負荷を示していたことから、<参加の糸口の欠如>を示していると考えられる。第2の要因は、「時間がない」「お金がない」に負の大きな負荷を示し、「関心がない」「情報がない」「これまでの体験からいやになった」に正の大きな負荷を示していた。すなわち、時間やお金が

ないことが理由ではなく、情報がなく、関心がない、そして過去の嫌な体験が理由となっていた（したがって、第2の要因は〈嫌な体験に基づく関心の喪失〉と命名できよう）。前述した通り、大学入学前のボランティア経験は新入生の約半数であったことを考え合わせると、過去のボランティア経験で嫌な思いをし、ボランティア活動に対して関心を失った学生が、少なからず存在することが示唆される。この第2の要因は、寄与率が示しているとおりに、ボランティア活動に参加したいと思わない理由の11.6%を説明している。

第3の要因は、「きっかけがない」わけではないものの、「やりたいものがない」「関心がない」「お金がない」という理由であり、〈無関心〉を示している。この要因は、男子学生に特徴的なものである。無気力・無関心な男子学生が一定程度存在することが示唆される。第4の要因は、「やりたいものがない」わけではないものの、「これまでの体験からいやになった」「その他」という理由であり、〈嫌な体験〉を示している。第2の要因が、嫌な体験が関心の喪失に結びついているのに対して、この第4の要因は関心の喪失には結びついておらず、「やりたいもの」も失っていない。この第4の要因を理由に挙げている新入生たちに対しては、過去の嫌な体験とはどのようなものであり、それを繰り返さないための環境整備ができれば（それができていることが、この学生たちにわかれば）、ボランティア活動に参加してもらえる可能性があるといえよう。

(3) 考察

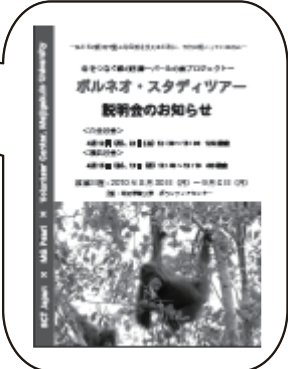



これらの要因分析の結果をまとめると、次のようになる。参加したい理由としては、①知的好奇心、②自己実現欲求、③その他、が挙げられており、②自己実現欲求については男子学生に特徴的であった。一方、参加したいと思わない理由としては、①参加の糸口の欠如、②嫌な体験に基づく関心の喪失、③無関心、④嫌な体験、が挙げられており、③無関心については男子学生に特徴的であった。

参加したい理由、参加したいと思わない理由のいずれについても、これまで数年の調査で用いられてきた選択肢では十分に測定できていないため、学生へのヒアリングなどを通して、現在まで我々が想定してこなかった学生固有の「理由」を明らかにしておく必要があることが示唆された。また、回答の頻度としては少ないがためにこれまで見過ごされてきた（「時間がない」「関心がない」「きっかけがない」といった大きな声に、その訴えがかき消されてきた）、大学に入学する前に行ったボランティア活動における嫌な体験が直接的に、またボランティア活動に対する関心の喪失を媒介として間接的に、「ボランティア活動をしたくないと思わない理由」につながっている可能性が示唆された。したがって、ボランティアセンターとしては、今後、嫌な体験を繰り返さないための環境整備に努める必要があるといえよう。学生の「ボランティア活動」を活発にするためにはさまざまな方策が考えられるが、「ボランティア活動」という用語に付随したネガティブなイメージを払拭する試みもまた必要であることを指摘しておきたい。

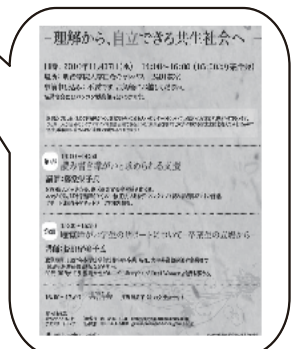
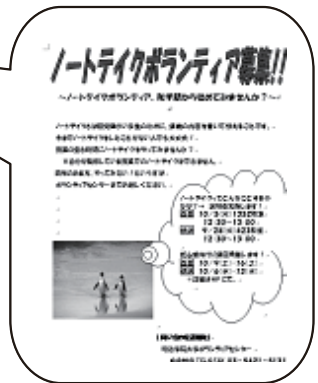
(浅川)

Ⅲ. ボランティアセンター 資料

2010 年度ボランティアセンター行事一覧

4 月	<p>新入生ボランティア活動アンケート実施</p> <p>ボランティアファンド学生チャレンジ賞(ボラチャレ)2010 募集開始</p> <p>ボルネオ・スタディツアー説明会</p> <p>ノートテイクボランティア説明会開催</p>	
5 月	<p>ボラチャレ 2009 報告会&2010 説明会開催</p> <p>国際機関実務体験プログラム説明会開催</p> <p>ノートテイク講座開催</p> <p>シロカネグローバル・フェスタ 2010 に参加</p> <p>第 1 回ボランティアセンター運営委員会開催</p> <p>2009 年度日米 NPO ボランティア体験学習プログラム報告会開催</p>	
6 月	<p>パソコンノートテイク講座開催</p> <p>夏休みボランティア説明会開催</p> <p>公開講演会「ボルネオ緑の回廊～消費者主体の生物多様性保全活動」開催</p> <p>ボラチャレ 2010 公開審査会開催&奨励団体決定</p> <p>ボラチャレ 2010 授与式開催</p>	
7 月	<p>第 9 回ソニーマーケティング学生ボランティアファンド報告会</p> <p>ノートテイク交流会開催</p>	
8～9 月	<p>国際機関実務体験プログラム実施</p> <p>白金校舎学生スタッフ春学期合宿実施</p> <p>ノートテイクボランティア説明会開催</p> <p>ボルネオ・スタディツアー催行</p>	

10月	<p>ノートテイク講座開催</p> <p>2010年度日米NPOボランティア体験学習プログラム説明会開催</p> <p>パソコンノートテイク講座開催</p> <p>国際機関実務体験プログラム説明会開催</p>
11月	<p>公開講演会「大学での障がい学生支援—理解から、自立できる共生社会へ—」開催(学生サポートセンターと共催)</p> <p>NPO 法人ぱれっと主催のファッションショー「ぱれ☆コレ 2010～融合と発見」開催(NPO 法人クーピーアートファッショングループと共催)</p> <p>白金アートミュージアム・俳句ワークショップ開催</p> <p>2010年度日米NPOボランティア体験学習プログラム開始</p> <p>春休みボランティア説明会開催</p>
12月	<p>ボラチャレ 2010 中間報告会開催</p> <p>「白金合コン 2010」開催</p> <p>ジャングルクリスマスフェスタ in 白金 2010 開催</p> <p>ノートテイク交流会開催</p> <p>第2回ボランティアセンター運営委員会開催</p>
1~3月	<p>とつかプロジェクト学内報告会開催</p> <p>国際機関実務体験プログラム実施</p> <p>白金校舎学生スタッフ秋学期研修会実施</p> <p>横浜校舎学生スタッフ合宿実施</p>



ボランティア活動保険の加入代 行(4月・5月・6月・7月・10月・11月・12月・1月)

2010 年度ボランティアセンター運営委員

大 西 晴 樹 (学 長) 【委員長】
松 原 康 雄 (副 学 長)
BROWNE, Charles M. (文学部)
服 部 圭 郎 (経済学部)
浅 川 達 人 (社会学部・センター長補佐)
西 村 万里子 (法 学 部)
平 山 恵 (国際学部)
長谷川 康 男 (心理学部)
猪 瀬 浩 平 (教養教育センター)
藤 原 淳一郎 (法科大学院)
司 馬 純 詩 (宗教部長)
齋 藤 綾 子 (教務部長)
花 田 安 弘 (学生部長)
櫛 田 繁 輝 (事務局長)
原 田 勝 広 (センター長)
李 永 淑 (コーディネーター)
市 川 享 子 (コーディネーター)

2010 年度ボランティア活動推進委員

原 田 勝 広 (センター長) 【委員長】
浅 川 達 人 (社会学部・センター長補佐)
勝 俣 誠 (国際学部)
緒 方 明 子 (心理学部)
猪 瀬 浩 平 (教養教育センター)
唐 木 富士子 (学外有識者)
植 田 義 明 (学外有識者)
李 永 淑 (コーディネーター)
市 川 享 子 (コーディネーター)
齐 藤 瞳 (学生スタッフ)
日 高 大 樹 (学生スタッフ)

2010 年度ボランティアセンタースタッフ

原 田 勝 広 (センター長)
浅 川 達 人 (センター長補佐)
李 永 淑 (コーディネーター)
市 川 享 子 (コーディネーター)
早 川 きみ子 (非常勤コーディネーター)
中 川 玲 子 (非常勤コーディネーター)
武 村 美津代 (ボランティア支援課長)
中 山 眞 澄 (ボランティア支援課長 (横浜))
森 下 亜矢子
酒 井 弥 生
古 坂 由美子

明治学院大学ボランティアセンター規程

2010年3月12日 第700回常務理事会承認

2010年2月17日 大学評議会承認

2010年1月15日 第698回常務理事会承認

2009年12月18日 大学評議会承認

(設置)

第1条 明治学院大学（以下「本学」という。）に明治学院大学ボランティアセンター（以下「センター」という。）を置く。

(目的)

第2条 センターは、共通教育機関として、「他者への貢献」(Do for Others)の精神にのっとり、ボランティア活動を通じた人間教育を行うことを以て目的とする。

(業務)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、以下の業務を行う。

- (1) サービス・ラーニング・プログラムの企画、実施
- (2) 学生によるボランティア活動の立ち上げなど、学生の自主的活動の支援と助言
- (3) 地域貢献を目指した地域社会との協働によるボランティアプログラムの開発
- (4) 学内外のボランティア活動に関する情報収集と学生への情報提供および相談への対応
- (5) 教職員への情報提供とボランティア活動参加に関する機会提供
- (6) 本学におけるボランティア関連科目に関する協力
- (7) その他、学生等のボランティア活動の促進に必要な業務

(運営委員会規程)

第4条 センターの組織および運営に関する重要事項を審議するため、明治学院大学ボランティアセンター運営委員会を置く。

2 センター運営委員会規程は、これを別に定める。

(構成)

第5条 センターに次の職員を置く。

- (1) センター長 1名
- (2) センター長補佐 若干名
- (3) ボランティアコーディネーター 2名
- (4) 非常勤ボランティアコーディネーター 若干名
- (5) 事務職員 若干名

(センター長)

第6条 センター長は本学専任教員の中から学長が任命する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

2 センター長は、センターの業務を統括する。

(センター長補佐)

第7条 センター長補佐は、本学専任教員の中から、センター長の推薦に基づき学長が任命する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

2 センター長補佐は、センター長の業務を補佐する。

(ボランティアコーディネーター)

第8条 ボランティアコーディネーターの任用等は、「ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

2 非常勤ボランティアコーディネーターの任用等は、「非常勤ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

(評価・評価委員会)

第9条 ボランティアコーディネーターは、3年ごとにセンター長の設置する評価委員会による評価を受ける。センター長は、その結果を学長に報告する。

2 非常勤ボランティアコーディネーターは、契約更新時にセンター長が設置する評価委員会による評価を受ける。センター長は、その結果を学長に報告する。

3 前2項に基づき設置する評価委員会は、副学長、学生部長、センター長、センター長補佐、大学事務局長、その他センター長が指名し運営委員会の承認を得た者から構成する。

(活動推進委員会)

第10条 センターに、その事業の円滑な遂行を図るためボランティア活動推進委員会(以下「推進委員会」という。)を置く。

2 推進委員会は、センター長の諮問に応じて助言または提案を行い、若干名の推進委員によって構成される。

3 前項の推進委員は、ボランティア活動に識見を有する専任教職員、学生等、およびボランティア活動についての学外の有識者・実務家(2名以内)からなり、その任期は2年とし、再任を妨げない。専任教職員にあっては、所属長の推薦により、その他の者にあっては運営委員会の議を経て、センター長が委嘱する。

4 センター長は、必要に応じて推進委員以外の者を陪席させることができる。

(学生スタッフ)

第11条 センターの業務の遂行にあたって、センター長は、学生の参加と協力を求めることができる。

(規程の改廃)

第12条 本規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て大学評議会および常務理事会の承認を得なければならない。

付 則

- 1 この規程は、2001年7月18日から施行する。
- 2 この規程の施行により、「明治学院大学ボランティア・センター暫定規程」は廃止する。
- 3 2002年4月1日一部改正施行（第3条第2項、教養教育センター設置による。）
- 4 2004年4月1日一部改正施行（第3条法務職研究科設置および委員にセンター長補佐追加による。）
- 5 2004年8月1日一部改正施行（第4条ボランティアコーディネーター、事務職員数の変更による。）
- 6 2005年11月1日一部改正施行（第7条ボランティアコーディネーター任用等に関する規程の新設による。第8条評価・評価委員会、新設）
- 7 2006年1月1日一部改正施行（コーディネーターを運営委員会委員とする。非常勤コーディネーターを新設する。）
- 8 2006年1月1日一部改正施行（第7条2項非常勤ボランティアコーディネーター任用等に関する規程の新設による。）
- 9 2006年4月1日一部改正施行（第3条事務局職制変更による）
- 10 2010年4月1日一部改正施行（基本理念策定委員会の答申に基づき、第2条目的および第3条業務を見直し、第4条運営委員会規程を別途新設し本規程から削除、第5条センター長補佐の人数を変更、第7条センター長補佐は専任教員の中から選する、第9条2項に非常勤ボランティアコーディネーターの評価を明記、3項の評価委員会構成メンバーにセンター長補佐を追加、第10条4項推進委員会参加メンバーを弾力化する条文を追加）。

ボランティア情報の取り扱いに関する方針

2007年5月17日

明治学院大学ボランティアセンターでは、以下に該当するボランティア募集团体の活動を、センターを通して紹介します。

- 1) 公益性・公共性が高い活動。
- 2) 営利を目的としない活動。
- 3) 活動にあたり、安全性が高いと判断される活動。
- 4) 受け入れた学生に対し、教育的配慮を伴った対応をする活動。

1：ボランティア募集の受付

- ・ ボランティアセンターに電話・e-mail等で団体登録希望とご連絡ください（受付時に、簡単な聞き取りをさせていただきます）。
- ・ ボランティアセンターから、e-mailもしくはファックス、または郵送で「登録用紙」を送らせていただきます。
- ・ ご記入いただきました「登録用紙」と一緒にパンフレットなど団体概要のわかるもの（2部）、団体の責任者および担当者の名刺（各2部）、ボランティア募集チラシ等（A4サイズ・20部程度）を郵送、もしくはボランティアセンターまでお持ち下さい。
- ・ 登録完了後、白金・横浜両校舎のボランティアセンターにて、お預かりしたボランティア情報をポスターやチラシ等で周知します。

※その他

- ・ ボランティア募集团体には、規約、役員名簿、収支報告書、活動報告等の団体の実績が分かる書類等の提出をお願いすることがあります。あらかじめご了承ください。
- ・ 本学生がボランティア活動をおこなった際に、募集の条件と異なる状況が生じた場合、精神的・肉体的苦痛を受けた場合等には、ボランティアセンターが活動先と調整、苦情申し出等の対応をいたします。
- ・ 個人でボランティア募集を希望される場合は、居住地域または通学先・勤務先の社会福祉協議会等のボランティアセンター、その他関連機関へご依頼ください。

2：ボランティア募集をおこなう団体・活動の選定基準

1) ボランティア募集をおこなう団体の範囲

活動分野や範囲、法人格の有無は問いません。

〔団体例〕：ボランティア・市民活動団体（任意団体、NPO団体）、社会福祉法人、医療法人、学校法人、社団法人・財団法人等の公益法人、国や地方自治体、独立行政法人、国連機関、大使館、企業、労働組合など。

※企業においては非営利による社会貢献活動に限ります。

2) ボランティア募集团体の受け入れ体制について

- ・ボランティアの募集や受け入れの担当者が明確であること。
- ・有償活動とボランティア活動を明確に区別していること。

3) 以下に該当するボランティア活動は、受付できません。

- ・政治的・宗教的活動を目的とする活動。
- ・危険が伴うもの。
- ・人体に有害なもの。
- ・法令に違反するもの。
- ・公序良俗に反するもの。
- ・受付時に不審な状況が見受けられるもの。
- ・その他不相当だと判断されたもの。

3：ボランティア受け入れ団体との申し合わせ

ボランティア受け入れ団体と明治学院大学ボランティアセンターとは、以下の点を申し合わせ事項として確認いたします。

- ・ボランティア申し込み者に対し、活動内容や条件等を提示し、その内容について両者の間で合意の上、活動をはじめること。
- ・活動をはじめる前には、オリエンテーション等を実施し、活動に必要な情報や留意点をあらかじめ伝達し、活動がはじまった後は、必要に応じて研修・支援等をおこなうこと。
- ・ボランティア活動中は、各団体ボランティア担当スタッフとともに活動をおこなうこと。
- ・ボランティア申し込み学生がボランティア保険に加入済みであることを確認してから、活動をはじめること。

4：活動時間

- ・活動時間は、休憩を入れて1日8時間、週28時間を超えないでください（外国人留学生の資格外活動における就労時間に準拠しています）。
- ・夜10時以降の深夜活動を禁止します。

5：のぞましくないボランティア活動

- ・精神的、肉体的苦痛が心配されるもの。
- ・水泳監視、ベビーシッター、病人の介護等の人命にかかわることが予想されるもの。
- ・車の運転が活動の内容に含まれるもの。
- ・宿泊を伴うもの（キャンプボランティアなど、適切に夜間睡眠が確保される活動についてはこの限りではありません）。
- ・本来有資格者によってなされるべき活動。

6：禁止事項

学生がボランティア保険に加入しないで、ボランティア活動をおこなうこと。

7：免責

ボランティアセンターで紹介するボランティア情報に関して、発生したトラブル等に対しセンターでは責任を負いかねます。あらかじめご了承ください。

明治学院大学ボランティア情報システム利用規約

(目的)

- 1) 明治学院大学ボランティア情報システム（以下、本システムという）は、明治学院大学ボランティアセンターに寄せられるボランティア情報を公開することにより、主として本学（院）生及び他大学生（一般も含む）のボランティア活動への参加をより活発にすることを目的とします。
- 2) 明治学院大学ボランティアセンター運営管理による本システム団体についての情報やボランティア活動の募集情報を掲載することにより、団体の提供するボランティア活動への理解と多くの学生の参画を得られることを目的とします。

(利用者)

- 1) 利用者とは、本システムが指定する手続きにより本システムを利用する、主として本学（院）生及び他大学生（一般も含む）と情報を掲載する団体をいいます。

(総則)

- 1) 利用者は、この規約の全ての内容に同意し遵守する場合にのみ、明治学院大学ボランティアセンターが運営管理する本システムを利用できます。
- 2) 利用者は、明治学院大学ボランティアセンターが発する「利用をはじめる前に」及び「ご利用上の注意」もこの利用規約に準じるものとし、利用者の責任において本システムを利用できます。
- 3) 本規約の内容は、必要に応じて変更することがあります。ご利用の際には、本システムに記載されている最新の利用規約をご参照ください。

(情報の取り扱いについて)

- 1) 利用者は、本システムのサイトから得たいかなる情報もサイト上でのみ使用する以外に、複製、販売、出版その他いかなる方法においても利用できません。

(IDおよびパスワードの管理責任について)

- 1) IDおよびパスワードの管理とその使用は利用者の責任とし、使用上の過誤または第三者による不正使用等について生じた損害については、明治学院大学ボランティアセンターは責任を負わないものとします。
- 2) 利用者はIDおよびパスワードを第三者に開示、貸与または譲渡してはなりません。

(禁止事項、情報の削除について)

1) 本システムでは、以下の行為を禁止します。

- ・システムの破壊または運営を妨害する行為。
- ・利用者あるいは第三者を誹謗または中傷したり名誉を傷つけるような行為。
- ・利用者あるいは第三者の財産、プライバシーを侵害する行為。
- ・公序良俗に反する行為、および犯罪行為を誘発するおそれのある行為。
- ・法律に反する行為。
- ・利用者の活動を妨害、または他の利用者に活動を強要する行為。
- ・営利活動、政治活動、宗教活動あるいは個人または特定の集団による主張・思想・教養の実践を目的とした行為。
- ・本システムで利用しうる情報を改ざんする行為。
- ・その他、本システムの目的から不相当と判断される行為。

2) 1) に規定する行為に抵触すると判断された場合は、明治学院大学ボランティアセンターは利用者に通知することなく、掲載された情報を削除することができます。

3) 掲載された内容が、本システムが定める期間を経過した場合、あるいは、システム上悪影響や障害を及ぼす場合には、明治学院大学ボランティアセンターは利用者に通知することなく、これを削除することがあります。

(免責について)

1) 明治学院大学ボランティアセンターは、本システムの利用により発生した損害全てに対し、いかなる責任を負わないものとします。

2) 利用者が本システムを利用することから生じた他者に対しての損害に関しては、利用者は自己の責任をもって解決するものとします。

(システムの変更および停止について)

1) 明治学院大学ボランティアセンターは、良好なシステムを維持するために、その管理運営を一時的に停止し保守点検増設など必要な作業を行うことができるものとします。

2) 明治学院大学ボランティアセンターは、システム内容変更や運営諸条件、規則などの変更について、利用者に事前通知することなく行えるものとします。

この規約は、2005年3月27日より適用いたします。

2007年2月19日 一部改正

2007年9月21日 一部改正

明治学院大学ボランティアセンター団体登録票 / VIS 利用申込書

団体の種類 (ふりがな) 団体名	<input type="checkbox"/> 公共機関 <input type="checkbox"/> 教育機関 <input type="checkbox"/> 社会福祉法人 <input type="checkbox"/> NPO 法人 <input type="checkbox"/> その他()		記入日(年/月/日) / /
住所1 (本部)	〒 -		
住所2(あれば)	〒 -		
連絡先 TEL FAX	E-MAIL URL		
代表者名	担当部署名	担当者名(複数名の場合は全て)	
活動分野(3つまでチェックしてください) <input type="checkbox"/> 高齢者 <input type="checkbox"/> 障がい者 <input type="checkbox"/> 子ども・青少年 <input type="checkbox"/> 心理 <input type="checkbox"/> まちづくり <input type="checkbox"/> 国際協力 <input type="checkbox"/> 祭り・イベント <input type="checkbox"/> 音楽・美術・芸能 <input type="checkbox"/> スポーツ <input type="checkbox"/> 平和・人権 <input type="checkbox"/> 動物 <input type="checkbox"/> 環境 <input type="checkbox"/> 路上生活自立支援 <input type="checkbox"/> 災害 <input type="checkbox"/> 医療・保健 <input type="checkbox"/> スタディツアー・ワークキャンプ <input type="checkbox"/> インターンシップ <input type="checkbox"/> 中間支援 <input type="checkbox"/> その他()			
団体紹介(目的や活動内容など)		設立()年()月	
ボランティアの活動内容(具体的にご記入ください。複数ある場合には全てご記入ください)			
◆ボランティアの種類 <input type="checkbox"/> 単発ボランティア <input type="checkbox"/> 継続的なボランティア ◆交通()線()駅より徒歩・バス()分 ◆交通費の支給 あり / なし / 一部支給() ◆その他の補助() ◆グループやサークル等、集団でのボランティア参加 可 / 不可 / 条件つきで可(条件) ◆外国人学生の受け入れについて 可 / 不可 / 条件つきで可(条件) ◆明治学院大学ボランティアセンターをどこで知りましたか()			
その他			
※必ずご記入ください「ボランティア情報の取り扱いに関する方針」に同意し団体登録します。 責任者または担当者 所属〔 〕 署名〔 〕			
※VISへの登録を希望される場合は必ずご記入ください 「明治学院大学ボランティア情報システム利用規約」に同意し明治学院大学ボランティア情報システム(VIS)に登録を申し込みます。 責任者または担当者 所属〔 〕 署名〔 〕 登録メールアドレス〔 〕			

この登録の有効期限は2013年3月31日です。次回の更新手続きは2012年度末です。

(2010年6月作成)

内部処理欄(以下は記入不要です)

受付/承認日	担当者	備考

承認日	担当者	備考

変更日	担当者	備考

ボランティアセンター記入欄
VIS 受付日・ID

/ .

明治学院大学ボランティアセンター報告書 第7号 2010

発行 2011年3月31日

発行者 明治学院大学ボランティアセンター

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

明治学院大学白金校舎本館1F

TEL・FAX 03-5421-5131

〒244-8636 神奈川県横浜市戸塚区上倉田町1518

明治学院大学横浜校舎4号館1F

TEL・FAX 045-863-2056

E-mail voluntee@mail.meijigakuin.ac.jp

<http://voluntee.meijigakuin.ac.jp/>

表紙デザイン 佐藤可土和

印刷 相和印刷株式会社